
ミラールの子作り日記

秋月 実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラールの子作り日記

【Nコード】

N4590U

【作者名】

秋月 実

【あらすじ】

ミラールは子作りチート能力を持った転生者。

目標は、優秀な子供達に養ってもらう事。

町娘から始まって、どこまでのし上がれるのだろうか。主人公は女性ですが、ホモは沢山出てくる予定です。ご注意ください。

9/11日。時間経過をへたくそな方法で一目でわかるようにしました。後は登場人物の所をご確認ください。読みにくい小説で本当に申し訳ありません。ちなみに登場人物は、本編内の時間が一年進むことにほぼ全ての人物欄が更新されるので、こまめに見て下さ

ると有難いです。
エピソード含め、完結しました。こゝ愛読ありがとうございます。

一話 まずは冒険者を作りたい

【全てが始まったのは、私が17歳の日、シエスティアの月の七日だった】

キャラクターエディター。

転生に際し、私、ミラールの貰った能力である。チートである。超チートである。

転生に関しては、まあありきたりなので飛ばそう。

今の私は酒場で働いている。これだけわかってもらえばいい。

問題は、この能力。子供のステータスを、プレイヤーキャラを作るように弄る事が出来る能力。

そして、それに付随してステータスやスキルツリーとスキル詳細を見る事が出来る能力が私には備わっている。

当然、年頃になった私は目を皿のようにして良いステータスの男を探した。

特に初めの子供は、いいステータスの子を産んであげたい。

けれど、そうそうちょうどいい時に、めばしい男の人が見つかるわけも無く。諦めかけていた時だった。

それは、私の誕生日だった。

深いフードを被った男の人が、酒場に入ってきた。

私はそれを見て、目を見張る。

あらやだ、この人魔術師の素質があるわ！それに、緑を育てる力もですって！？イントも高い。ええっ遺伝子の中かなりの力や素早さの素質があるじゃない！この人の素質は魔力を除いては人並より少しい程度だけど、その血のポテンシャルは尋常な物じゃない。

あらやだ、あらやだ。こんな機会、これっきりだ。

私は急いで注文を取りに行った。

「かつこいいお兄さん、ご注文はなんですか？ お勧めは……」

その人は私を見て昏い瞳で告げた。

「私が格好良いだと？ この黒髪に黒眼が？」

フードを取って現れたのは、黒髪、黒眼の、人よりも少し整った顔。

私は見惚れた。主にそのステータスに。ちなみに、黒髪黒眼は何故か敬遠されていたりするが、元日本人の私には当然そんな意識はない。

「はあ……かあつこいい……お名前は？ 私の名前はミラールです。私、もうすぐ仕事が交代の時間なんです。冒険の話聞かせてほしいな。その格好は多分、旅人でしょう？ あ、そうだ。お礼におごっちゃいます。好き嫌いはないですか？ ないですね。マスター！注文するから私の給料から引いて下さいー！ えつと……」

適当に注文をして、最高の笑顔で手を振ってその場を離れる。

「絶対ですよ！ 待ってて下さいね」

そう言っ、私は有無を言わせずその人におごってあげた。

さあさあさと戸惑うその人から名前を聞きだし、部屋に連れ込む。

告げられた名はジャック。偽名だって構わない。その素晴らしいステータスの種さえもらえれば。

「ジャック……。初めて見た時から思ったの。貴方は私の運命の人だって」

「随分と惚れっぽいなだな」

ため息をついて、ジャックは言った。

「何でもいいわ。ねえ、来て……。一夜限りで良い。思い出を頂戴」

押し通す形で種ゲット。この種はいつ貰っても良い位なので、上機嫌でまた来てね、と約束して送り出した。

子供の為に、お金は沢山溜めてある。五歳もすれば、冒険者になって稼いでくれるようになるだろう。それ位の才である。それまで頑張って育てればいい。

私はわくわくしながら、キャラクターエディタを作動させた。あまりの選択肢の項目の多さに、クラクラする思いだった。

っていうか、ハーフェルフって何よ。この世界にエルフっていたのね。

悩んだ末、私は魔術師特化の子を作る事とした。

長い耳、黒髪、黒眼。緑を育てる力はもちろんつけた。男にしよう、男に。

もちろん美形。

ふふふふふ、今から楽しみだ。

五ヶ月位した頃だろうか。ジャックが店に訪れて、妊娠している私を見て驚いた。

「あら、ジャック。久しぶり」

「そのお腹は……」

「ええ、妊娠してるの。貴方の子とは限らないし、貴方に迷惑はかけないわ」

その言葉に、安心したりおろおろしたりするジャック。
また来る、と告げて去って行った。

それからもちよくちよくジャックは来てくれるようになり、子供が産まれた時は一緒にいてくれた。

しきりに女の子が産まれた方が良いと言っていたので、性別を変更してあげる。まあ、戦士ならともかく、この子魔術師だしね。
長い耳に、産婆とジャックは激しく驚いていた。

「この子の名は……」

私が名付けようとすると、ジャックが子供を高々と掲げて言った。

「お前の名はヴァレンティナだ！」

ちよ。なんでそんな呼びにくい名前。それでも、子供が産まれたのを喜んでいるのに水を差す気はない。祝福されるのに越した事はないから。

「ティナ、と。そう呼びましょうか」

「う、うむ。しかし、これはまさか……先祖がえりか？ いや、しかし……」

可愛い娘をジャックから取り返し、乳を吸わせる。

この子は魔術師にする。絶対だ。

その為にも、お金を貯めなくては。魔術師には教育が必要だ。
ある程度は、スキル詳細で見れるのだけだね。

小さな手で私の指を握るのが可愛い。

「それで、これからどうするのだ」

「溜めたお金でこの子を育てて、一歳になったら孤児院に預けて働くわ」

「孤児院に!?!」

ジャックは激しく驚いた顔をする。

「昼、預けるだけよ。大丈夫、この子は強い子よ。きっと良い冒険者になるわ。私にはわかる」

「冒険者に!?!」

「いっぱい稼いで、ママを楽にさせてね」

私が子供を撫でると、ジャックはおろおろとしだし、そして小袋を出した。

「この子は、孤児院には預けないでほしい。これは養育費だ」

「あら。この子、貴方の子だとは限らなくてよ」

「この子は間違いなく私の子だ」

私は、ヴァレンティナを抱きしめる。

「言っておくけど、たかが一晩共にしただけの男に夫面はさせない

わ

ジャックは苦笑した。

「心配せずとも、私には妻がいる」

「なら良いわ。そうね。養育費は借りておくわ。ありがとう」

私は子育てをしつつ、更なる良い男……今度は騎士が良い……を探す事にした。

そんな時だった。

酒場に、飛び抜けた資質を持つ男が二人入るのが見えた。フードで素性を隠しているらしいが、身ぶりから位が高い事を伺えた。もちろん、私は追いかける。

二人は奥の席に座ったので、私も何気なく奥の席に座る。

二人は、揉めているようだった。

「……また、見合いの話が出た。そろそろ断るのもきつい」

「バイク……俺が女だったらどんなに良かったか……」

うわあ、ホモですよ、この人達。

二人は切なげに色々と語っている。

最初は引いていた私だが、あまりの真剣さに感情移入してしまった。

それに、この人達の資質は素晴らしく、逃すのは惜しい。炎を操るとか、氷を操るってありますよ。これは魔術とはまた別で、勉強の必要も無いのでぜひゲットしたい。やりたい実験もある。私はちびちびとお酒を飲みながら、機会を伺った。

バイクとやらが出て行き、男が一人となった時、私はそっと男に

近づいた。

「もし。申し訳ありません。お話、聞こえてしまいましたわ。突然ですが、私、素敵な伝説を知っていますの。成功するかはわかりませんが、ぜひ試してみてはいかが？」

「伝説？」

私はもつともらしく頷いてみせる。

「町はずれに、小さな安産祈願の祠がありますわね。そこには秘された女神が住んでいますの。シエスティアの月の七日の真夜中、自分一人、もしくは二人の精子と水を混ぜて、革袋に入れて希望する子供の特徴や性別を書いた手紙と共に奉納しますの。この時、誰にも見られず、一人で奉納する事が大切ですわ。奉納する際に、大切に育てる事を誓って三度礼をして、十日の朝に革袋の代わりに花があれば、願いは聞き届けられ、シエスティアの月の七日の真夜中の12時、誰にも見られずに祠に向かうと、女神が産んで下さった赤ちゃんがいるといえますわ。お礼には、一輪のお花を捧げるのが慣例ですわ。単なる伝説ですけど、諦めるきっかけになるのではないでしょう。もちろん、女神が聞き届けてくれるかは別問題ですけど。女神は双子を産み、片割れを手元で育てられます。女神に事情と素質が認められないと、子は出来ないと聞いていますが」

花である事に意味はない。ただ、子供を受け取ったという目印が欲しいだけだ。

「諦めるきっかけ……そうだ、そうだな。このままではいられない。私も、バイクも……」

「それと、女神に赤子を願ったら、赤子が来るまで決して誰にも話してはならず、赤子が来た後も本当に必要としている方以外に喋ってはいけませんわ。出ないと、女神が怒って災いを呼ぶでしょう。まあ、でたらめでしょうけどね」

「そうか」

彼は考えているようだった。私はそつと下がり、シェスティアの月の七日を待った。

【そして、18歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

ある程度排卵日をコントロールする事は出来るのだ。誕生日に排卵日を合わせる事など、軽い軽い。

八日の明け方、こっそりと向かうと、果してそこには革袋があった。

私は早速革袋を持ち帰って、中の精液のステータスを確認後、私の膣に入れる。

かなり苦労したが、キャラクターエディタ画面は出た。

思惑通り、二人分のデータが提示される。

手紙が達筆過ぎて読みがたかったのが難点だが、どうにか読む事が出来た。

男は割と真剣にびっしりと条件を書いていた。ま、良いけどね。

二人の子、代わりに産んであげようじゃない。

ただし、片方貰うけどね。

とりあえず、実験ついでに最大数の四つ子を作るつもりだ。一卵

性双生児が二人。

男二人に女二人。

一卵性双生児のデータを、どこまで書き換えられるかが問題である。

四人もいると、胎児がくっつかない様にしないといけないし。

しかし、実験には最適だ。私は舌舐めずりをして、データを書き換えた。

ああ、もちろん祠には花を二つ置いておいた。

妊娠したと知って、ジャックには若干シヨツクな顔をされたけどね。

それを機会に疎遠になるように仕向け、赤ちゃんが四人である事を出来るだけ隠しながら育てる。さすがに、産む前後も育てた時も死ぬかと思った。産婆さんにはかなり助けてもらった。

もちろん、その謝礼は養育費から支払った。

【そして、19歳のシェスティアの七の日が訪れる】

私はドキドキしながら男女の赤子を二人、祠の中に入れる。

条件通りの男女だ。男だったら、女だったらという形で書いていたが、どうせだからと両方叶えてあげた。

朝、まだ子供達がいたら、もちろん私が育てるつもりだ。

本当は見たいけれど、騎士は鋭いだろうから、私に気付いてしまつかもしれない。そうすれば厄介な事になるだろう。

八日の朝、心配しながら向かうと、果して子供達は消え、代わりに一輪の花があった。

登場人物紹介（読まないと絶対に話が理解出来ません）（前書き）

設定上、登場人物がかなり多くなるので、書いておきます。
本編更新時期に更新されるはずなので、ちまちま覗いてみてください
い。

登場人物紹介（読まないと絶対に話が理解出来ません）

ミラール

主人公。茶髪に茶色い瞳の、一般的な顔立ち。キャラクターエディターの能力を持つ。

本編後

カトルと共に神聖王国の大いなる母として君臨する。一人で治癒の王族を復興させる。

嘘、本当、デマ、でつち上げの数々の伝説を残す。自分で作った物もあるのは御愛嬌。

老年には、各国の王族の先祖として敬愛され、畏れられる。政治には口を出さず。

子供達（現年齢）

17歳時

ヴァレンティナ（19）

長い耳と黒い髪、黒い瞳の女の子。高い魔術師としての素養と、緑を育てる能力を持つ。

聖なる子として、エルフ達に可愛がられている。

本人は母の事を覚えており、魔術師になるべく小さい頃から魔術について勉強中。

6歳で魔術に初成功した。

7歳で小さな魔術師に。冒険好きな性格で、絶対に失えない能力持ちなので、周囲は宥めるのに苦労したが、今は諦め気味。

実力的には、一人前の魔術師クラス。

ハーフエルフでこの年でこれは、凄まじい天才である。

黒髪黒眼ではあるが、とても可愛らしく、ダークエルフの一族とは「黒髪でしょ、ちょーだい」「ふざけんな」とのやりとりが。

母の噂を風で聞いて、これは迎えに行つて連れてくる事は不可能かと落胆。

一時期落ち込んでいたが、立派な魔術師になつて一度会いに行くと
いう夢は継続中。

11歳で手紙も出し、護身用の術に磨きをかけた。

12歳で母に会いに行き、「弟子」を連れて帰還。

ドランにもちよこつと会う。めちゃくちゃ驚いた。でも乗せてもらつてご満悦。

腹違いの妹弟達も集め、絶賛教育中。

そろそろ婚約者を決めようか、という話が出ている。

14歳にて、婚約者決定。といっても、エルフは厳密な夫婦を作らないのであるが。

15歳。婚約者とラブラブしながら、魔術の研究をする。

16歳。ついに婚約者と結ばれる。

その後、戦争の噂を聞き婚約者と共にミラールの元に駆けつける。

17歳。戦争に勝利後、色々と考える為、婚約者と共に引籠る。

18歳時、婚約者に元気づけられて乗り越える。

19歳時、ミラールの元へ向かう。

本編後

世界を旅する、珍しいエルフとなる。

エルフとして、一流の魔術師として、数々の功績を残す。

子沢山で、沢山の弟子を育て上げたので、緑母と呼ばれた。

18歳時

バトルミー（18）

キースに託される。白髪に赤い瞳。炎の能力を持つ。高い騎士とし

ての素養を持つ。力が強い。

フレッシャー家の嫡男として育てられ、過剰なほど可愛がられて育てられている。

案の定甘ったれで人懐っこい性格となったが、剣術の腕はメキメキ上達中。

兄妹の事は知っており、好きだが自分が兄だと思っている。

妹に大負けして、大ショック。子供の内は女の子の方が強いんです。

10歳で騎士団に入り、訓練中。

12歳で妹から一本取った！ うおおおおお！！

13歳。初めての実戦。泣きました。漏らしました。

14歳。実戦に慣れて来た。元気に走り回り、前に出過ぎて叱られる。

15歳。戦争の噂を聞き、ガクブル。母の為と、震えながらも頑張る。

16歳。自分の発現した力とウエンドントの力に悩み中。

17歳。壁にぶつかり、自棄になり、父に傷まで負わせて呆然自失。ルアンナに殴られる。

18歳。封印の子が産まれた事を知り、ミラールの元へ。
本編後。

將軍にまで上り詰める。最終的に、とても立派で厳格に育つ。

やってしまった数々の失敗談は親類の話の種。

妻の尻に敷かれ、妻と妾の間に計三人の子をもつける。

ハミルトン（18）

赤毛に蒼い瞳。氷の能力を持つ。高い騎士としての素養を持つ。

アイスベルグ家の嫡男として、バートルミーに勝つようお願いかせ

られて育つ。本人はうざいと感じている。双子である事は本能から知っている。また、既に周囲の事を理解できる程度には賢い。

剣術の腕は上達中だが、バトルミーにおされ気味なので凄く悔しい。

バトルミーがルアンナに負け、ショックは二倍。同時に、ロレッタはおしとやかで良かったと思っている。実はロレッタが自分より高い氷の素養を持つ事に気付いていて、自分が一番弱いかも、嘘だよねとおろおろしている。四人の中で一番賢い自覚があるので、勉強を超必死に頑張っている。

バトルミーが吹かすお兄ちゃん風に、まあ僕は兄さんですからね、と微笑ましく見守っている。つまりどっちもどっち。

10歳で騎士団に入り、訓練中。

バトルミーよりは行動が冷静で信頼できるため、12歳にて一足早く実戦へ。自慢！

バトルミーの散々な初陣の結果におろおろ。

14歳。バトルミーがようやく吐かなくなったのでほっとしている。着々と参謀の道を歩みつつある。

15歳。戦争の噂を聞き、覚悟を決める。兄弟だけは守らなくては。
16歳。とりあえず、家族が生還できたことを喜ぶ。色々驚いたけど、乗り越える。

17歳。バトルミーの暴走に驚く。力にならなくては。

18歳。力を封印してもらったんだ、とミラールの元へ向かったバトルミーを追いかける。

本編後

頭脳派の将軍となる。戦争時にはえげつない罠を仕掛けて高笑い。どうしてこうなった。

バトルミーが手が掛からなくなると同時に、空っぽになるのを感じ、その後色々ふっきたのが理由だとか。

今は四人で一番の問題児。もう子供ではないが。
おっとりした妻との間に、子供は二人。

ロレッタ（18）

キースに託される。赤毛に赤い瞳で、氷の能力を持つ。バイクにそっくりであり、可哀想に思ったミラールが氷の強い素養を与えている。おしとやかな子供。

おしやまな女の子に育ち、小さい氷の結晶を作って遊ぶのが大好き。婚約者とは熱愛中であり、道端の花をプレゼントしてもらったり、9割以上コックが作ったお菓子をプレゼントしたり。そんな恋愛を微笑ましく見守られている。

皆騎士団に行ってしまったので寂しい。

11歳の頃、試しに木刀を振ってみて、婚約者に慌てて止められる。あんまり寂しいので甘えつ子に。主に婚約者に甘えている。甘甘。少し早いですが、嫁ぎました。子作りはまだです。

一所懸命に妻としての責務を勉強中。

15歳。戦争の噂に、私も戦わなくちゃ！ と言って慌てて婚約者に止められる。でも自衛の特訓始めました。

16歳。婚約者に縋って只管泣く。一生懸命慰められる。そのままなだれ込んで初エッチ。

17歳。力を殆ど使ってなかった為、力について悩む皆におろろ。ただ使わないようにするんじゃない？ 力の制御が出来ない年じゃないでしょうに。もっともな言い分を聞く者はいない。後妊娠しました。

18歳。生まれた子がそこかしこを凍らせるので涙目。ミラールの元に子供を連れて向かう。

本編後

子供が赤子の頃から学校に行かされる事となったので、なし崩しに

異能の学校の教師となる。小さい子供達の面倒を良く見て、子供達の第二の母として慕われる。
怒ると冷気が漂い、とても怖い。

ロレンス（0）

ロレッタの息子。そこらじゅうを凍らせるのが好き。素養はロレッタ以上。

ルアンナ（18）

白髪に蒼い瞳で、炎の能力を持つ。騎士としての力をかなり高めている。

元は冒険者にさせる予定の子だった為、おてんばに育っている。

6歳で魔物退治について行く事に成功。

見事に小物の魔物を倒し、その勢いは留まる事を知らない。

私は女騎士なる！ との頼もしい言葉に、祖父は嬉しいやら心配やらで大変。

騎士団に無理やり入りました。

11歳でパパから一本取った！ 私無敵！？ と調子に乗っている。
騎士団としては実戦には連れて行ってもらってないけど、休暇中に冒険者として絶賛魔物退治中。着々と実戦経験を積んでいる。

12歳。幸い、婚約者は憧れの目で見ているが、今後それがどうなるかはわからない。

13歳。騎士として手柄をあげた！ 鼻高々！

14歳。手柄を二つほどあげる。もはや天狗となった鼻を折れる者は存在しない……。

15歳。お母様は私が守る！ 婚約者は逃げると説得。

16歳。手柄上げた！ ウェンダントに負けた悔しい！ 地団太を踏む。婚約者、心配したと怒る。ロレッタと同じくそのままなだれ込み（ry

17歳時。バトルミ、未熟すぎつそれでも17歳か！？

18歳時。妊娠した子に、炎の素養を感じ、不安。ミラールの元へ。

本編後。

素質を持った子が小さい頃から大暴れ。たまには結界から出して力の加減の仕方を学ばせないとならない為、騎士を引退し能力者学校の教師となる。

異能者とガチンコで戦い合ったり魔物退治に連れていくのが大好き。

20歳時

ドラン（17）

竜。何と言うか竜。3つで人間形態を取るようになってきた。

四歳でフィールの所へ。

母を泣かせた事は悲しく思っているが、もう離れる心配のない弟に非常によく懐き、大事にしている。

弟を乗せて飛ぶのが大好きな兄馬鹿。

弟の方も騎乗が出来るようになり、あんたら兄弟で竜騎士やるんか

……？

と、内心周囲に心配されている。

竜体がどんどん成長中で、伝説のドラゴンみたいになるのか？ と

ドキドキされている。

騎士団で活躍中。小物な魔物は丸かじりです。猫が獲物を甚振る様に遊びます。

こっそり怖がられたり萌られたり。

ようやく命令通りに動けるようになってきました。

仲間と言うよりは兵器扱いより……。弟の竜騎士っぷりが堂に入ってきた。

後、弟が騎士団に入団して大喜び。

どう見ても兄弟で竜騎士コースです……。

ヴァレンティナがきっかけで、女の子限定で弟以外も背に乗せるように。

13歳。すっかり喜んで女の子を乗せるようになりました。フィール別の意味で心配。

14歳。これは僕の出番！ もしもの時はミラール（娘）を助けるんだよ！

15歳。大暴れした。けど、あれから皆の視線が何か変。頑張ったのに何が悪いのか。

16歳。空へと逃げるように。あちこちを飛んでいる最中に、運命の出会いが。

17歳。娶ってミラールの元へ紹介に。

本編後

女遊びが激しく、生涯で出来た子供は103人。

一人で竜族復活させる勢い。また、女にもてるもてる。

家族で一番長生きをして、その死後は本人の願いでドラゴンの姿で剥製にされ、学校に展示され、子供達に親しまれている。

21歳時

ミケイラ（16）

芸術家の才を持つ女の子。

最近は家族の絵を一所懸命に書くようになった。忘れない内に家族の顔を紙に残すためである。

まともな絵が描けるようになり、老夫婦は最近評判のいいケストに師事をお願いする。

ミケイラびっくり。でも父には名乗り出ない。

ドキドキしながら、父に師事してもらい、弟（だとミケイラは信じている）と共に絵の勉強中。凄く嬉しい。

8歳にて本格的に勉強が始まった。

9歳にして、画家としての頭角を現し始める。

9歳で婚約の話が来ている。

10歳にて婚約を承諾。花嫁修行も始まり、忙しい。
絵は売れるようになった。

家計を助けるべく、絵を頑張る。

12歳。着々と絵の腕前を磨いている。

13歳。自分には何も出来ないと言を噛みしめる。

14歳。狂ったように戦争の絵を描き続ける。

15歳。エイブにもう良いんだ、と抱きしめられ、涙腺決壊。この頃から画風が変わる。

16歳。望む未来を、希望を描き始める。戦争の絵はやたら高値で売れました。

本編後

結婚し、高名な画家となる。

別名で漫画も発行し、漫画文化を花開かせる。

忙しかった為か、子供は一人だけ。

エイブ（16）

芸術家の才を持つ男の子。ケストに教えてもらって遊びはもっぱら御絵描きに限定されている。この子は将来、優秀な絵描きになるに違

いない！ とはケストの言葉。

ミケイラと一緒に絵を掛けて、幸せ。でも同じく妹よ！（とエイブは信じている）とは名乗り出ない。どちらが先に生まれたかと言う認識以外は、お互いに通じ合っている。

ミケイラを見習って、ちょこちょこ勉強中。

9歳にして、画家としての頭角を現し始める。

ミケイラの婚約話に置いて行かれそうで不安。

絵は売れるようになった。

幼いながらに、独り立ちとお嫁さんを娶る事を考え始める。

独り立ちの為の勉強始めました。

12歳で絵を売る許可を得る。休日は路上で絵を販売中。

13歳。父と共に疎開開始。

14歳。帰ってきました。ミケイラの絵に圧倒されつつも、傷ついたミケイラの何とかできないかと右往左往。

15歳。もう耐えられない。ミケイラを抱きしめ、絵を描く事をやめさせる。

16歳。縋る様な希望の絵。これはこれで心配。ミラールの元へ、ミケイラを連れていく。

本編後。

ミケイラを良く助ける。生涯結婚はしなかったが、愛人はいっぱい作った。

出来た子供は7人。

ただし、全ての子供に援助をした。

22歳時

レイナール（15）

高い知能を持つ男の子。若干身体能力は低い。

小さい頃のお気に入り、ロイに書類を読んでもらう事。意味はわからずとも、気分はちいちゃな文官なのである。

6歳まで真面目に将来ミラーの家の稼ぎ頭になる為、勉強を頑張っていた。

環境が激変し、おじいちゃんだよ！とか、新しいお父さんだよ！

と知らないおっさん達に言われ、大混乱中。理屈はわかってても、感情では理解出来ない……！

買ってもらった本は嬉しいから読むけども。文官を模してしたてた服も着るけども。

教育熱の予先がレイナールに行った為、脳筋気味だった宰相の養子の騎士は内心大喜び。

宰相は勉強熱心な新たな孫に夢中。

ロイをロビーとポーラに取られたようで納得いかないが、宰相が可愛がってくれるので我慢。

爺馬鹿にも慣れてきており、期待に応えるべく努力中。弟もよく可愛がっており、関係は良好。

最近宰相の仕事にちょこちよこつて行っている。

11歳で宰相ごっこを覚えた。大人の真似をするレイナールを微笑ましげに見守る宰相。

12歳。戦争の噂に不安。宰相にべったり。

13歳。戦争が終わった事、自分達兄弟の扱いに不安。

14歳。仕事始めました。色々戸惑う。

15歳。兄弟の行く末を心配。彼らを救う為ならどんな事でもする

覚悟。とりあえず、ミラールの元へ。

本編後。

宰相にまでのし上がる。王家の血筋を引き、やや高い頭脳と光の能力を持つレオン、そして同じく高い頭脳を持ち、雷の能力を持つロビーを蹴落とし、頭脳一本で宰相までのし上がったのだから快挙である。

その後、宰相の教えを良く守り、国を肥えさせる。

子供はおしとやかな妻の間に二人。

23歳時

ウォルト（14）

高い知能と才能開花の才を持つ男の子。教師にうつてつけ。

アゼルとその教え子たちに可愛がられ、既に英才教育を受けている。お気に入り遊びは講義ごっこ。

二歳の頃にはただの真似っこだった講義ごっこに、意味ある言葉を使いだし、最近は自分が発見したいちやな出来事を講義している。凄く微笑まशीと共に、物真似が美味い。

7歳で隣国にお引越し。

子供達に講義ごっこするの楽しい。

講義をする外見だけはいっぱしの教授そのもの。

かなり簡単な授業の講義が出来るようになり、子供達の成績を伸ばしている。

能力の事を知り、先生になるんだ！と夢を固めて張り切って講義ごっこ勉強に勤しんでいる。

10歳になり、正式に小さい子達の授業を受け持つ事に。

11歳。戦争の噂に不安。

12歳。戦争を直に見て、悲しむ。しかし、弟の事を知り、復活。父と共にエルフの森に向かう。

13歳時。ウォルターとついに感動の対面。一所懸命に元気づける。
14歳時。ようやく外に出す事に成功。行こう、母さんの元へ。

本編後

異能学校の教師となる。一般科目を担当して、子供達に高い人気を誇る。

よく子供達の相談に乗り、助ける。

後に教え子と結婚する。子供は一人。

ウォルター（14）

高い知能と才能開花の才を持つ男の子。教師にうってつけ。

ロイヤレインールがいなくなり、大ショック。

自分が頑張らなきゃ！と必死で勉強開始。ただ、自分もどこかに連れてかれないかとドキドキ。今はエルフの所からちゃんと返されるのだろうかドキドキ。

7歳でヴァレンティナについて、魔術のあれこれを現在勉強中。

剣、弓、魔法、学問等、オールマイティーな教師になるのが夢。

8歳で三人の緑を芽吹かせる能力を開花させ、大人気。能力の操作方法を学ぶ。

剣、弓も習い始めた。勉強三昧の日々。

10歳の教師の噂を聞き、ショック。兄に負けまいと頑張る事を決意。

11歳。母の元に駆けつけようとするが、エルフ達に全力で止められる。

12歳。戦争の噂を詳しく聞くにつけ、引籠る。

13歳。ウォルトに助けられつつも、その強さに嫉妬。

14歳。泣いてばかりじゃ駄目だ。ウェンダントの方がもっと辛い。封印の末弟の話聞き、ミラールの元へ。

本編後。

異能学校の特別科目を教える。さりげなくウォルトのような教師になりたいと頑張る。

子供達からは人気。

どこか甘えん坊な所があり、姉御肌の奥さんとラブラブ。5人の子を残す。

ミラール（14）

ミラールの名を継ぐ正当なる継承者。キャラクターエディターの能力を持つ。

密かにミラールに英才教育中（能力を使う意味で）。

最近の趣味は殿方ウォッシングと母との品評会。

革袋の品定めに加わらせてもらえるようになりました。

子供の教育が出来なくてはと、7歳でヴァレンティナに弟子入り。

ウォルターと共に魔法の学問を学ぶ。これも当主としての勉強である。

8歳で男の子のステータスを見て教育相談に乗っている。

ステータスと能力の感覚のすり合わせに熱心。

数値を見れば、大体これぐらいの能力、というのが理解できるようになってきた。

一通りの初級の学問を学び、逆に一流の教育には叶わないと判断。

ミラールと相談し、方針を変更して勉強しつつ初めての相手、いい男探しを始める事に。

一人帰還する事にして、男爵家を支える手駒としてどのような者が相応しいか、作戦会議。

10歳にして、ミラールから家と神殿を守っていく覚悟を問われる。

11歳。母の隣で戦争の行く末を見極め、母が堕ちたその時は全力で逃げ伸びる覚悟。

12歳。私がしっかりしないと！子を産めるようになるまで、まだ四年もある事に地団太。

13歳。もうすぐ、初の夫決め。未だに候補が決まっていない事に

イライラ。母にスピアを作る余裕が無くなったので、尚更必死。
14歳。本気でミラールの名を継ぐに足る子を探し始める。
本編後

ミラールは能力者の子とその子が起こすかもしれない破壊を恐れなかった。権謀術数を駆使し、危惧する周囲の国を宥め、全ての能力者の母とされるほど、沢山の子を孕む。
その神殿と経営する異能学校の権勢は凄まじかったが、決して政治には直接関わらぬように中立を保った。
同能力の後継者は三人作った。
一般に、始祖ミラールと言えばこのミラールを指すようになるほど、権勢を強めた。

24才時

ナイト（13）

雷を操る力を持つ。正当なる伯爵家の血を引く。
ボールの手を余らせるほど元氣。

5歳で父のボールと共に伯爵家に引き取られ、環境変わってびつくり。伯爵におじいちゃんだと言って言われた。毎日可愛がってもらってる。

嬉しい！ もっと構えもつと褒めれ。

5歳の時、棒きれ振つてるとさすがワシのひ孫！ 今から心は立派な騎士！ と煽てられたのでその気になった。

今は一所懸命ちいちゃな木刀を振っている。

6歳でロビーとポーラがという妹弟が出来、サイラスを思い出してうるり。

時々遊びに行く事を誓う。

立派なお兄ちゃんやっています。伯爵の心得やしきたりも覚えて来た。剣術が形になり始めました。

9歳にして、すばしっこく雷剣も操れるように。のびのびと育つ。
10歳。出陣の準備をする伯爵に、僕も行くと駄々をこねるが断られる。

11歳。もうどこにも行っちゃだよ、おじいちゃん。

12歳。色々大人の事情を理解し始める。雷撃を起こして、そんな自分の手を眺める日々。

13歳。悩んでるより、行こう。ミラールの元へ。

本編後

立派な騎士となる。伯爵の後を立派に継ぎ、妻と妾の間に7人の子を残す。

後に名を歴史書に残す程有名な騎士となったが、寂しがり屋だったと歴史書に記される。

25才時

エリザベス（12）

アニマル操作の力を持つ。

最近、何故自分が違う力を持つのかというのが悩み。

アラートに甘えるのが大好きで、自分は本当はアラートの子供なのでは、と子供ながらに悩んでいる。最も、「お友達」に遊んでもらうとすぐに忘れるのだが。

四歳でお友達は三匹までに増えました。もはや公然とアラートにべったり。

アラートのお家の子になる！ といって周囲を振りまわしている。

5歳でアラートの家の養子になりました。完全勝利。

せつせと弟達にお姉さん風を吹かせている。

アラートの元で本格的な訓練開始。エリザベスは姫將軍の座を狙う

気である。

でも礼儀作法もみっちり仕込まれてます。

6歳にて自在に5匹の「お友達」を自在に操る。

狼のお友達ゲット。お友達に出来る幅がぐっと増える。

婚姻がどうのこうの言ってるけど、訓練さえしてくれるなら何でもいいや。

8歳。何か周りが騒がしいけど、私には関係ない！ とばかりに武者修行で家出。

9歳。修行の旅から母の危機に帰還。

10歳。小さな軍一つを獣の餌に変えた自分の力に呆然。力について悩む。

11歳時。それでも、私にはこれしかない。力を磨き続ける。

12歳時。自分が何を望むのかもわからないまま、ミラールの元へ。
本編後

動物達をいつから武器と思うようになっていたのか。その事に気づき、グローレン達に感謝。ふっきれたエリザベスは、再び武者修行の旅へ。その後、姫將軍に収まる。

自分より強い男としか結婚しない……はずだったが、土下座されてうっかりほだされる。

その後、三人の子を産む事となる。

シャーロット（12）

大地操作の力を持つ。癒しに特化している。

皆が可愛がってくれるので、小さいながらに天狗になっている。しかし小さいので微笑ましい。

いつ厳しく教育方針を切り替えるべきか、周囲の大人達に非常に悩まれている。

しよつちゅう高笑いしているので、そろそろやばいかも知れんと思
い始めている。

でも、いざおねだりされると誰もその可愛さに逆らえない。

エリザベスのお友達の治療で、治癒能力が発覚。大騒ぎになって目
を回している。

5歳の時、エリザベスは妹分です。よその家の子になる事に納得が
いかない！ などと駄々を捏ねていたが、自分がそれどころではな
くなって断念。

強がっているが、あんまり崇められ過ぎて怖がっている。

自然、クレバーにべつたりと張り付きたがるが、女神としてのだ
うのこの言われてあまり叶えられない。

婚姻のドサクサに紛れて両親の元に逃げ込むつもりなので、全力で
婚姻賛成。

8歳時。結婚おめでとう！ やっほう自由だ！ もはや両親から絶
対に離れない覚悟。ライトもアラートもクレバーも私の物。

9歳。自分と同じ癒しの力で戦争が起きた事にビビっている。お父
様達お兄様達、助けて！

10歳。勢いに乗って大変な事をしてしまった。引籠って泣く。

11歳。崇める人々がうざい。こんな力、無くて良かったのに。

12歳。ミラールの所へ向かう。

本編後。

崇める人々は上手く裁けるように。生涯、甘えん坊な性格は変わら
なかった。

引く手あまただったが、自国の貴族と普通に政略結婚。

愛し愛され、四人の子を孕み幸せに生きた。

ウェンダント（12）

大地操作の力を持つ。土を操る力に特化している。

その才能は凄まじく、大人になれば洒落にならない威力となる。

アストレンジと遊ぶのが楽しくて仕方ない。

時々リライトの父にお持ち帰りそうになるので子供なりに警戒。

4歳で土を飛ばして遊べるようになり、5歳で武器として扱えるように。

危ないので、早くも帝王学などの勉強開始。

力を抑える為、リライトがべつたりくつついている。

シャーロットの力がちやほやされる事に嫉妬。

5歳時では俺の方が凄いと信じていたが、最近は自信消失。

リライトに懐いている。

リライトの嫁入りには賛成。ずっと一緒にいられるから。

8歳時。やった！ と思ったら特等席にシャーロットがいた。第一次親争奪戦が今始まる……！

9歳時。一時停戦。俺も戦えると父に進言。

10歳時。産まれちゃいけなかったのかな、と言ってリライトに怒られる。

11歳。色々悩む。自分の力とは何なのか。

12歳時。封印の噂を聞き、自らミラールの元へと向かう。

本編後

立派な王となる。大きすぎる力に悩む事もあったが、お気楽なシルフィスが支えることで持ち直す事が出来た。シルフィスとは良い相棒となる。

妻と妾の間に、5人の子を作る。

アストレンジ（12）

大地操作の力を持つ。鉱石作りに特化している。

その才能は凄まじく、大人になれば洒落にならない威力となる。

ウェンダントと遊ぶのが大好き。

おっとりした性格で、ウェンダントに心配されている。

鉱石コレクションが趣味。

女性にプレゼントすると喜んでくれる為、女好きに傾倒しつつある。リライトや騎士達が、攻撃特製の強いウェンダントに気を取られているのが要因。

両親の俺への愛情、薄いんじゃない？ と悩み、ますます女の子や鉦石目当ての人間に傾きかけていたが、予知により危機に気付いたヴィアランスが病弱な体を押して張り付けてくれるように。こうして地味に危機が回避されてたりする。

ヴィアランス大好き。

リライト、アラートの嫁入りには賛成。そうしたら皆が自分を見てくれるかもしれない。

8歳時、第一次親争奪戦に呆然。ヴィアランスに泣きつく。

9歳時。戦争の噂にびっくり。本当はヴィアランスに頼りたいけど、頼ったらヴィアランスの体調が……。

10歳時。なんとかウェンダントの助けになりたいと思っている。

それと同時に、ヴィアランスが自分をウェンダントと同じくらいの脅威と判断している事に恐怖。この力はあってはいけない物なのだろうか？

11歳時。力の利益と不利益について悩む。

12歳時。悩むよりは、シール一族の長に聞いてみよう。ミラールの所に移動。

本編後。

国を富ませ、文句なく財務大臣に。大陸の経済そのものを一手に握る。

彼に逆らえる者はいない。

レヴィーと結婚し、5人の子を作る。

26才時

レヴィー（11）

神眼を持つ女の子。体が弱い。

ちよつと病気がちなので大切に育てられている。

能力使用禁止令が出ています。

5歳になり、多少元気になって外を駆けまわれるように。

自分も魔法適性があると知り、ヴァレンティナの弟子に成る為に体を丈夫にしようと頑張る。

その甲斐あって6歳になったら割と丈夫に。

7歳。そろそろ力を使う練習を始める。月一ぐらい。

8歳。私にも、出来る事はあるよ。偵察に使って！

9歳。クリティカ国との共闘の際、父に会って驚愕。戸惑いつつも、親交を温める。

10歳。父が好き。母も好き。ずっと一緒にいてほしいと言われ、悩む。

11歳。ヴィアランスに連れられて、ミラールの元へ。

本編後

アストレンジに告白され、戸惑う。ヴィアランスが好きだから？

という疑いが解けるまで5年掛かった。誤解が解けた後は、ラブラブに過ごす。

5人の子を残す。

27才時

ウィルア（10）

風を操る素養と騎士の素養を持つ。貧しい家だが、とても大事に育てられている。

最近、自分の弟と会わせてもらえるようになった。嬉しい。

最近剣術の練習を始めた。

6歳時、風を操る事が上手くなって来ると共に、ウィルアの家王家から援助がはいる。

7歳時。父の出陣にショック。生きて帰って……！

8歳時。父が生きて帰った事に大喜び。

9歳時。風をかなりうまく操れるように。でもたまに暴走させる。父に制御の力はない。

10歳。父との手合いの最中に怪我を。ミラールの所に助けを求めに生き、救ってもらう。

本編後

立派な風の騎士となり、見事に家を復興させる。

奥さんとの間に子供が二人。

サイラス（10）

風を操る素養と騎士の素養を持つ。

二歳時にナイトがいなくなったので大ショック。ウォルターから離れない構え。ウォルターから、時々、例え一人になる事があっても、皆から愛されているって事、忘れないでと言い聞かせられて凄く不安。

不安は見事的中し、案の定ウォルターは出ていった。

不安がって今度はレオンにくっつく。ミラールもよく慰めるようになった。

レヴィーが遊んでくれるようになり、ウィルアも現れた事で、少し安心。

引きとられるとしたら、ウィルアの家なので、ウィルアとは一緒に入れるからだ。

ただし、ウィルアの所は幼心に自分まで養えるんだろうかと心配。

ウィルアとはしょっちゅう剣で打ち合っている。風も使った練習もしている。

6歳時、生活が多少楽になったようなので、ウィルアの所に行くのも良いかなあ。

7歳時。幼い自分に唇を噛みしめる。

8歳時。一層剣に打ち込む。

9歳時。風をうまく扱えるようになり、相手を傷つけることについて

て考え始める。

10歳時。もしもの時は、力を抑えてくれる人が傍に欲しい。
本編後

結局ウィルアの家の子となる。奥さんとの間に子供は一人。
立派な騎士となり、ウィルアとは生涯良きライバルとなる。

28才時

レオン(9)

光を操る素養と騎士、軍師の素養を持つ。

元気な兄妹を、じつと観察している。……あれ？ 兄妹減った？

なんか最近大人しいね……。などと一歳の時に思っていたが、今は
思いつき減った事を認識。

サイラスから、「どこへもいつちやめーだよ」と言い聞かせられ、
逆にそうかどこかに連れていかれる可能性があるのかと認識。

サイラスを慰めつつ、未来に思いを馳せる。
増えたり減ったりが多い家族だと認識。

四歳時、サイラスが元気を取り戻したので安堵。楽しげに戦う姿を
見つめる。

5歳時。戦術系の本に興味を示し始める。

6歳時。なんか環境が激変。そうか、自分は「減って」「減る」と
はこういう事なのか。

7歳時。更に環境が変わったことを認識。父が頼りないが大丈夫か。
8歳時。色々と大人の事情を理解。ため息をつく。

9歳時。もしも力が暴走したら。父は頼りにならん。封印の長に話を
聞くか。

本編後

軍師となる。でもちよつと宰相になりたかった。レイナールとはよ

くいがみ合うが、そのいがみ合いが楽しくて仕方ない。後は人間観察が趣味。

淡々と相手が罠に掛かるのを観察する所は、非常に恐れられた。

29歳時

ディアナ（8）

ダークエルフのハーフエルフ。エルフは寿命と成長速度の関係で子育てが大変なので、ハーフエルフに。植物を操る事が出来る能力。ミラールが悪戯心でちょよつと弄ったので、ミラールの能力と融合し、植物のステータスを見る能力が付加されている。ただし、種は操れない。

愛情たつぷり育てられている。

三歳になり、植物をいじり始める。

四歳。ダークエルフから熱烈な勧誘が。

五歳。幸せに暮らしてます。戦争の噂に、母が死ぬほど心配。
六歳。私の力も怖い物なの？ と鳴きながら聞いてダークエルフに鼻で笑われる。

七歳。どーせ私の力は戦闘向きではないですよー。とすねる。

八歳。弟達も心配だしと、ミラールの所に行ってみる。

本編後

ダークエルフとして、農業チートをやりながらまったりと過ごす。
子供も沢山作り、幸せな生涯をすごす。

30歳時

ロビー（7）

雷の力と高い頭脳を持つ。

伯爵の期待の星。

なにしても褒められるので図に乗っている。幸せ。

四歳。伯爵がいなくなると聞いてびっくり。嘘だよね？

五歳。伯爵が戻ってきてくれてほっとしている。

六歳。伯爵のお膝で力を操る心得を聞く。

七歳。伯爵に連れられ、封印の長の所へ。

本編後

騎士となる。兄の補佐をするだけで満足。

伯爵の肖像画を大事に持つており、良く眺める。

結婚して子供は二人。

ポーラ（5）

雷の力と高い頭脳を持つ。

既に婚約相手がいる。

三歳にして、雷を発し、伯爵と相手方の親大興奮。ウェディングドレス着用する事となる。

四歳。何かがおかしい。毎日が不安。

五歳。おかしい様子続行。不安で婚約者にべったり。

六歳。おかしい様子は沈静化。自分で何があったのか調べ始める。

七歳。決意して、封印の長の所へ。自分は力を持つ子を産めればいいのであり、力の発現は無くても良い。

本編後

異能の学校に通い、制御方法を学ぶ。大人になると、教師に。

婚約者とは熱々で、子供を三人程作る。

31歳時

ドーン（6）

武器の効果付与の能力を秘めている。

三歳の為状況理解出来ず。

四歳の為状況理解出来ず。

五歳。呑気に遊ぶ。

六歳。鍛冶に興味を示す。

本編後。

吾気に、気にいった人間にだけ武器を作るお気楽鍛冶士に。
恰幅の良い女性を嫁にもらい、嫁を賛美して過ごす。

ドルフ（4）

武器の効果付与の能力を秘めている。

親方のドードーの元、毎日がてんやわんや。鍛冶のうんちくを語られてもわかりません……。

二歳時トンカチ以外の玩具を寄せ。重くてもてねーんだよ！

三歳時皆が忙しくて世話がおざなり……。もっと構え。

四歳時ようやく構ってくれるようになったけど、どこか心配そうだ。

五歳時。鍛冶の勉強を始める。

六歳時。ドードーに連れられ、ミラールの元へ。

本編後。

親方として、数々の武器と優秀な弟子を産みだす。

いつもドーンが頭痛の種。でもちよつとうらやましい。

子供は一人。でも弟子全員が子供みたいだからよし！

32歳時

ハリー（5）

どちらかと言うと雲を蹴散らすのが得意。

2歳。静かに暮らしている。

三歳。平穩。

四歳。ちよつと影薄い？

五歳。ピクニックの時、曇り空を晴れにして見せて驚愕される。ミラールの元へ。

本編後

雲をただ眺めるのが好きな、相当のんびりした大人となる。
そこがまた仕事に向いており、国を緑で富ませる。
子供は一人。

アメール（3）

どちらかと言うと雲の生成が得意。

1歳時、小さな雲の生成が出来るようになり、お祭り騒ぎに。

2歳。雲を作ると皆が喜ぶので、せっせと雲を作る練習をする。

3歳。不安の目で見られる。

4歳時。不安げに抱きしめられる事が多い。

5歳時。ハリーが曇り空を晴れにして大騒ぎ。え。そんな。慌てて雲を元に戻して更に大騒ぎ。ミラールの元へ連行。

本編後

せかせかして分刻みで神経質に仕事をする。その割には腹いせに雨を何日も降らせ、周囲を困らせる。

子供は三人。未だに異能学校に預けた事を根に持っている。

33歳時

シャルア（4）

影を操る能力を持つ。

一歳時、既に力を発現。大いに喜ばせている。

二歳時、困った顔をする周囲に不安。

三歳時、どんどん力を伸ばす。

四歳時、ミラールの元へ連行。

本編後

子供の頃は太い周囲を振りまわしていたが、大人になると厳格な

良き青年となる。
弟にいつも頭を悩ませる。
子供は三人。

シャロス（４）

影を操る能力を持つ。

一歳時、既に力を発現。

二歳時、困った顔をする周囲に不安。力を使って喜ばせようとするが、逆効果。

三歳時、影の中に両親を「閉まって」大騒ぎ。

四歳時、ミラールの元へ連行。

本編後

結界破りが大好きで、シルフィスとシルバードをいつも困らせ、泣かせ、土下座までさせている。でも体罰もしょっちゅうだからイーブンと本人は思っている。

大人になってもちよつとした悪戯を繰り返す困った子に。

子供は５人。

シャロン（４）

影を操る能力を持つ。そして婚約者がもう決められている。

一歳時、既に力を発現。その勢いで嫁へ。

二歳時、一旦本家に帰される（力を封ずる準備が万端な為）。

三歳時、力を使うと周囲が困ることを認識。自重。

四歳時、ミラールの元へ。

本編後

おしとやかな淑女に。でも怒るとめちゃくちゃ怖い。
子供は二人作る。

34歳時

カトリーヌ(3)

癒しの力を持つ。

一歳時、力は発現。

崇められて暮らしているが、三歳時にミラールの所へ。

本編後

神聖王国の王女として貴族と結婚する。

カトラス(3)

癒しの力を持つ。

一歳時、力は発現。

崇められて暮らしているが、三歳時にミラールの所へ。

本編後

神聖王国を継ぐ。

35歳時

ヒーラ(2)

癒しの力を持つ

崇められて暮らしているが二歳時にミラールの所へ。

本編後

神聖王国の王女として貴族と結婚する。

ヒール(2)

癒しの力を持つ

崇められて暮らしているが、二歳時にミラールの所へ。

本編後

神聖王国の大公として貴族と結婚する。

36歳時

グリフィス（1）

成長と転生を司る。

5歳相当の体。ヒャッハーチートだぜー！

本編後

すぐに大人へと育ち、異能学校で漫画などいらん事を教えまくる。
子供は二人。

グローレン（1）

成長と転生を司る。

5歳相当の体。ハーレム作るぜ、むふふ。

本編後

すぐに大人へと育ち、片っ端からナンパしまくっては殴られる。
色々といらない文化を広める。

子供は5人。

37歳時

シルフィス（0）

封印を司る。

転生した。神様ありがとう！

本編後

義務として子供を作りまくる。もちろん本人は大喜び。
異能学校を出た後は、生涯ウェンダントを助ける。

子供は11人。

シルバード（0）

封印を司る。

転生した。しかもいいとこの出っばい。俺勝ち組！？

本編後

義務として子供を作りまくる。本人は大喜び。

いつもシルフィスと比べられてすねる。
ナンパな神官となる。
いらぬ文化を広めまくる。

父親達

17才時

ジャックⅡエルバート

魔術師としての素養を持ち、エルフの極端に薄い血を持つ。開花していない緑の能力や戦士としての素養を持ち、本人は弱くとも血のポテンシャルは凄まじいサブラレッド。

忌まれる黒髪により、末王子でありながら冷遇されてきたが、緑を育てる能力に芽吹き、

聖なる森で古代呪文に高い適性を持っていた事を知り、激しく戸惑っている。

エルフとの間に子供を作る事となり、しかも生まれた子が優秀な子ばかりだった為、重宝される。

エルバートに流れるエルフの血と、新しい血を受け入れるという行為が良い方に絶大な効果を示し、生まれた子が三分の二の確率でエルフ伝統の能力持ちと言う驚くべき結果に。更に古代呪文もそこそこ使えるようになり、幸せを謳歌している。

一時帰郷は何事も無く済み、安堵している。

魔術は頭打ちとなったが、エルフには絶対に勝てない程度の実力。でも本人はとても満足。

今は子供達の世話をして過ごしている。

気分は引退魔術師。

戦争の話を聞き、たまらず王国へと帰る。

元妻を助けて、愛が再燃。王国にとどまる。

封印だのなんだの話を聞き、不安。

ミラールと呼ばれる。

18歳時

バイク

名家の嫡男で騎士。炎の能力を持っている。

キースと出来ている。

最近は全く自重せず、いちやいちやしている。

子供が父親に取られ気味な事が唯一の不満だったが、部下として獲得！

親バカにならないよう必死。

後キースと結婚し、親に泣かれました。

娘に一本取られた。能力の出力の差が要因。訓練に明け暮れるようになる。

どうやら訓練の成果が出て、息子娘に一本取られないよう、面目躍如。

心理面で弱いようなので、バトルミィを連れて休日は魔物退治にどうやら、バトルミィが壁を越えたようなのでほっとしている。

子供達は絶対に死なせない。戦争の準備中。

戦争は終わったが、追いつめられた時にバトルミィが放った炎に驚愕。

バトルミィに怪我をさせられる。それはカトルの治癒で何とかなつたが、

力に比べて弱い心を持つバトルミィに不安。
ミラールと呼ばれる。

キース

名家の嫡男で騎士。氷の能力を持っている。

バイクと出来ている。

始終いちゃいちゃしている。

バイクと同じく、子供とともに触れ合えるのは剣術の訓練の時だけなのが悩みだったが、部下として獲得。

子供達が可愛くてしょうがないが、表に出さないように必死。けど駄々漏れ。

後バイクと結婚し、親に泣かれました。

ルアンナの勝利に、さすが二人の子だ……と感動中。

お祝に剣を送った。

子供達にたびたび一本取られるようになるが、逆に誇りに思っている。

剣の腕だけなら当然キース達の方がまだ圧勝な為、そちらを主に教えている。

参謀として育つハミルトンを暖かく応援。

子供達は死なせない。戦争の準備中。

強い力を持ち、悩むハミルトンを元気づける。

バイクが怪我をしたので心配。

しかし、バートルミーは自分で乗り越えるべきだと思っている。ミラールと呼ばれる。

20歳時

フィール

いきなり精液絞り取られた可哀想な竜族。後で事情を知り、子供を返してほしいと願っている。竜族は子供が出来難い。

ようやく子供を取り戻し、古い文献を当たりながら一所懸命に子育てをしている。

ドランにいい娘さんが嫁に来てくれるだろうかと凄く心配。

当たり前だがたまにミラールにドランを会わせてあげている。

命令通り動くようになったので感動。

ただ、普段ドラゴン体でいるようなので常時人間体でいるように教

育するのに苦心している。

最近、竜騎士ごっこに熱心な上、めちやくちや似合っている二人の将来を心配している。

竜騎士についてはもう諦めました。ただ、女の子を乗せて喜ぶのは問題だと思う。

最前線に行くドランが心配で仕方ない。無理をするなよ。

血に飢えた野獣そのものだったドランを激しく心配。

ドランが結婚出来て激しく安堵。もう一人の我が子にも嫁さんを見つければ。

ミラールと呼ばれてミラールの所へ。

21歳時

ケスト

売れない芸術家。しかし、本人の知らない所で評価されつつある。

貰ったお金で乳母を雇うも、お金の出所を追及され、女神の伝説を漏らしてしまう。

子供の為に普通の仕事をするようになり、絵を売る事はめっきり減ったが、スポンサーがつくようになって画家に復帰。その後、新しくできた男爵家の子の家庭教師の職を獲得。

絵を描いたり、子供を教育したり。ミケイラが息子そっくりな事と絵画の才能に驚いている。

ミラールが巫女だと勘づき始めているが、空気を読んで知らない振り。

ただ、二人の子に囲まれ絵を教える喜びを噛みしめている。

ミケイラの婚約話に涙。嬉しいやら寂しいやら。でも誇らしい。

エイブに独り立ちの準備をさせる。内心早すぎると思ってるけど、

エイブの望みだから涙を飲んで我慢。

戦争の噂を聞き、エイブを連れて急いで疎開。

巫女の事言う事で、エイブについて色々問い詰められ、困惑。

エイブの絵が自分より高く売れる事に内心ショックやら誇らしいや

ら。

ミラールと呼ばれる。

22歳時及び30歳時

ロイ

ずば抜けた頭脳を持つ青年。宰相が娼婦に産ませた子供。宰相はロイの事を知らない。

男娼として仕事をさせられていたが、大人になって売れなくなった為、売りに出された。

物を碌に教えられずにいた為、埋もれていた才能が教育係の老夫婦の手によって徐々に芽吹き始めている。

自分が実質的に男爵家を支えるのだと意気込んでいる。ポールに食われました。

今はポールと結婚し、ポールの家で色々学びつつラブラブと。宰相には認知してもらい、レイナールの様子を見に行く日々。

ナイト、ロビーとポラを可愛がって幸せを謳歌している。

ミラールに頼まれ、信頼できる使用人を派遣したり、手伝いに行ったりと忙しい日々を送る。

あんまり忙しいので、ポールに怒られました。

普段忙しい代わり、時間が取れる時はポールに尽くすように。一応納得してもらえたようです。

急いで傭兵に応募しようとする所を全力で止められる。心配。

どんなに強い力を持つと、子供が一番大事！

子供達が全員集合するようなので、自分もミラールの所へ。

カトル 34歳時及び35歳時

まだ子供だが、癒しの力を持つ。ミラールには幼い頃から一人前の紳士扱いされて育つ。

自分の力にはまだ気づいていない。

ミラールを支えられるよう、懸命に勉強中。

ロイを密かにライバル視。

勉強は精力的にしているが、また奪われる事を恐れはじめたミラールに隠され気味な為出仕はしていない。

神聖魔法を勉強していたが、そろそろ年頃になったので帰ろうかな。ウォルターの力と大地の女神の噂による自覚で力に開眼。ミラールと結婚。夫として色々ミラールに話を聞く。

神輿として担がれる。

神聖王国国王として即位。でも妻はミラール一人。

子供達と共にミラールの所へ向かう。

23歳時

アゼル

国に一つある教育機関の教師。教育や勉強一筋でここまで来て、唐突に自分が一人である事に気づく。（実際にはかなりの人望があり、望めば相手もいるのだが）酔った勢いで自分にも相手が、せめて子供がいれば……と勢いで祈願。聞き届けられてしまい、腰を抜かす。後悔しながら祠に行くと、そこにはお前のせいだと言わんばかりに泣き喚く男の子が！

この日より教え子の力を借りながら、必死の子育てが始まる事となる。

同僚の女教師にこれを機に強いアプローチを受ける。

女教師と結婚しました。盛大に祝ってもらい、幸せの極致。

更に、息子の能力によって、「才能を開花させる」能力が花開いている。

引き抜きを受け、隣国でせっせと教育中。

幼児の教育も任され、なんだかなあと思いつつ幼児相手に講義をしている。

最近、幼児が土が無いはずの場所で土遊びをしているので相談したら泣いて感謝される。

その後、我が子を教えてほしいという親が殺到。ビビる。

能力について理解し、自分に能力がある事、息子に受け継がれている事に感動。

この頃、重大過ぎる相談……王子を止める相談をクレバーから受けるようになる。側近の道にずるずる引きずり込まれている。

能力の磨き方がわからず、試行錯誤している。

最近ようやく能力がつかめてきました。

戦争の話を聞き、顔色を曇らせる。騎士達を中心に力の解放開始。ようやく戦争は終わり、ウォルターの存在を知り、会いに行く。ウォルターとミラールの所へ。

24歳時及び30歳時

ポール。雷を操る力を秘めている。ただし、使えない。

本当は伯爵家の血を引いているが、両親が駆け落ちした為その事を知らない。

最近、伯爵に発見され迎え入れられた。

片腕なのに伯爵家としてのあれこれを叩きこまれ大変な日々を送っている。

ロイが唯一の癒し。ナイト？ 大フィーバーな曾お爺ちゃんが離しません……。

子供が三人に増えたので、ポールも子供を可愛がれるようになった。生まれたばかりの可愛い娘が、もう婚約者が決まっているという現実に複雑。

娘が可愛くて仕方ない。

ポーラに嫁に行かれて大ショックだったが、最近冷たかったロイにサービスしてもらるように。もうメロメロ。

急いで出陣の準備をして止められる。俺も片腕だけど、伯爵だってジーさんだろ！

伯爵が無事に帰って安堵。家族だという事を実感。子供を守ってい

けるか不安。

子供達と共にミラールの所へ。

25歳時

クレバー

クリティカ王国の王。妾の子であり、他の親兄妹は暗殺合戦で全滅している。

必死に足場を建築中の王であり、大胆すぎる所がある。

足場は大体出来あがってきたが、子育てに大わらわ。

幼いながらに慢心のシャーロットを憂い、厳しく育てる事を決意するが、そこに癒しの術が発覚してもう大変。

女神だ女神だと祭りあげる神官達を止める事は難しく、シャーロットの教育にガクブルしている。

そこにヴィアランスからの注進が入り、もう大変。連日会議の日々。最近、ヴィアランスからアストレンジの教育についてお叱りを受ける。

王様業をしつつ手の掛かる四人に愛情と時間をたっぷり注ぐ難しさに頭を痛めている。

神殿から手紙が来て、神官達から最もだ！と言われ吹く。

その包囲網は徐々に狭まっている。

ついに押し切られて結婚する羽目に。でもそんな事より、力を駆使した親争奪戦の方が重大事。皆平等に愛してるよー。

親争奪戦で国民に大規模な被害が出そうだったので、実は戦争で休戦状態になり、ほっとしている。

子供達の力に驚愕。どうやって子供達を守っていくか、作戦会議。シール一族の事を女王に話す。

子供達が封印を受けてくれそうなのに安堵。子供達とミラールの所へ。

リライト

クレバーの側近。可哀想な被害者。危うく婚約者に別れを告げられかけた。

男児二人の父である。分家筆頭で、息子を除き、王国内で最も王族の血が濃い。、

大地を操る力は水晶を出すのと、地面に寝っ転がって僅かに体力の回復速度を早める程度。

ちよつと力の強すぎる息子達とヴィアランスの予知の事を心配し始めている。

なにげに土の力で獲物を狩れるようになり、非常に心配。

自然ヴィアランスにべったりしすぎて、婚約者と娘息子のひんしゅくを買う。

神殿から手紙が来た事をきっかけに、ヴィアランスを選ぶなら嫁に行けと責められる羽目に。

止めに息子二人から嫁においでと言われておるおる。

ついに嫁にされました。そして始まる親争奪戦。シャーロットも土を操って攻撃できるなんて聞いてない！ 毎日がてんやわんや。

戦争。色々ストレス開放するいい機会だ！ ついでに子供達の力を測るのにもいい機会である。

ガクガクブルブル

封印はいいことだ！ 途中で力が暴走するといけなないので同行。

アラート

クレバーの側近。被害者その二。今でも婚約者に疑惑の眼差しで見られている。

女児二人の父で、荒々しい性格。三代ぶりの能力保持者であり、鳥に斥候をさせたりとその力を役立てている。

最近、エリザベスを家の子にする試みが成功。

エリザベスを遠慮なく鍛えている。

神殿からの手紙の被害者三号。こちらは奥さんが子供の力の強さに

ビビリ、身を引こうと画策。

アラートがクレバーの所に嫁に行くという形なら、自分は当主に出世するだけなので身を引く事に乗り気。

アラートはエリザベスを育てるのに必死すぎて奥方の試みに気付いていない……。

気がつけば結婚させられた挙句、エリザベスが武者修行の旅に。わけがわからない。エリザベスを探しに行こうとするが、シャーロットに止められる。親争奪戦の勃発である。流れ弾で死にそう。

親争奪戦休戦にほっとする。ミラールが心配。

強すぎる子供達の教育について、頭を悩ませる。

封印。可哀想だけど、仕方ない。子供達に同行。

26歳時

ヴィアランス

王宮お抱え魔術師。体が弱く、箱入りなので、外界の事情はよくわからない。

妙な命令をされて精液なんかどうするの！？ とドキドキ中。

未来視や遠視は負担がでかいのでめったにしない。

ただし、王子二人の力があまりにも大きすぎる為、危惧している。

未来視により、王子王女の未来をかいま見て、その力に驚愕。

金鉱脈、破壊神、大地の女神、獣の女王と大きすぎる戦の火種に、

急ぎ王に報告する。

アストレンジの心の闇に気付き、傍にるように。

次第に「誰からも求められる力」を持てあますアストレンジを自分の子のように思い始める。

アストレンジと共に、親争奪戦に呆然。そつと寄り添う。

アストレンジの頼りたい、でも頼ったら……という視線に苦笑し、大丈夫だよと寄り添う。

子供達も心配だが、初めてあつた自分の娘、レヴィーも心配。国に招待し、色々話す。

レヴィーの力は体に負担が掛かり過ぎる為、封印を頼みに向かう。

27歳時

ウィルバ

風の素養を持つ名家だったが、長い事能力持ちが産まれず没落に没落を重ねた。息子が見せた能力に大喜び。貧しいながらに、大事に大事に育てている。

最近小さな棒きれを振りだしたので大喜び。

息子の為、一所懸命に仕事を頑張っている。休日は欠かさずミラーの家に。

息子が剣術の練習を頑張っているので誇らしい。

風の素養を認められ、勉強させられるだけの援助を王家から受ける。王家とミラーに感謝。

手柄をあげるチャンス！ 戦争の準備を着々とする。

生きて帰ってきたが、手柄は上げられず、落ち込む。

ミラーに呼ばれる。

28歳時

レオニール

さり気なくミラーの住む国、エディフィート国の長男だったりする。

女癖の悪い困りもの。

光の能力は発現していない。

一夜の相手が巫女でちよつと面倒な事になったと思っていたが、特に何も起こらないので安心。

最近の子供の余りの活躍の噂っぷりに、たまに様子を見るようになる。

レオンと毎日ならめっこ。この気難しげな餓鬼のどこら辺が自分に

似ているのか。戦争？ 知らね。

レオンの観察続行。女遊びが控えめとなる。

レオンと良く話すようになる。自分より賢そうな事に汗。勉強してみようか。

ミラールと呼ばれる。

29歳

ディアス

ダークエルフのハーフエルフで孤児。

せめて、自分の家族が欲しかったと、最後のお金で革袋を買い子供を祈願し行き倒れる。

いきなり家族が沢山出来て戸惑い中。

念願の魔術も学び、快く冒険者として稼ぐ事を承諾。

ヴァレンティナに師事し、ダークエルフの術を学ぶ。

ダークエルフの里に引きとめられ、迷う。

押し切られました。

ミラールの所に駆けつける。

エルフの里に戻ったらディアナに泣きつかれる。子供をまもんなきやと実感。

ディアナと共にミラールの元へ。

31歳時

ドードー

ドワーフ。自分の血を継ぐ弟子が欲しいと思った時には、鍛冶に人生を打ちこみ過ぎて婚期を逃していた。

子供を育てるのに四苦八苦して、弟子も巻き込んで大わらわ。

最近、息子が鍛冶に興味を示していない気がするのが悩み。

今は戦争の為の鍛冶で手いっぱい。

この子は一体何を為すのか。この子の作った武器は世を混乱させるのか？ 子供を観察し、将来に思いを馳せる。とりあえず、しっかり見守る事とする。

ミラールと呼ばれる。

32歳時

ハロルド

真つ二つに分かれた、かつて神官をしていた名家。女王に白羽の矢が立てられた超不幸な人。世界で一番アマリスが嫌いだった。能力は発現していないが、雲を操る能力。

アマリスと結婚させられ超涙目。でも責任は取らねばと思っている。その……なんだ。いつまでも嫌いあってもしょうがないだろう？

という事で納得。

子供が一歳で能力を示して、巫女の力の強さと運命の残酷さに呆然。あれだけ色んな儀式して駄目だったのに……。

暴走する我が子の力を、アマリスと共に制御。制御だけはなんとかする力があつた。

もう力の封印が厳しいです。家探しして封印具発見。

封印具、一つしか無かった。ハリーが強力すぎるのでミラールの所へ。

アマリス

真つ二つに分かれた、かつて神官をしていた名家。犠牲者その二。同じく能力は発現していない。世界で一番ハロルドが嫌いだった。結婚させられた絶望は果てしない。

しょうがないわけあるか！ 納得できるはずが無い。

悔しいけど、子供の片方が一歳で能力を示しているので、今の所逆らい様が無い。

嫌だけどハロルドと共同作業。今は良いが、成長したら子供の力を

抑えきれないのではと心配。
ハロルドに対して、なんで封印具があるなら先に出さないのかと怒る。

子育てに激しく不安。子供の力が暴走したら国が滅びかねん。

33歳時

シャートル

影を操る名家の嫡男。

毎日子供にしきたりを言い聞かせる。

戦争の準備に入る。

乳児にいきなり敗北してビビる。ミラールの所へ。

シャーレン

影を操る名家の分家の嫡男。

シャートルのお父さんっぷりに呆れ顔。

戦争の準備に入る。

無理に強力な子を作るからこうなるんだ！
ぷりぷりしつつミラールの所へ。

35歳時

ヒースト

神聖王国の貴族。

ミラールの呼び出しを受ける。

ヒータス

神聖王国の貴族。

ミラールの呼び出しを受ける。

36歳時

グリード

成長と転生を司る。

忌まれていた。クレバーに匿われていた。

37歳時

シルフィア

封印を司る。

恐れられていた。クレバーに匿われていた。

その他

シビル

ポールの妹。伯爵家に迎え入れられ、今更礼儀作法を叩きこまれ、花嫁修業をさせられ、嫁がされる不幸な人。大変な日々だけど、王子様に憧れていたので、内心喜んでる。婚約者決定しました。嫁入りしました。

妊娠したよー！

子供が産まれて幸せ。

ミラールの呼び出しを受ける。

登場人物紹介（読まないと絶対に話が理解出来ません）（後書き）

感想お待ちします。

2話 嫡男は一人だけ? (父親視点)

年若い少女が言った言葉。信じたわけではなかった。ただ、諦めるきつかけが欲しかった。バイクも私も嫡男で。子供を作らないわけにはいかず。そうして、私はバイクの子を産んでやれない。男だから。

沢山悩んだ。互いに妻を娶った方がいいのだと自分に言い聞かせた。それでも、駄目だったのだ。

どうせでたらめだ、と思いつつも、私がもし女だったら、バイクとの間に子供が作れたら、と思うと夢が膨らんだ。

まず、絶対にバイク似の女の子が欲しい。でも、二人の子だという証が欲しいから、氷が使えればもつといい。

そして、二人の家を継ぐ子。バイクが褒めてくれたこの髪と、バイクの燃えるような目を持った、炎を操る子供が良い。力はバイクに似て強く、背が高く、逞しい子だ。それに……。

まる三日悩み、書き綴り、びっしりと書かれたそれを見て苦笑し、封筒に入れて、バイクの精と私の精に水を入れた革袋と共に祠に入れる。

翌日、二輪の花があつて、目を見張った。

少女の悪戯だろうか? しかし、名乗っていないし、手紙にも名を書く事は避けて彼で通した。手紙にしても、精液を入れた革袋にしても、手に入れた所で意味が無いはずだ。

何にしろ、これで一年、バイクを諦めきれなくなった。

ほっとした気持ちと、苛立ちが半々。一年したら別れよう。

そう心に決めて、指折り数えてシエスティアの月の七日を待った。12時。何を考えているのかと自分を叱咤しながらも、私は一輪の花を持って祠に向かっていた。

まあいい、花を手向けよう。私とバイクの恋の終焉に。

明日、大事な話があるとバイクを呼んである。

祠に向かうと、子供の泣き声がする。よわよわしい泣き声だ。まさかと思つて祠に向かうと、裸の男女の子供がいて、悲鳴を抑えた。

まさか、そんな。偶然、誰かが子供を捨てたとか。少女の悪戯？ならば、ちょうどいい時期の男女の双子をどうやって手に入れた！？

それよりも、赤子達の具合は悪そうだ。

私はそつと子供達を抱き上げ、屋敷へと急いだ。

「医者を！ 誰があるか、医者を！」

「どうなされたのですか、キース様……その子は！？」

女神から頂いたのだ。そう飛び出しかけた言葉をぐつと抑える。

女神の事を言えば、子供達に災いが。

子供達。バイクと、私の子。まさかと言う想いと、もしかしてという想い。

男女を頼んだ事は覚えているが、どんな頼みごとをしたかは既に忘れていた。期待と不安に胸が締め付けられる。

そして、迷つた末に唾棄すべき言葉を吐いた。

「捨て子を拾つたのだ。これも何かの縁だ。この子達は、私の子として育てたい」

「そんな。どこの子とも知れぬ子を！？」

「いいから、早く医者を呼べ！」

執事を急かし、医者叩き起こして子供の世話をさせる。

ああ、子供部屋を整えなくては。乳母も見つけないといけない。

子供達にはまだ母乳が必要だ。幸い、使用人の一人が子が産まれたばかりのはずだ。

ひとまずはその者を起こして、乳を与えさせなくては。

色々に必要な物もあるだろう。明日から、忙しくなりそうだ。

翌朝、ひたすら泣きじゃくる子供達をあやしていると、バイクがやってきた。

「キース、大事な話とはなんだ。……その子供達は？」

どうしよう。何と云えばいい？ 子供が本当に来た場合、バイクとの関係をどうするのかは考えていなかった。女神の事は話せない。私は、顔を伏せた。

「まさか、お前の子なのか」

勘の良いバイクの言葉に、迷った後にこくりと頷いた。バイクに嘘はつきたくない。

「キース……いや、いいんだ。それで正しいんだ。俺はお前の前から消える」

「そんな、バイク！」

別れる別れないで押し問答していると、突如父上が乱入して来た。

「キース！ 捨て子を我が子として育てるとは、どういう事だ！ 我が家の血筋を絶やす気か！？ 知っているのだぞ！ 汚らわしいフレッシャー家のその男と通じている事は。黙っていればつけあがりおつて、絶対に許さん！」

「卿の目は節穴か。この子は間違いなくキースの子。相手は誰か知らないが、俺は捨てられたらしい」

「私がお前以外とそう言う事をする、本気で言っているのか!? 父親はお前だ、バイク!」

「何を言う、俺は女を抱いた事はない!」

「私以外の男は抱いたという事か!？」

「えーい。黙っておれ、男色家共が!」

激しい言い争いに、子供達は一層激しく泣いた。

男の子が泣き叫ぶとその手から炎が噴き出し、それがベビーベツトに火をつけた。

「これは!？」

全員が驚き、一瞬の後に急いでバイクが火を操って炎を消し、男の子を抱き上げた。

その際に、布団が隣で泣き叫ぶ女の子を中心に凍っている事に気付く。

そうだ、能力を使えるようにして欲しいと頼んだ気がする。女神は確かに、願いを叶えてくれた。

私は、掠れ声で告げた。

「だから、言つたろう……。お前の子だ。バイク。お前と私の……」

バイクにキスをされる。

「でかしたキース！ 良く俺の子を産んでくれた！」

「わかってくれたか、バイク！ でも表向きは捨て子と言う事にしてくれ！」

父上は石になったまま動かない。

バイクは、子を抱いて戸惑いがちに告げる。

「捨て子だと？ 俺とお前の子を？ それはあんまりなのではないか」

「仕方ないさ。なに、養子でも嫡男にする事は出来る」

いよいよ激しく泣きじゃくり、力を無差別に放出する子を、私達はあやし、その力を抑えた。力が発現するのは、一族の中でも五人に一人だ。

二代続けてというのは珍しい。

そこで、バイクは言いづらそうに告げた。

「俺に、男の子の方を渡してほしい。炎を操る嫡男がいれば、義務は果した事になる」

「構わないよ、バイク。さあ、名前をつけてくれ」

「名前か……ちょっと待ってくれ。今考える」

そこで、フリーズした父が再起動する。

「待て！ その子は例え汚らわしい炎を使おうと、我が家の嫡男だ！ というか、息子を孕ませただと！？ 孕ませただと！？ 絶対

に許さん！ そちらの家に直談判してくれる！」

父が飛び出していき、私はため息をついた。

「面倒な事になりそうだな……。まあいい、名前をつけてくれ、バイク」

若い私は、この時思い至りもしなかった。

能力を持つ子供。この子達を争って、両家が激突するなど。

3話 5人も作ったのに、誰も残らないとか……。

出産で大分力を消費してしまった。一年ほど、休むべきだろう。赤子達は元気に育っているが、寂しがって良く泣くようになった。自分の片割れを求めているのがわかって、胸が痛い。

それに、炎を出すから見ていない時は土の上に寝かすしか無くて可哀想だ。

でも、向こうは恐らく、名家。幸せに暮らしている事だろう。しばらくすると、物価が高騰した。何が起きたのだろうか。不思議に思っ、酒場へと向かった。

「マスター！ 何か変わった話ない？ 物価が上がって、困っているのよね」

「ああ、ミラール。別嬪さんが探してたぞ」

「別嬪さん？」

「もうそろそろ来るはずだ。そうだ、物価が上がった理由だな。そりゃ、フレッシャー家とアイスベルグ家が戦争を起こしそうだからだ」

「物騒ねえ。どうしたの？」

「どうやら、フレッシャー家の嫡男がアイスベルグ家の嫡男の女に手を出したらしい。それで大騒ぎよ」

「いやーねえ」

話していると、肩をたたかれた。私が赤ちゃんを渡した、あの男だった。

酒場の奥の方に席を移動して、私は微笑む。

「お久しぶりね。無事別れる決心は出来まして？」

「女神から子供を授かった」

私は、精一杯驚いた表情を作る。

「まあ……。冗談でしょう？ それとも偶然、捨て子を拾ったとか、話を聞いた方がこっそり置いたとか……」

「どれも無い。私は、言われた通り秘密を守り通した。間違いなく、私とバイクの子だ。ただ、子供を巡ってバイクの両親と私の両親が争っているのだ。軍が動くかもしれない……。私も事情を問い詰められて、困っている」

「まさか」

「本当だ」

私は心底驚いた。だって、子供を授けただけなのだ。悪い事は何一つやっていないつもりだ。

「そんな……」

「女神の事を喋れば、本当に災いが下るのだろうか」

「本当に子供が産まれたなら、絶対に喋るのは避けるべきですわ。」

必要な方、というのがどの程度の事をさすのかわかりませんし。バイクさんに告げる程度なら許して頂けると思いますが……」

「しかし、戦争を防ぐのは本当に必要な事ではないのか？」

私は、悩んだ。表ざたになるのはごめんだ。こんなに事が大きくなった今は、特に。

「本当に、争いは避けられないのですか？」

「私は、男の子の双子を望めば良かったのだ。男の子が一人しかいないから、その子を巡って争っている。せつかく女神は二人とも私に下さったのに」

その言葉に、活路を見いだす。でも、すぐに食いついては駄目。なんでもないように、なんでもないように。

「あら。女神の元には、必ず子供の片割れがいる筈と聞きましたが……。そもそも、真の報酬は女神に捧げる子供と聞きましたわ」

「では、女神の元に私とバイクの子がまだいると!? い、一体どうすれば……」

「さあ……。私も大分前に聞いた伝説ですし、そもそも秘されている物ですし……。理由なく子供を欲しいと言っても、女神は納得されないと思いますわ。報酬ですもの。一つ聞きますけど、もう一人男の子がいれば戦争は防げると思います？」

「女の子もいないと駄目だと思う。それも、氷の力を持った男の子と炎の力を持った女の子だ。でないとバランスが取れない」

私はため息をつく。私だって、子供が可愛くないわけではない。それに、子供をあげてしまえば完全なボランティアだ。私の一年を返せ。

「二人とも返せなんて言ったら、女神は怒ると思いますわ」

「なんとかならないだろうか。女神の伝承で、知っている事があれば何でも教えてほしい」

「どうしようか……。いや、やはり戦争は駄目だ。悩んだ末に、私は答えた。」

「方法があるとすれば……」

「あるとすれば!？」

「いえ、やっぱり駄目。本当に子供が来たなんて。女神の事を言いふらせば、私にも罰が下るかもしれないわ」

そこで、男が私に小袋を渡した。狙った事だけど、私の心は痛んだ。これでは、子供を売るかのようだ。私は子供を売って金を稼ぎたいのではない。子供に養ってもらいたいだけなのだ。でも、ヴァレンティナを育てるのにもお金が必要だ。

私は悩んだ末に口に出した。

「女神が望むのは、優秀な子供だというわ。シエスティアの七の日に、女神に捧げ物をすると言えはいんじゃないかしら」

「優秀な子供を買い取って、生贄に捧げると?」

「まさか。革袋に精液をつめて、感謝の手紙と共に捧げるのよ。もちろん、二人の子供に匹敵する優秀な人の子種を詰めてね。あまり期待しないでね。私も詳しくないんだから。それと、同じ人の願いは、女神は聞き届けないと聞いたと思うわ。私が女神について知っている伝説はこれで全て」

「なるほど……」

男は何度も頷いて、私にお礼を言った。

その半月後。七の日に、私はフレッシャー家の前に子供二人を置いて逃げ出した。

もちろん真夜中。目撃者はいないはずだ。

そして、翌日。

私が帽子をさせたヴァレンティナをあやしながらやけ酒を飲んでみると、幸せいっぱい顔をしたバカップルがやってきた。もはや、二人の仲を隠しもしていない。

バイクは、満面の笑みを浮かべて言った。

「あんたが恩人か。礼を言う」

「いいえ。私は何もしてませんわ」

酒場の奥に移動しながら話す。

「結局、話は丸く済みましたの？」

「なんとかね。結局、私とバイクがそれぞれ別々に同じ日に娼婦を孕ませたという事で落ち着いた。陛下が真面目に事情を聞いてきて、騒ぎ立てれば家の恥だと判断したらしい。我が家は氷を操る家系だ

から、フレッシャー家から男の子を貰って男の子を渡した。それで解決だ」

「俺は少し残念だな。せっかくだから、氷を操る子を育ててみたかった。炎を操る子を二人も手に入れて、父上は大喜びだよ。今から婚約者を決める気にいる。自由にさせるのは俺で懲りたらしい。にしても、キースはずるい。こんな大事な事を決めるなんてな。俺も、キースそっくりの女の子が欲しかったし、色々注文したかった」

「まあまあ。良かったわ。でも、その代償は払えそうなの？」

私が心配する顔を装って聞くと、二人は微妙な顔をした。

「あー。まあ、子供達の為だ。手段は選ばんつもりだ」

「狙いはフィールですね。竜族の末裔なのですが、その優秀さ、気性差は疑いありません」

「頑張ってくださいまし」

ヴァレンティナも応援するように、うー！と言った。

二人は微笑ましそうにヴァレンティナを見る。

和やかに話していると、ジャックが来た。

「バイク！ キース！ もうミラールを調べ上げたのか！？ ヴァレンティナに手を出すな！」

「エルバート王子殿下！？ どうしてここに！」

その言葉に、ジャックは慌てる。っていつか、エルバート王子殿

下って何よ。

「あら、ただの友達で全く関係のないジャック。どうしてここに？」

バイクもキースも、驚いた顔で私を見た。正確には私の腕の中のヴァレンティナを。誤魔化そうとしたけど、無理だったようです。

「まさか、エルバート王子殿下。この子は……」

「だから、違うってば」

あーもう。さりげなくキースが私の腕を抑えてるし。バイクが叫んだから、皆がこっち見てるし。

どうしよ……。

私達は仕方なく、個室を借りて話をした。

キースは、頭を抑える。ちなみに、ヴァレンティナの帽子は脱がされている。

「エルバート王子……。つまり、平民と子をして、黙っていたと？」

「ヴァレンティナの事は気にしないで。王族に入れてほしいと思っ
てはいないから」

「この耳を見れば、どう見ても王族の資格はあります。早めに気付いてよかった。誘拐されていたら、どうなっていたか」

私は頭を抑えた。面倒な……。

「俺みたいな末王子が何しようが、気にしないさ。アビゲイルだっ

て、浮気してるのを知っている。俺を嫌悪しているのな」

「それで済むとお思いですか、エルバート王子。この耳ですよ？
いずれ必ず表ざたになります。遅くなれば遅くなるほど事態は悪く
なります。王宮に連絡を」

「ちょっと待つてよ。ヴァレンティナは将来魔術師になって冒険者
になって私に楽をさせてくれるはずなのよ。冗談じゃないわ」

キースとバイクは、それこそ鬼を見た表情で私を見た。

「姫君に冒険者をやらせると!？」

「姫君じゃないわ。私の子、平民の娘よ。ジャックも承知の事だわ」

「どういう事です、エルバート王子!」

もめもめもめもめもめもめもめ。

揉めに揉めた挙句、私は泣く泣くヴァレンティナを手放す事とな
った。

ジャックも沈んでいる。そうだろう、これから奥さんに浮気で出
来た子を見せに行くのだ。

私は目も眩むような大金を貰える事となった。だが、全く嬉しく
ない。

どうにか私の名は出さないで貰えるらしいが、ショックでしばら
く動けなかった。

何よ何よ、育て損じゃない。

腹を立てた私は、フィールとやらに期待する事にした。でも、こ
の人も偉い人だろうし、子供を奪われる予感……。

私の能力を受け継がせた子を作る方を優先させようかしら。

そうだ、いざとなれば奴隷を買えばいいわ。上手い具合に素質の高い子がいるかしら……。

私はため息をついて、やけ酒をかつくらった。

4話 大事にされるのもそれはそれで大変（父親視点）

私は、黒髪と黒眼を持つて産まれて来た事で、王族でありながら蔑まれてきた。

けれど、あの娘は私を格好良いといった。そして、私の子を産んでくれた。

ヴァレンティナ。私の可愛い娘。ハーフエルフの娘。その子を見た時はかなり驚いた。

何故なら、エルフとは聖なる森にのみ住まい、人間と交わる事はなく、聖王国の王族がその血を引くのみだったからだ。

父上の母君が聖王国の人間だから、エルフの特徴を持つ娘が産まれる可能性は0ではなかったのだが、限りなく0には近かった。

ミラールはヴァレンティナを優秀な魔術師になると信じ込んでおり、色々と育て方を考えていたのも知っている。

事実、ヴァレンティナを引き渡す際には、勉強のリストを渡された。

うちの子は気品がある、だから古代呪文に適性がある！ など、意味がわからない事をミラールは言う。それでも、ヴァレンティナを奪った代償に、それを教えてあげてもいいと思う。

私は魔力はあるが、魔術を碌に覚える事が出来なかった。ヴァレンティナが優秀な魔術師になってくれれば、私も嬉しい。

今のままではいられないだろうという事は、わかっていた。

けれど、ヴァレンティナを王宮に引き渡すのには、かなりの躊躇を感じていた。

……私は、王宮が好きではないのだ。それに、女の子だから王位継承権にも関わって来ない。だから、問題はないはずだ。私はそう自分に言い訳をしていた。

バイクとキースに護衛と言うよりは監視されて、王宮へ行く。ヴァレンティナが不安そうに母を呼ぶのに、心配ないからと言い

聞かせる。

そして、謁見の場についた。

「どうした、エルバート。緊急に会いたいとは……。バイクにキースまで」

父上は私に僅かな侮蔑の視線を送り、バイクとキースには好奇の視線を送った。ついで、抱かれた子供に気付き、侮蔑の視線を強くした。

「外で平民を孕ませたので、報告をと。ヴァレンティナです。母親が死んだので、引き取ってきました」

「……よい。しかし、王族としては迎え入れる事は出来ぬ。お前が親とも限るまい。適当な貴族に養子にさせるか、使用人の子として育てさせよ」

「ならば、私がお預かりしてもよろしいでしょうか」

キースが申し出る。その言葉に、父上は片眉を上げ、そして頷いた。

キースは、花が綻ぶように笑う。

「姫君は私の実の子供として、誠心誠意を込めて育てさせて頂きます」

キースならば安心だ。生真面目だが、その分、私にも嫌悪の感情を示す事無く仕えてくれている。会いに行くこともできるだろう。

俺は父とキースに礼を言い、その場を下がった。

そのまま、キースの家に連れて行って事情を話す。

アイスベルグの当主もまた、嫌悪の感情を隠しきれないようだったが、その耳に気付कि驚愕した。

「これは……ハーフェルフではないですか！ まさか、お相手はエルフ！？」

「いや、普通の娘だった。父上はエルフの血を引いておられるからな」

「陛下がハーフェルフの姫君を、我がアイスベルグ家に託して下さい！ ご安心ください、姫君は私が心してお育てします」

「いや、この子はキースに預けたのだが……」

「姫君には母親が必要ですし、騎士団としての仕事もあります。私と妻がお育てしましょう」

「父上、待つて下さい。ヴァレンティナは、王子直々に私に預けられて、教育方針もすでに……」

「ええい五月蠅いわ！ お前！ お前ー！」

もう大騒ぎである。

キースや私の制止の声を全く聞かずに、アイスベルグ家を挙げてヴァレンティナの為のパーティが開かれた。

父上はハーフェルフである事に気付いていなかったらしく、大喜びするアイスベルグ家に今更返せともいえるはずがない。

苦々しく私を見つめて来たが、私は別に耳を隠していなかった。あの異様なほど長い耳に気付かなかったのは父上である。

「ママ、ママ」

不安げに母を呼ぶヴァレンティナの頭を撫でる。

「すまないな、ヴァレンティナ」

抱きついてくる暖かな体温を感じて、守ろうと思った。

さて、盛大に行われたパーティは当然噂になった。親が私である事も公然の秘密である。

更に、植物が好きだと書いてあったのでヴァレンティナに植木鉢を寄こした所、ヴァレンティナは何と蕾を花開かせた。役に立たない能力ではあるが、能力を持っていること、これは目出度い事である。

それに、なんと娘をあやしている時に、私も冗談でやってみたら出来た。これには非常に驚いた。

それに、アイスベルグ家の子供達、ハミルトンとロレッタとも非常に仲が良い。フレッシャー家のバートルミーとルアンナも良く可愛がろうとして、次世代では長きに続いた両家のいがみ合いは消えうせるだろうと思われた。目出度い事である。

アイスベルグ家の当主は盛大にヴァレンティナを自慢し、その力を言いふらした。

聖王国の大使がヴァレンティナに謁見を申し出て来たのは、当然と言えた。

心配なので、キースに頼んでその場にいさせてもらう。
聖王国の大使は、ヴァレンティナを見て驚愕していた。

「こ、この耳は正しくハーフェルフ。しかも、姫君は緑を育てる力をお持ちとか」

「ヴァレンティナ、見せてご覧？」

ヴァレンティナに種を渡すと、無邪気に芽吹かせてこちらを見上げてくる。

キースと私は盛大に褒めてやった。聖王国の大使は、もはや声も出ない様子だった。

聖なる森から出ないというエルフが訪ねてくるのに、長い時間は掛からなかった。

金髪に緑の瞳のエルフのアルドヘルムが訪れると、国は大騒ぎになった。

そして彼はヴァレンティナに会うと、ため息を吐いた。

「ダークエルフのように黒い髪と黒い瞳ですね。しかし、肌は私達と同じように白い。まさか、このような娘に緑の祝福があるとは……。ヴァレンティナ。この種を芽吹かせてご覧」

渡されたいくつかの種、しかし、ヴァレンティナは機嫌が悪く、嫌！とそっぽを向く。

「ほらほら。ヴァレンティナ。二人で競争しよう。どちらが綺麗なお花を咲かせるかな？」

私は緑を芽吹かせて見せ、負けず嫌いな所のあるヴァレンティナがその倍の速度で芽吹かせる。

しかし、この植物、硬くて芽吹かせるのが大変だったな……。

気付くと、アルドヘルムが驚愕の眼差しでこちらを見つめていた。

「我が一族の引き渡しを要求します」

「しかし、ヴァレンティナ一人でエルフの地に行かせるなんて……ここではハーフェルフは崇められるが、向こうでは苛められるかも

しないし」

私が難色を示すと、アルドヘルムがにっこりと微笑んでいった。

「もちろん、貴方もついてくるのです。限りなく人間に近い我が一族の者よ」

なんですと？

その種が、緑を芽吹かせる能力を持つ者にしか芽吹かせられないエルフの薬草だと知るのは、娘ともども拉致同然に聖なる森に連れていかれた後の事だった。

……どうしろと。

プロット（エロ注意）（前書き）

プロットと言うか、以前殴り書きした物を置いておきます。

プロット（エロ注意）

「お父様……お母様……私はこれから結婚もせず勝手な事を致しますわ。それでも私を、信じてくださいますし」

私の名はミラール・ロウ・レイフォン。異世界に転生した不振な私、異様な言葉で喋り、小さい時から知恵を発揮し、皆に恐れられた私をお父様とお母様は愛してくれた。だから、この家をどんな手を使っても復興させたい。私はそう誓ったのだ。

「信じているよ、ミー。お前の好きなようにやりなさい。今までお前は十分に仕事を手伝ってくれた」

「御家の方は弟のミハエルに任せなさい」

「お父様……お母様、ありがとう！」

私はお父様とお母様に抱きつく。私ももう18歳。ようやく体も育ち、目的を達成できる年になった。身分の高い人はだめだ、身分の低い私ではまだ近づけない。パーティでも、私は奇異な魔女として見られているから、避けられる。狙いは身分が低く、才能のある人だ。私はまず剣闘士奴隷を見に闘技場に行った。

奴隷制度とは残酷な制度だ。しかし、これが私の生まれた世界のルール。奴隷の奉仕の上に私達の幸福があるのだ。貴族として恵まれた生活を送っておいて、闘技場に来ておいてぬけぬけと言えるような言葉ではない。

私には子供を作る事に関連した特殊能力を持っている。ここへ来たのは、より優秀な子種を手に入れる為だ。

「優秀な種馬はいるかしら」

私はじつくりと剣闘士奴隷達を見る。もちろん、きちんと買い取って世話はするつもりだ。だから、なるべく安い相手でなくてはならない。

知力の異様に高い相手を見つけ、私は目を見張った。素人目にもうまい戦い方をするが、力が絶対的に足りない。ほかにも力の強い男がいるが、知力が足りない。それにそういう人は活躍しているから、値段が高くなる。私は一通り確認し、夜を待った。

「これはこれは魔女殿、若くていらっしゃる貴方が男漁りですか？」

「ええ、そうよ。彼を買い取りたいの。お幾らかしら」

私は値段を交渉すると、剣闘士の部屋へ入った。
そこには腕を鎖でつながれている、赤毛の青年がいた。

「ごきげんよう、賢い人」

「お前が俺を買ったのか」

憎しみの目で見られる。反骨精神に溢れる青年だが、それでいい。

「そうよ」

私はズボンを脱がし、口で赤毛の青年のそれを嘗め回す。それと同時に、自分の花弁に手を伸ばし、指を差し入れて慣らした。

「く……なんで、俺ばかり……」

羞恥に顔を染め、悔しそうに顔を背ける。男の尻から、白濁した物が滴っているのを私は見た。性欲を忌避するほうが私の好みだ。どうせ一度きりの種馬。私は、男に跨る。何度か腰を上下させると男は私の中で出した。排卵期は計算してきてある。その上、私の魔力でいい種を取れたことを確認できた。私は満足して、パンティーを履き、ドレスを元のように調える。

「勉強は、好き？」

「なんで、それを……」

男は、顔を上げる。勉強意欲はあるか。初めの取っ掛けりとしては悪くない。

「あなたを買うわ。お名前は？」

男は、驚きに目を見開く。名をロイと教わり、私は男を連れ帰った。

翌朝、早速ロイに勉強を教えていると、顛末を聞いたミハエルが駆けてくる。

「姉さん、剣闘士奴隷を買ってくるなんて！」

金髪碧眼の美しい我が弟は、顔を上気させて怒った。

「家を継ぐのは貴方よ。だから私が少しぐらい馬鹿をやっても大丈夫」

「姉さんは、姉さんは他の貴族の女共と違うと思っていたのに……！」

ミハエルは、涙を滲ませながら怒った。私は弟の涙を拭いてやり、作っておいた菓子を握らせる。

「ロイに罪はないわ。護衛にもなるし、仲良くしてやって？」

「だけど、姉さん！」

なおも文句を言うミハエルをやんわりと追い返すと、控えていたロイは言った。

「良かったのか？ 俺なんか買って……」

「いいのよ。さあ、勉強の続きをしましょう。その言葉遣いも私好みに直さなくてはね」

そうして私はロイに勉強を教えた。スポンジが水を吸うがごとく、ロイは知識を吸収していく。子作りを強制してこない事には首を傾げていたが、与えられた知識を素直にロイは喜んだ。ミハエルも、だんだんロイになついてくれた時だった。私は子供を生んだ。家族皆が驚いた。ミハエルがロイの事をひどく詰る。私はそれを苦笑しながら宥めた。

「この子の父親はわからないし、責任を取らせるつもりもないわ。この子は私だけのもの。病弱だけど飛び切り賢い子になるわ。そうしたらミハエルのお手伝いをさせましょう。使用人として使ってね」

「そんな、姉さん！」

「私はこれから多くの子を生むわ。その全てが父親のわからない子でしょう。でも約束する。皆優れた子になるわ」

お父様が、私に聞いた。

「それは、予言かい？」

「事実よ」

私はにんまりと笑う。そうして、かわいい子、レイナールに指を握らせる。

一年、力を貯めなおさなくてはならない。初めの子は加減を間違えた。知能に特化しすぎて、病弱すぎる。次は直接お給料を持つてきてくれる騎士の子供がいい。力だけでは駄目だ。頭も良くなくては。けど、そんな人材は奴隷でも高い。レイナールの教育費もあるし、そう何度も奴隷を買うわけにはいかない。

やはり、騎士をナンパしたほうがいいだろう。一回子供を生んだ事でパワーアップを果たし、男を骨抜きにするフェロモンも手に入れた。後はいい男を見つけるだけだ。

一年たち、力を十分に貯めなおした頃、私は王城へ行ってみることを決意した。

「ロイ、いらつしゃい」

レイナールを抱き上げ、穏やかな顔であやしていたロイは、残念そうな顔になってこちらへかけてきた。

「ロイ、あれは貴方の子供でなくてよ」

「存じております、ミラール様」

ロイは礼儀正しく一礼するが、レイナールにもう一度視線を送っ

た。ロイはこの二年で私の右腕として使えるほどに成長していた。身綺麗にしていずいぶんとかつこよくなつたロイを従え、ご機嫌伺いとして王城に向かう。

いい男を捜して歩いていると、男達の争う声が聞こえてきた。

「もう、やめましょう。こんな関係……！ あのご令嬢と結婚してください、バイク。出ないと貴方の家が途絶えてしまいます。私達は騎士団長。子孫を残す義務があるのです」

「ルヴァン、お前こそいまだに独り身の癖に！ 子供など養子を取ればよい！」

ほうほう、騎士団長同士の恋か。私はにこりと笑った。二人とも素養は高い。妙な才能も見える。二人の男の遺伝子を混ぜ合わせるという術を試すのにいいだろう。騎士がほしいという目的にも沿う。私は二人が別れたのを見計らい、まずはバイクを追った。部屋に入る前に私に気づき、バイクは問うた。

「む、どうしたのかな、お嬢さん」

「お慕い申し上げておりました」

私はバイクの唇を奪い、部屋になだれ込む。フェロモンを出し、バイクを誘い、一つに交わった。ちょうどいい所に、ルヴァンがやってくる。

「バイク？ ……！！」

交わる私達に顔色を変えたルヴァンを、私は招いた。フェロモンは、ルヴァンをも惑わす。バイクの精を受け入れた私は、ふらふらとや

ってきたルヴァンのズボンを脱がし、そのペニスを胸ではさんで先端をちろちろとなめた。そして、ルヴァンを受け入れる。

ルヴァンと交わっていると、バイクが私のお尻にペニスを入れた。同時に前後を貫かれ、私はあられもない声を出す。

終わった後、呆然とした二人をおいて私は部屋を出た。

ロイが、顔を硬くして部屋の外で待っていた。

「ロイ、貴方、もしかして私の恋人のつもりなの？」

「いえ……」

「そう、なら良かったわ。思い上がりは駄目よ。目的がすんだから、帰るわ」

翌日、バイクとルヴァンがやってくる。

「昨日は子種をありがとうございましたわ」

その言葉に、バイクとルヴァンは顔を赤らめた。

「ご安心なさつて。責任を取れなどというつもりはありません。子種が欲しかっただけですもの」

「こ、子種……いや、そうではないのだ。もしも子供ができれば、その……これを頼むのは心苦しいが、養子に欲しいのだ」

私は片眉を上げた。そうか、そうきたか。私はしばし考える。騎士団長二人と争っても益はない。

「二年後に、いい種馬を紹介してくださるならいいわ。それと、一

年間は手元に置かせてね。授乳の問題があるから。私、自分の母乳で育てる主義ですの」

「た、種馬……。わ、わかった。約束しよう」

そうして、二年がたった。私はその間に双子の男の子を生んだ。レイナルは3歳となり、既に才能を十二分に見せている。ロイは三人の子供を平等に可愛がってくれた。

しかし、子供達には問題があった。騎士団長達はこの子を化け物と言わないだろうか？

私は双子をバイクとルヴァンに渡す。

「名前はつけていないわ。二人でつけて頂戴。もう、ミハエルに怒られて大変だったのよ。それで、この子達には少し問題があるのだけど……駄目だったらこちらで育てるわ」

「あ、ああ。ありがとう、ミラー嬢。……まるで私とルヴァンの子のようだな、この顔立ちは……。少々の問題なら構わない。知恵遅れなのか？」

私は、双子の頬を叩いた。バイクとルヴァンが驚く。バイク似の子が小さな氷を、ルヴァン似の子供が小さな炎を投げつけてきた。私はそれを払う。二人が化け物と言うなら、問答無用でこの子達を引き取るう。二度と渡しはしない。

バイクとルヴァンはあっけにとられた。そして、喜色満面に、それぞれの子を抱きしめた。

「この子は、この子は確かに私達の子です！ 本当に……本当にいいのですか？」

なんだ、二人も能力者だったのか。涙を流さんばかりに喜んで
る二人に、私は落ち着いた様子を演じて言った。

「構わないわ。ただし、今度のパーティで私が気に入った人と出来
るように手引きをお願いね。パーティの日は指定させていただく
わ」

バイクはルヴァン似の、ルヴァンはバイク似の子供を選んだ。反
対の方が良いといったのに、聞いてくれない。二人を送り出した後、
レイナールは中々泣き止まず大変だった。小さいなりに、わかつて
いるのだ。これが双子との別れだと。レイナールを抱きしめ、宥め
てやる。

ロイもまた、悲しんでいるようだった。

「ロイ。あの子達を渡す事は一年も前から約束していたことでしょ
うに」

「しかし、お嬢様……あんなに、かわいかったのに」

「あの子達は私の子ではなくてよ。あの二人の子なの。私は腹を貸
しただけ。レイナールはどこにもやらないから、安心なさい」

ロイにレイナールを渡してやると、ロイはレイナールをあやした。
その表情が安らぐ。ロイは今ではミハエルの信頼厚い参謀と化して
いた。無学だった時から四年でここまで育ったのだから、凄いもの
だ。

「あの子達を渡したのか」

ミハエルが、つかつかと歩いてきて私を詰問した。

「一年も前から言っていたことでしょう」

「姉上には、愛情というものはないのか！ あんなに、あんなに可愛がっていたではないか！」

「預かり物だもの、当然ね。ミハエル、貴方もそろそろ結婚しなさいな。このままではレイナールが継承権を持ってしまうわよ？」

ミハエルは、怒って部屋を出て行く。

それを私は見送り、パーティーの為に仕立て屋を呼んだ。

思い切り大胆な服をデザインしてもらい、それを作ってもらった。

「どう？ 似合うかしら」

ロイに聞くと、ロイは頬を赤らめて頷いた。ふふふ、私もまだ22。美しさはまだ衰えていなくてよ。

パーティーに行くと、騎士団長達が物凄く上機嫌で子供を自慢していた。

わずか二ヶ月で確固たる絆が結ばれたらしい。

「まさかバイク様、互いの子を交換したのですか？ 互いにそっくりではないですか」

その言葉に、バイクは微笑み、子供たちに言った。

「あれをやって見せなさい、お前たち」

「「あいつ」「」

二人が、炎を、氷を投げる。その様子に、会場全体がどよめき、祝福した。

「これは……確かにバイク様とルヴァン様の実子ですね。これはまさしく一族の力……！」

「ルヴァーン。お前、生んだんじゃないかな？」

「似たようなものかもしれません」

「おいおい、マジかよ」

そうか、あの力は誇るべきものだったのか。なにせよ、子供達が幸せいっぱい過ごせる事は確定したようなので安心して男漁りを始める。

その時、私の目に怜悯な美貌に獣のような耳のおじ様が目に入っ

た。

素養が吹くほどに高い。妙な素養も異様に高い。

あれだ、あの男がいい。私は人々を掻き分け掻き分け、バイクに近づいた。

「ごきげんよう、バイク様。あの素敵な男性に紹介してくださいまし」

「フィールか。あれは子種としては期待できんぞ。竜族は子供が出来難いからな」

「まあ、そんな素敵な名前の一族ですか？　なおさら興味がわきましたわ」

「まあ、貴方がそういうならいいが……」

「バイク様、魔女……失礼、ミラール様とお知り合いで？」

「ああ、少し恩があつてな。いい男を紹介すると約束したのだ」

「ははあ。しかし、子種とはまた直接的な……しかもフィール様は妻帯者ですよ」

「竜族との一晩のロマンス。素敵ですわ」

私は言つてのけて、フィールに紹介してもらつ。幸い、この国では貴族の貞操観念はかなりゆるい。

フィールは、先ほどの話が聞こえていたらしく、大胆なお嬢さんだなと苦笑した。

フィールに人気のない庭へと連れて行かれる。

フィールのそれは竜族の名に恥じぬ大きさと、受け入れるのには大分苦労した。

三回交わり、やっと受胎した私はフィールを放した。

「楽しい時間をありがとう、フィール様」

「いや、私も楽しかった」

それから私は食べた。食べまくつた。双子を孕んだ時よりもお腹が減つた。その上、いつまで立つても子供がお腹を蹴つてこない。不安になつた頃、大分早く産気づいた。私が生んだ子供は、卵だつた。竜族だからって、まさかそんな。さすがの私も動揺する。とりあえず抱きしめて暖める。ロイとミハエルも、それを知って激しく動揺した。

「姉さん……これはもうフィール様に相談したほうがいいのでは」

「そうね、下手な世話をして殺してしまつては本末転倒ね……」

私は、フィール様の所に卵が生まれた場合どう世話をすればいいのか手紙を送つてみた。ふざけるな、馬鹿にしているのかとオブラートに包んだ返事で返された。そうか、普通は子供として生まれるのか。

仕方なく、私は卵をお腹にまいて移動する。レイナールも育て方を良く調べてくれた。

そんな折、バイクがたずねてきた。

「おい、詐欺師を紹介されたと詰られたぞ……なんだその卵は」

「ご迷惑おかけして申し訳なかったですわ。卵を産んだので心当たりはないかと聞いたら、馬鹿にされたのかと思つたらしいんです」

「たま……さすが魔女殿は人間離れしておられる」

「子供達はどのように過ごしていますか？」

「おお、家臣に母親はどうしたと詰め寄られて困るがな。それ以外はもう目に入れても痛くない様子よ。力が顕現するのは10人に1人だからな。それが二代続けて力が発現したのだ、嬉しくない筈がない。問題なく嫡子となつたぞ。断言する。あれは俺より強くなる。なにせ、俺とルヴァンの子だからな。いや、ミラール嬢には悪いが、本当にそんな気がするのだ」

バイクは本当に嬉しそうな顔をする。それを見て、私は微笑んだ。

子供が幸せに暮しているのだ、これ以上の幸せはない。

その時、コツコツと卵から音がした。私は卵をやさしくテーブルの上に置く。

パリ…と殻が中から割れ、私は卵を割るのを手伝ってやる。すると、小さな小さな竜が出てきた。

「……………ええっと、竜は騎士になれるのかしら、バイク様？」

「わ、わからん。フィールの子か？」

「子供といつても信じてもらえそうにないわね。この事は内密にしていただけないかしら？ それと、また殿方を紹介していただけます？ 私、騎士の子が欲しいんですの」

バイクが、緊張したように言う。

「バイクはやらんぞ」

「わかっていますわ。大丈夫、私はまだ23。若いんですもの。まだまだ子供は生めますわ」

そうしてバイクを見送り、私は竜の子供に乳をやり、名をドランと名づけた。ロイの動揺の様子つたらない。レイナールは大喜びでドランの世話をしている。バイクとルヴァンもドランを心配してよく訪ねてくるようになった。

ドランはすすくと大きくなり、一年もすると人の姿も取るようになった。そうか、こうして人と交わったのか。これなら騎士にもなれそうだと、私は胸をなでおろした。バイクとルヴァンは、私以上に安心しただろう。

5歳になったレイナールはいよいよ賢くなり、ロイの仕事の手伝

いをし始めた。ロイもレイナールに追いつかれまいと、前にもまして必死に仕事を頑張るようになって何よりである。

私がパーティに行く支度をしていると、レイナールがねだってきた。

「お母様、僕、次は妹が欲しいです。僕も種馬探しに行きます」

「あらあら、まあまあ。いいわ。次は妹にしましょうね」

私はレイナールの服も仕立ててやり、一緒に次の種馬探しにくく。

「警戒されてしまって中々いい方が見つかりませんわね」

フィールなどには、冷たい顔でにらまれてしまった。

「もう騎士の子供でなくてもいいのでしょうか？ 私の知っている方に芸術家がいるのですが……」

私はルヴァンに案内され、パーティ会場から出た。部屋に入ると、多くのキャンパスが転がっていた。

「まあ、画家ね。いいかもしれないわ」

私は画家達を見回した。一番芸術の素養が高いのは……いた。

「貴方、一緒に散歩に出かけませんか？」

醜い顔のせむしの男が、飛び上がった。ルヴァンも、驚いている。レイナールが言った。

「えー、可愛い妹が欲しかったのに。綺麗な顔の画家さんはここに
いっぱいいるよ?」

「私そっくりの子が生まれるわ。それでどう? 絵の得意な妹は、
嫌い?」

レイナールは考える。

「うーん、いいよ。才能がホショーされているんなら、絵はお金に
なるしね」

「そう、ルヴァン。レイナールをお願いね」

「お、お嬢様っ」

せむしの男の手を取って、私は人気のない庭へと移動する。女に
慣れていないだけあって、手玉に取るのは簡単だった。

交わった後、せむしの男の頭にキスをして、私は言う。

「いずれ、うちの子の家庭教師になってくださらない?」

「よよ、喜んでっ」

私はそれに頷き、立ち上がってスカートを調えた。その時、竜族
だぞ、と声が聞こえる。まさか。私は走って騒ぎの所に向かった。

「かーしゃま、かーしゃま!」

「ドラン! ドランなの!?!」

騒ぎの元はパーティ会場だった。フィールが泣きじゃくるドランをあやしている。私の顔を見たドランは、竜の姿となって私の所に飛び込んできた。

「1人寂しかった！ かーしゃまー」

「ごめんなさい、ドラン」

ドランを抱きしめて私は謝った。よくも侵入者として始末されなかったものだ。私は深く反省した。フィールが、固い顔で言う。

「君と……私の子か。卵の」

私は苦笑して言った。

「悪いけど、私は淫乱だから父親はわからないの。貴方が父親の可能性があるからって、気にする必要はないわ」

「その子は、我が家の跡取りだ！」

投げかけられた言葉に、私はドランを抱きしめ、冷たい声で答えた。

「誰がなんと言おうとこの子は私が産んだ、私だけの子供よ。この子は騎士にするの。貴方には渡さない」

「君は、竜族の出生率の低さを知らないからそんな事が言えるんだ。その子は先祖がえりがおきている。その子の貴重さは果てしないぞ。その子は確かに、我が家の宝だ」

「ああら、相談したときに馬鹿にしていると一蹴したのはどのどなたでしたっけ？ 貴方はあの時父たる資格を投げたのよ。詐欺師との侮辱、撤回してくださる？ それでもドランは渡しませんけれど。なんなら、裁判に出てもよろしくてよ？」

フィールは、悔しそうに唇をかみ締める。

ドランは私とフィールの顔を見比べて、不安げに私に抱きついた。私は優しくドランを撫でる。

その後、私は本当に訴えられた。多額の賠償金と詐欺師という噂の撤回と引き換えに、ドランの引渡しを命じられた。その際、バイクとルヴァンに子を渡していた事もばれてしまった。敗因は、私の親としての適正のなさ……独身で、遊びまわっていて、更に子供を他人にあげていては当然のことだ……と、竜族の出生率の低さだった。レイナールが必死に弁護してくれたのだが、権力には勝てなかった。

フィールの奥さんが、涙を流して喜んでいたのが目に焼きついて忘れられない。悔しい。すごく悔しい。レイナールも、今度はずっと一緒だと思っただけに泣きに泣いた。ミハエルも泣いてくれた。お父様とお母様は賠償金をもらえて喜んだ。お父様、お母様……。確かに、我が家はそんなにお金がないし、賠償金はすごく高かったですけど……。

そんな時、子供が生まれた。私はそれをミケイラと名づけた。

「お母様、この子いいね。父親の身分が子供を取り上げられるほど高くなっていいね」

「ええ、お母様、権力というものを正直舐めていたわ……」

私ももう25歳。ここまで騎士を生めていないと正直焦ってくる。

縁談を蹴りつつ、私は考えた。そこで気づく。もう、お金はあるんだから奴隷を買える。詐欺師の噂が消えた事と、多額の賠償金を貰うことでミハエルもいい人と結婚できたし、万々歳である。

私は一年時を待つと、ロイを護衛に、レイナールをつれて奴隷市に向かった。

「また男漁りですか？ 縁談は山ときているでしょうに。レイナール様の教育にも良くないのでは……」

ロイが、不機嫌に言う。フィールの家が、バイクの家が、ルヴァンの家が、子供を取り返されてはたまらないとばかりに縁談を持ってくるのだ。

「この世の闇を知る事もまた仕事のひとつよ」

私はいい、レイナールと共に奴隷市を眺めた。いい人は高く、とても手が出ない。

しかし、ここで諦めるわけには行かない。そろそろ兵役の問題がある。貴族は1人は騎士団に差し出さなくてはならない。ミハイルは嫡男だから免除されたが、病弱なレイナールが騎士にされてしまえば、生きていられるとは思えない。

私は直接奴隷商人の売れ残りの品を見に行つた。

「あの人、あの人がいいっ！」

レイナールが叫ぶ。奴隷とは思えない、きつくこちらをにらんだ片腕の剣士。その人から、高い素養を感じた。閉じられているが、妙な素養もある。いい子ね、レイナール。本当にいい子。見る目がある。

他にも、病気の者、怪我をしている者……。そんな者達の様子を

見て回る。

そこに、不可思議な、異様に高い素養を持つ赤子がいた。赤子は死に掛けていた。それを抱いた母親はもう死んでいる。私は赤子その場でカトルと名づけ買い取り、乳を与えてやった。

そして、私は満足して家に帰った。

その晩、早速片腕の剣士と交わる。片腕の剣士の名をポールといった。

ポールの教育をロイに任せ、私は赤子を育てるのに専念する。

子供が生まれ、ナイトと名づける。私ももう27歳だ。

レイナールは8歳となつて学校に通いだした。ミケイラは二歳。

ロイは気がつけば逆にポールに夜の教育を施され、くつついていった。

まあでも教育は済み、ちゃんと私のことをお嬢様としてエスコートしてくれる。

ミハイルの妻が子供が出来ない事を悩んでいたので、子作りの指導をした。

ナイトが一歳になったおり、ミハイルの子が生まれ、お披露目のお茶会を開いた。

「いやしかし、ミラール嬢は子沢山ですな」

「あら。私の子は3人だけ。そうでしょう?」

「1人拾ってきたではないですか」

「あれは夫候補ですわ」

「それだと45歳の時に子を産むことになりませんか?」

「それがどうか致しまして? でも、さすがに子供が多くなつてき

ましたわね。今年は生もうかしら。生まないようにしようかしら」

その言葉に、お茶会に出ていた人々はあきれた。フィールの妻が、悲しそうに言う。

「うらやましいですわ。私はちっとも子供が生まれなくて……。なのにミラー様は一回で……」

「出来るように計算して作ってますもの。当然ですわ。例えば私、明後日の夜に励めば確実に孕みますわよ。私は孕みやすいたちですし」

「計算!？」

フィールの奥さんが身を乗り出して問うた。フィールが、半信半疑で言う。

「信じ難いな」

「私だけの秘儀ですわ。お賭けになります?」

「私もミラーお姉さまに二ヶ月ほど見てもらったら孕んでたんですのよ」

「よし、一族の若いのと一回して子供が出来たら高額で引き取ろう」

「あら、子供は渡してくれませんの? ケチですね」

「竜族の子供は貴重なのだ。渡すわけには行かないよ」

「姉さん、赤ちゃんを賭けの出しに使うなんて、酷いよ」

ミハイルが止める。私はミハイルを安心させるように笑った。

「何も賭けが終わったら赤ちゃんを捨てたりするわけじゃないわ。大事に育ててもらおうよ」

「当たり前だよ！」

ミハイルは怒っていつてしまう。その数カ月後、私は卵を産んだ。

「ミラール様……どうか、どうか私にもミラール様の秘儀をお教えてくださいまし！」

卵を受け取りに来たフィールの奥さんが私に頭を下げる。

「まあまあ、頭をお上げになって。アドバイスするのはいいけど、誰にも教えては駄目よ。生理日の周期はわかるかしら？　いつですの？」

「わかりましたわ！　えと、私、一年に一度しか生理が来ないんですの」

「なら、1、2年はかかるかもしれないわね。よろしくて？」

「構いませんわ」

私はフィールの奥さんのお腹を触り、排卵が起きているかどうか調べる。

今日はない。

「こうして毎日調べますの。そして時が来たらフィール様を押し倒すのよ。お分かり？」

「わかりましたわ」

数カ月後だった。フィールの奥さんの排卵期が来た。

「来ましてよ！ 今日朝までフィール様を離しては駄目！ いいえ、明日いっぱいまで交わってらっしゃい。さ、急いで！ 一年たってまだ子供が出来ないようでしたら、またいらしてね」

私はフィールの奥さんを追い立てる。

そうして、一年がたつ。フィールの奥さんが子供を生んだとの連絡が後に来た。そうか、子供で生まれたのか。

そうそう、卵も孵って可愛い女の子の竜が生まれたいらしい。フィールの一族は喜びに沸き立っている。また大量のお礼を貰った。

そろそろ私も30だ。竜族からの縁談がうざい。

レイナールは11歳にして神童と呼ばれ、バイクとルヴァンの双子とドランは9歳と7歳にして騎士団で頭角を現しつつある。5歳のミケイラはケルンというせむしの男に師事をし、絵描きとしての才能をあらわしつつあり、3歳のナイトと4歳のカトルは剣のおもちやを振り回して遊んでいる。ナイトは、剣を振り回すたびに剣に雷がまとわりつくようになった。1歳の竜の女の子は大事に育てられているという。

ミハイルの子供も、2歳となりすくすくと育っている。ミハイルの奥さんは、二人目を孕んだ。

これだけコネとお金を稼げば、問題はないだろう。

私は、今度は恋愛をする為にパーティーに繰り出した。

「魔女だ……」

「魔女が来たぞ……」

さわさわと、人々が囁く。

奥様方が、私の周りに集まった。

「セシリア様を診たって本当ですか？ 私、中々子供が生まれませんの」

私は、奥様のお腹に手を当てる。

「あら、今がチャンスですわよ。今したら十月十日後に可愛い子が生まれますわ」

「何ですって！ 貴方、貴方！」

「私も、私も見ていただけます!？」

「あら、貴方は今日は駄目ね。どうやっても孕まないわ」

私は奥方様やお嬢様方のお腹に手を当てて答えて回る。

中でも竜族のお嬢様はすごく喜んだ。竜族の男共も喜んだ。幸運な男が選ばれ、皆に祝福されて部屋に消えていく。

一通り女達の診断が終わると、私はバイクヤルヴァン、フィールと踊る。そのお陰で人の輪に入ることが出来、私は様々な人と踊った。若くてかっこいい男の人に私は言う。

「今夜、いかが？」

「結婚してくださるのなら」

軽く返され、私は苦笑する。踊りつかれてバルコニーまで行くと、そこで素養がべらぼうに高い男を見つけた。

「これはこれは、魔女殿。今宵は種馬を探しに？」

「ええ、そうよ。よくわかったわね」

「私が立候補しても？」

「子供を奪わないでくれるかしら？」

男は笑った。

「貴方は男に都合のいい女ですね」

その言葉を返事と受け取って、私はバルコニーの戸を閉める。そうして、男にキスをし、手をズボンにかけた。

翌年、私は子を生み、レオンと名づけた。ミハイルはもうあきれ返って何もいえない。

また、私の所に奥方様が診断にやってくるようになった。

格安で今日身ごもるかどうか見て差し上げたら格安にしすぎて庶民からも集ってくるようになった。妊娠しても奥方様は産むことに対する不安から私の所に通い続けた。私は男の子よとか、女の子よとか、健康な子だわとアドバイスしてあげた。男の子なら持っている才能の種類もわかる。一応、お腹の中の子の才能しかわからない振りをしたが。その流れでお父様の領地で生むので、自然、産婆も集まった。ついでなので、医師を優遇にし、学校を建てる。しかし、奴隷商ま

で私の言葉を利用したしたのは辟易した。妊婦を出すときに、あのミラール様が天才を孕んでいるといった……などと口上を上げるのだ。けれど、断ったら後が怖いし。

32になると、ルヴァンとバイクが今度は双子の女の子が欲しいと我俣を言ってきたので割高で生んでやる。性別も選べると知り、ポールに驚かれた。それとケルンが絵描きとして大成し、恋人が出来た。しかもいっぱい。忙しくなってしまったので、今はケルンの弟子が教えに来ている。

「私ももう34なのねえ」

レイナールが15になり、試験に合格して仕官した。家で働いて欲しかったのだが、ロイのたつての願いに結局私は折れた。レイナールがいなくなった分、ロイは忙しそうだ。なので、ミラールの護衛は最近ポールばかりだ。バイクとルヴァンにやった双子とドランは相変わらず騎士団で頑張っている。1歳になる女の子のほうの双子は蝶よ花よと育てられているはずだ。もう婚約者が決まっているらしい。ミケイラは9歳になった。狙い通り絵ばかり描いている。練習として、格安で赤ちゃんを抱っこしたご婦人や妊娠したご婦人を描くという仕事をしている。これは庶民に人気が高い。

ナイトは7歳になった。ようやく貴族としての義務、騎士団に入れるようになる。カトルは8歳。医療に興味を持ち、勉強をするようになった。5歳の賭けの子供は小さなお姫様としてあがめられているらしい。3歳のレオンは、私の膝の上で遊んでいる。

それと私が崇められ始めた。

「ミラール様は、次は誰をお召しになりますの？」

「医者なんていかがでしょう」

「うーん、医者ねえ……？ カトルが医術に興味を持ち始めているから、いいかしら。ロイ、もう一度子作りしてみる？ 次は学者を目指してみない？」

私の言葉に、奥様方がため息をつく。そう、私は才能を選択できるのだ。

ロイが返事をする前に、ポールがロイを抱きしめ、私を睨む。取らないってば。

「羨ましいですわ……」

「ロイが駄目みたいだから、学者でいい知り合いはいなくて？」

「ミラール様、俺達の子どもでは駄目ですか？」

ポールの言葉に、私は片眉を上げた。奥様方が声を上げる。

「あら、ロイを取られたくないのではなくて？」

「我慢します。バイクとルヴァンの子は本当に二人にそっくりです。俺もそんな子供が欲しい」

「まあ、そんな事も出来ますの？」

「出来るわ。男の子が欲しいの？ 女の子が欲しいの？」

ロイは顔を赤らめ、ポールにぽつりと呟いた。

「両方を」

「あら強欲ね。ま、いいわ。誠心誠意仕えてくれたし、代金はおまけしてあげる。ロイ、貴方の我俣を聞くのはこれで二度目よ？　そうね、一月後に私の部屋に揃っていらっしやい」

「ありがとうございます！！」

それに、奥方達は再度ため息をついた。

それから、竜族からのラブレターに加え、男同士のカップルから代わりに子供を生んで欲しいとの手紙が届くようになった。私はそれを脇に置き、お茶を飲む。ポールとロイは以前にもまして私の体を気遣ってくれる。そろそろ私の体力がまずい事をわかつているのだ。私も、カトルの子を最後にすることに決める。カトルの子は作る。それで後悔しないと私は断言できた。カトルには何か得体の知れない力がある。ロイに肩を揉まれ、ゆったりとくつろぎながら私はまだ見ぬカトルの力に期待した。

「ミラールお嬢様！　大変です、ナイト様が！」

その時、ポールが駆け込んでくる。

「ナイトに何かあったの！？　15歳までは実戦に出さず教育 فقطって言っていたじゃない！」

私がナイトをやったのは、騎士団というより騎士団に入るための学校だ。危険な事は絶対にしないはずだった。

「ナイト様が、後継者のいない伯爵家に伝わる雷の秘儀を使ったとかで！　その理由が嫡男の駆け落ちで駆け落ちした村が盗賊に襲われてその襲われた村が俺の故郷で！」

「何よそれ！？ まさか……」

「ナイトと俺の即時引渡しを求めています！」

私はロイに視線をよこす。

「どうなの、ロイ。この場合家は裁判に勝てる？」

「残念ですが……相手の爵位が高すぎます」

「ミラー様……あの……あの……ロイを俺にください！」

「無理！ 無理！ 超無理！ どんな思いをして育てたと思ってるの！？」

「すみませんミラー様！ 行かせてください！ 後継者は育てていきます」

「この恩知らずうう！」

珍しくけたたましく騒ぐ私達に、使用人が集まる。

不安そうに見つめる使用人たちを前に、私は平静を取り戻すしかなかった。

「お、おお……孫よ……その、その腕は……苦勞したの、苦勞したの……」

「ナイトちゃん……曾おばあちゃんよ。貴方達をずっと探していたの」

「お母様……騎士に縁がないですね。どうしよう、私が兵役に赴くのはかなり不安がありますが」

レイナールが困ったように私に聞く。

「あ、レイナールも伯爵家に行くことになるので問題はない」

裁判官の言葉に、私とレイナールは目を点にした。

「お待ちください、こうも息子達を連れて行かれては我が家が立ち行きませんわ。兵役もそうですし、働き手についてもそうですわ。私の子供に騎士は大勢いても、我が家に騎士は残っていませんのよ。ましてやロイとポールは私の右腕、私の頭脳でしたのよ。優秀で忠誠心の厚い奴隷など、そうはいませんわ」

「まだレオンがいるだろう。兵役については遅れても構わない。伯爵家はロイとポール、レイナール、ナイト、腹の子の賠償金と5名の奴隷を子爵家に渡すように」

レイナールがすまなそうに私を見る。これでまたお金だけが増えてしまった。危ないので、ミハイルに言って護衛を増やさなくてはならない。私は失意にくれた。

新たな警備体制を整えた頃、レイナールが子供を取りに来た。

可愛らしい男女。この子達も、名を与えられることなく私の手の届かないところへ連れて行かれるのだ。

知らず、涙がこぼれ、レイナールはそれをそっと拭った。

「僕のお母様は、お母様だけです」

私はレイナールの胸の中で泣いた。レイナールは、立派に育って

くれていた。

ミハエルとカトルもやってきて、私を慰めに来てくれた。

「私、お家復興の為に頑張ってきたつもりよ？　なのになんでこんなに裏目裏目に出るのかしら」

「姉さん、貴方のお陰で我が家は名声とお金を得ました。後は僕が頑張るだけです。全て僕に任せて、姉さんは自分の幸せを追ってください。僕も姉さんに似て、子沢山です。大丈夫ですよ」

「ミラール様……泣かないで。僕がミラール様の夫になって、守ってあげます」

「ミハエル、カトル……ありがとう。ありがとう」

私はようやく元気を取り戻したが、レオンとカトルについてはまだ不安があった。

「ねえ、レオンとカトルは大丈夫かしら……」

「レオンは父親の許可を貰っているし、私は貴方の未来の夫ではありませんか」

「そうよね、平気よね……」

それでも不安は拭いきれず、私は再度子供を作ることにした。奥方様達に、相談する。

「後で子供を奪いに来ない方がいいわ。誰かいなかしら」

「ミケイラ様、レオン様のお二方がいれば……まあ、あんなにお子様がいっぱいいらっしゃるのに手元に残ったのがお二人というのはお寂しいでしょうけど」

「そうなのよ。レイナールが連れて行かれたのが大きかったわ」

「レオン様は多分お迎えがいらっしゃると思うわ。私知ってるのよ。レオン様の父君は……」

「面白そうな話ね。混ぜてくださる？」

そこに、美しい豪華なドレスの奥方様が騎士を引き連れていらっしやった。身分の高い方だろうと思い、レオンを下ろして礼をする。しかし、周りの奥方様はもっと深く、上品に礼をした。

「王妃様……！！」

私はその言葉を聞き、目を見開いた。

「王妃様、何ゆえ、何ゆえこのような辺鄙な場所に？」

王妃様はゆったりと微笑む。

「産後すぐに呼びつけてはいけないと思ったのよ。知ってたとおり、レオンの父は私の息子なの」

「な……なんですって？」

「あら、知らなかったの？ 子爵でありながら名家と争い、その身に過ぎた良縁を断り続け、子売ってばかりいる貴女の事は良く知

っているわ」

私は唇を噛み、俯いた。

「あら、そんな顔をしないで？ 望みどおり、子供を買い取りに来たのだから」

「レオン様を、どうなさるおつもりですか……。あの子が王家の血を引いているという確証はありませんよ」

「レオン、貴方、光は出せる？」

「出せないもん」

「そう？」

王妃様は意外そんな顔をしてレオンを見た。

「知ってるよ、ナイト兄様はバチバチが出来るから連れて行かれたんだよ。だから僕は何も出来ないんだよ」

王妃様は、優しい顔で微笑んだ。

「そう。賢いのね。でも、それが出来るようにならないと貴方もお母様も苛められてしまうのよ」

騎士が剣を私に突きつけた。

「レ……レオン」

レオンは、眉を八の字に曲げた。それから、手を差し出すと手のひらが光った。

「貴方は素晴らしいわ、ミラール。羨ましいくらい。私の子は誰もこれが出来るようにはならなかったわ」

「レオン様の他に王位に相応しい方は山ほどいるはずです。出自の怪しい、子爵家の子供など……どうぞ、捨て置いてくださいまし」

「王家の血筋を引くものを放っておく訳には行かないの」

「ならばなぜ！ あの時王子は私を抱いたのです。私が子作りを目的に来ていることは知っていました。子供も奪わないと約束してくださいました！ そして何故そつとしておいてくれないならば、今まで放っておきましたの！？」

王妃は、頭を抑えて言った。

「あの子の遊び癖には私も困っているのよ。まあ、妊娠の女神の子なら出来は保証されたも同然ね。レオンの後継者には私がなりましよう。特別に兵役は待ってあげるから、新しい子を作るのね」

私は崩れ落ちて涙を流す。レオンが、私の頭を撫で続けてくれた。私はレオンを抱きしめる。

「王家なんて、王位争いで苛めや暗殺が渦巻いてるに違いないわ。そんな所に貴方をやるなんて……！」

「大丈夫、レオンはちゃんと私が守るから。……今日はリストを持つてきましたのよ？ この中の方達でしたら、子供を奪わないよう

言い含めてありますからね」

王妃様は、早速レオンを抱いて行ってしまった。奥方様達が、私を慰め、祝福してくれる。

「レオン様は王族になったのですわ。目出度い事ですわよ」

「そうですわ、誇らしい事ですわ」

「ありがとう、皆さん。でも奴隷を買ったら伯爵様で、許可を貰えば王妃様に取り消され、何を信じていいのか、わかりませんわ」

「王妃様のリストを信じましょう？ 下手な人は入れませんわよ。それに、1人は選ばないと……リストを見てもよろしくて？ ま。年上の方ばかりね。確かに既に子供のいる殿方は無理に子供を奪おうとはしないでしょうけど。あら、伯爵様もいらっしゃるわよ」

リストを眺め、奥様方がああでもない、こうでもない議論する。

「この方など、どうかしら」

奥様が差し出したリストを見る。どの道、王妃様から頂いた以上、リストの誰かと交わらねばならない。私は疲れた顔で偵察に出掛けますわ、と呟いた。奥方様達が、応援してくれた。

王城に出掛けるついでに、騎士団を覗きに行った。

顔を出すと、休憩時間らしくすぐに子供達が駆けてくる。

「お母様。お久しぶりです」

「お母様。ミケイラは元気ですか」

「貴方達のお顔が見られて嬉しいわ。ミケイラは元気よ。皆元気にしてる？」

はい、と元気な返事が返ってきた。

「お母様、次の相手は……？」

「まだわからないわ。王妃様にリストを頂いたのよ」

子供達は、揃ってリストを覗くと、文句を言った。それを苦笑いしながら宥めてやる。

「フルート様の様子を見に行こうと思うのだけれど」

「この人は子供が出来ない事で有名ですよ」

「お母様。大丈夫？ また子供を取られない？」

「気をつけるわ」

私が子供達に教えてもらった所に行くと、ゆったりと笛を吹いている男がいた。胸が高鳴る。剣と芸術に才が。それを読み取ると、私は男に近づいた。

「妊娠の女神ですか。まさか私の所に来て頂けるとは……」

柔らかな笑顔が素敵。

「数ヶ月後、また会っていただけませんか？」

「女性の誘いを断るわけには行きませんな。もしも子供が出来たら、私はその子に時々会わせてもらっただけでいいのです。平民の次男坊ですから、跡継ぎが必要だというわけではありません。妻は既に他界し、子どもがいない事だけが寂しくてね」

そして、私は男女の子を産んだ。フルーとルーツと名づけた。男……フルーツは大層喜んでくれて、しょっちゅう子供に会いに来てくれた。

38歳。子供はもうカトルとの子だけでいいかなと思い始めた頃、バイクとルヴァンに渡した子が実戦に赴いたという話を聞いた。無事だったようで、胸を撫で下ろす。

お茶を飲んでいると、隣国の王様がアポを取って訪ねてきた。もうとにかく出来るだけ精一杯のお持て成しをするしかない。

戦々恐々として王様と側近の方二人にお茶を出すと、王様はその茶をぐいっと飲んで置いた。

「妊娠の女神殿。実は……俺とこいつの子を産んで欲しい！」

「はあ！？ お前、自分の子を作りに来たんじゃねえのかよー！」

「だって後の候補者がどうしてもいないんだ！ お前だったら強いし頭もいいし能力も使えるし家柄もいいし信頼できるだろうー！」

「無理！ 無理無理！ お前との3Pなんて絶対無理！」

「あの、流石に嫌がっている相手の子を作るのは……」

「何かないのか？ パツとその気にさせるような……」

「それはありますけど……」

「ちょっと待て、クレバー様！ 女神さん、頼むって」

「アラート。大人しく犠牲になって下さい。でないと私が犠牲になるんです。何も陛下と交われと言っているではありません。この美しい女性と一回するだけです」

「だったらお前が犠牲になればよ、リライト！」

「最大二人まで作れるのだったな……」

「いえ、四人です。かなり難しくなりますし、全員男か全員女か男二人に女二人になりますけど」

「それは全員親を変えられるのか？」

「いえ、性別も含めて全く同じ子が二人ずつになります。僭越ながら、王位継承権の問題もありますし、男女の双子くらいがよろしいのでは？」

「いや、この際最大限の子供を作って来いといわれている。姫も外交をする上で欲しいし、男女二人ずつのコースで頼む」

「ちょっと待ってってクレバー様！」

「アラートの男の子二人とリライトの女の子二人。出来るか？」

「クレバー様！？ そんな！」

私はくすくすと笑いながら、アラート、クレバー、リライトの顔をじっくりと眺めて素養を確かめた。

「誰の才を授け、どのような外見に致しましょうか？」

「選べるのか！？」

「内緒ですよ。偶然という事にしてください。僭越ですが、私、クレバー様が気に入りました」

「おお！　そうかそうか。ではな……えーと、髪はアラートの髪でいいか？」

「ああもう……クレバーそっくりにしちまえよ。そんで、女神さんとの子供ってことにすりゃいい。つーか女神さんじゃ駄目なのか？」

アラートがガリガリと頭をかきながら言う。

「ああ、私の力を受け継がせるというのは考えてませんでしたね。しかし、さすがにこの力は簡単にお譲りするわけには……」

「残念だ。自在に子供が作れるなど、素晴らしい能力なのに。貴方の子供達が優秀な子ばかりなのも頷ける」

「ふふふ、ありがとうございます。自慢の子達ばかりですよ。ちようど一週間後にちようどよい時が訪れます。その時までにお決めください。それまではこの屋敷に滞在しても構いませんから」

「うむ、重ね重ね礼を言う！　行くぞ、アラート、リライト。そうだ、一応護衛と毒見を寄越すから使ってくれ」

「本気ですか、クレバー様」

「マジかよ、クレバー様……」

王を部屋までお送りした次の日には、奥様達が大挙して押し寄せてきた。

「隣国の王様を射止めたって本当ですよ！」

「身分違いですわよ。そんな事はありませんわ。優秀な子供が欲しいの」

「側近との子供をご所望だって聞きましたわ？」

「私は何も存じ上げませんわ」

「あらまあ、ミラール様の意地悪！」

私は奥様方と談笑する。そこで、小間使いが私に短刀を投げつけた。場が騒然とし、すぐに護衛が身を挺して庇ってくれたので私は無事にすんだ。

まさかとは思ったけど、本当に刺客がやってくるなんて。けれど知らせを聞いて、すぐに陛下が駆けつけてきてくれる。

「無事か、女神殿！」

「私は無事ですわ。でも、貴方様に子供達を守れまして？ 私、不幸になる子は産むつもりはなくてよ」

「ま、ミラール様！」

「大丈夫、二度とこんな事はない様にする」

「……信じますわ」

事実、それから後は私に近づく人も規制され、一週間の間襲われる事は無かった。

王から細かく色々と書かれた紙を渡され、厳しく眺めた。

「……可能そうか？」

「剣の才は期待してもよろしくてよ。ご両親とも優秀ですもの。ただ、能力に関しては、せいぜい両方発現させる程度ですわ。力は大分弱まりますけど。さすがに一卵性の双子に違う能力を授けるといふのは……それに、生まれる順番はどうにも出来ませんわ」

「そこをなんとか!!」

「……………」

「頼む!!」

私はため息をついた。

「失敗しても知りませんわよ？」

「ありがとう!!」

「おいおい、失敗しちゃ駄目だろ……………」

「それでは、リライト様、アラート様、陛下の順に部屋にいらっしゃって」

私は部屋でリライトを待った。しばらくひと悶着あった後、リライトが訪れる。顔を赤らめるリライトに、フェロモンをかけた。リライトが押し掛かってくる。終わった後、服を着せる。

「リライト様、終わりましたわ」

「え、え？ ああ、はい」

狐につままれたような顔をしてリライトは出て行く。アラートは気まずそうな顔。フェロモン。陛下はまともにキスをしてくる。フェロモン。

さつさと三人を済ませた私は、陛下も追い出してお腹に手を当てて意識を集中した。

要求が多いので慎重に作らねばならない。

10日ほど食事と睡眠以外は集中してお腹に手を当て続ける。

そして、命は形作られた。

「要求はすべて叶えましたわ。後は胎児が中でくっつかないよう、順番通りに生まれるよう、見守るだけですわ」

「そうか！ いや、良かった。今までに無い事だと聞いたので心配したぞ」

「要求が大きかったんですもの。仕方ありませんわ。政務も大変でしょう。ここは護衛を信じてお帰りになって」

「うむ、子供を健やかに育てる為の協力ならいくらでもするぞ！」

「頼みにしておりますわ」

その後、私は食べた。食べて食べて食べまくった。城付きのコックがやってきて、おいしくて栄養のある料理をいっぱい作ってくれた。少し太ってしまったかもしれないが、体が求めているのだから仕方が無い。その間、王から事情を聞く為の使いが来たらしいが、ミハエルが応答してくれた。ミケイラは陛下達を描くの忙しいらしい。

「凄いですな、まるで塔のようです」

「4人ですから。もうベットから動けないから床ずれで困ってますわ。いい美容師をご存じなくて？」

私は時計を見ながら言う。

「我が王の子を産む為ですからな。その後のケアも、十分にさせて頂きますぞ」

「良かったですわ」

私は時計から目を離さない。

「おや、何かご予定が？」

「ええ、陣痛が来ているので時間を計っているのですわ。後少し痛みが縮まったらお医者様をお呼びしようかと」

「医者――！ 医者――！！ 陣痛だぞ、何をしている……！！」

「あらまあ」

私は即座に王付きの医者と乳母に取り囲まれた。数時間は見てい
るだけでやる事もないと思うのだけど……あら破水。四つ子は早い
のかしら？ 生まれる順番にもへその緒にも気を使わなくてはいけ
ないから大変だ。前もって生まれやすい位置に並べてあるけど。

「順番は王が特に気を使われていたから間違えては駄目よ？……あ
あーっ！」

痛みが私を襲う。しかし、今までの出産の痛みよりは大分小さい。
子供が小さいのだ。すぐに大きくなるはずだが、やはり心配になる。
次々に子を生み、4人目を産んだとき私のお腹は完璧に引っ込ん
だ。

「事前に言われていたとおり、王子お二人に王女お二人……やはり
妊娠の女神という噂は本当だったか……！」

医者が驚愕している。出産がすむと、カトルがやってきて私の手
を握ってくれた。段々楽になってくるのを感じる。私は眠りに落ち
た。

朝起きると、私は果実のジュースを貰い、ゆっくりと飲んだ。
子供にはもう会えないが、これから数ヶ月、美容師に世話をし
てもらう予定だ。

ミケイラとフルー、ルートを呼び寄せ家族団らんの時を過ごす。
数ヵ月後、子供が出立する時に会わせてもらった。利発そうない
子供達だった。

子供達と別れを告げ、女達を受け入れるとすごい数の人が押し寄

せてきた。

「女神様、お腹の子に祝福を」

「女神様、今日は孕めますか？」

「女神様、この子は父親と同じ騎士になれるでしょうか」

「女神様、俺達にも子を」

「女神様、意中の相手を射止められるよう祝福を」

私は一人一人に対応していく。いつの間にか屋敷の隣に神殿が立っていて呆然とした。ミハイルに聞くと、そういう要求が大きくてどうしようも無かったのだという。しかし、確かに屋敷では仕事の邪魔になる。私は午後には神殿に赴くことにした。信者達は狂喜する。炎や雷を出す方が不思議だと思うのだけど、信者達からしたらそうでもないらしい。

遠く隣国からも信者が押し寄せる。

数ヶ月経つと、クレバー様からお礼の手紙が届いた。皆元気にやっているらしい。

一年、信者の相手をして過ごす。

40歳になった。私ももう年である。

レイナルは21になり、結婚式の招待状が届いた。可愛い娘さんだったが、悔しかった。バイクとルヴァンの子は19になり、婚約者が既にいる。騎士団で元気に活躍している。ドランは17。まだまだ遊びたい盛りで困っているらしい。ミケイラは15になった。絵の腕前は目を見張るほどだが、ケルンにしてみればまだまだらしい。カトルは14になった。あと四年だ。ナイトが13歳になった。この子も騎士団で頑張っている。先日婚約者が決まったらしい。1

1 になった竜のお姫様は、大分おませな女の子に育ったらしい。9 歳になるレオン殿下は、帝王学を頑張っている。もしかして、本当に王様になってしまわないだろうか。そのつもりで作った子ではないから、大いに心配だ。7 歳になるバイクとルヴァンにやった女の子は、もう婚約者が出来ている。5 歳になるロイとポールの男女の双子も既に婚約者が。3 歳になるフルーとルートは今が可愛い盛りだ。1 歳になる王子王女殿下は元気に過ごしていると聞く。

2 1 歳から1 歳までの子供かぁ……私もよくがんばったわ。3 5 歳以上から子供のリスクは高まると聞く。5 0 歳には閉経するだろうけど。

私が考えながら行くと、信者達がものすごく期待した顔でどなたを選びますか！？などといった詰め寄ってきた。見れば、書類が山と積まれていた。

「あれってもしかして……」

「女神様を孕ませたいという男のリストですわ」

「そろそろ、私も年なのだけど……」

「あら。たった一年前に四つ子を出産されたばかりでしょうに」

嫌だ怖い。逃がしてくれそうに無い雰囲気だ。私は仕方なく書類に目を通した。

子供が欲しい理由、ふむふむ……才能ある子が欲しい、駄目ね。相手がいない、舐めてるの？ 子供がどうしても出来ない、これは見てみないとなんとも言えないわね。男のカップル……この世界多いのかしら。別れなさそうかどうかがポイントね。

書類を読んでいるとすっかり同情してしまった。私は子沢山だが、世の中には子供が出来ない人もいっぱいいるのだ。

一ヶ月調べて、男のカップルと子が出来難い男に子を授ける事にした。皆、身分は高い。

あーあ、3つ子かぁ……大変だ。

41になった。三つ子はもう男共に受け渡してある。出産の後数日目覚めずに大変だったらしい。カトルとミケイラ、フルーとルート、定年退職したフルートを連れて隣国に遊びに出掛ける。クレバーが誘ってくれたのだ。

「いやいや、女神殿、よく来てくれた！ 先日の出産は大変だったそうではないか、今はもう平気なのか？」

「ええ、おいしいものをいっぱい食べさせてくれると聞いたら、来るしかありませんわ」

「ははは、楽しみにしていてくれ。アランとラートは既に力を出し始めているぞ。皆女神殿に感謝している」

「アラート様は王子を可愛がってくださいさる？」

「アラートには言わないでくれ、一応俺と女神だけの子供となっているのだ。表向きはな」

「能力、つけましたものねえ……別々のを」

「アラートの一派は大喜びなのだが、リライトの一派が大層悔しがってな。その他の派閥は言うに及ばず、だ」

食堂にエスコートしてくれて、目もくらむようなご馳走を食べさせてくれた。

「それでだ、そなたのことを調べているうち竜人のことが出てきてな。そなたの加護をとて羨ましいと言うのだ」

「ああ、子供が出来るかどうか聞きに來てましたわね」

「うむ、しかし一年もそちらに滞在するのは難しい」

「わかりましたわ。こちらでも一年ほど妊婦志願者を見ればよろしいのね。お安い御用ですわ。朝と夜に來てもらってくださいまし。昼は町の広場で人々を見ますわ」

「うむ、助かる。護衛はつける」

「お願いします」

私は一年ほどこちらに滞在する旨を書いた手紙を神殿に出した。そうして竜族を見てやる。この国には獣人もいるらしく、そちらの子達も見た。

「元気な男の子よ」

「今夜、頑張ることね竜族の子供は着床しづらいから、繰り返し交わるのがコツよ？」

「生理が10ヶ月前に來たなら、後1ヶ月で排卵日じゃない？」

そうして根気強く診た甲斐あって、10人ほどの竜族が子供を孕んだ。

その間、何か勘違いしているらしい男に襲われる事が何度かあったか、全て護衛とフルートがどうにかしてくれた。

そんな折、また王に頭を下げられた。

「卵を？」

「竜族の伯爵と獣人の男爵二人が男に走ってな。竜と獣人の男の双子が欲しいというのだが……駄目だろうか？」

「うーん……それってすぐ別れるようなカップルじゃありませんの？」

「それは大丈夫だ。それにたとえ別れても子供にまで当たるようなものではない」

「それならいいですけど……」

「ありがたい！ ラクーン！ ジーバ！」

現れたのはたくましい獣人と耳だけなんてもんじゃない、緑色の肌のがつしりとした竜族だった。……私もう年なんだけど。結論から言って大変だった。まず獣人がフェロモン抑えても止まらなかった。そして竜人の着床が中々できず、抜かず5発もやる羽目になった。

卵も中で割れたら死ぬだろうから相当に気を使った。結果、二つ卵が生まれてきた。中身は一つは竜人、一つは獣人だった。まあ計算どおりである。ご両親には大層喜ばれた。

数ヶ月ほど療養して、多くのお土産を貰って帰った。

一年以上留守にしている間に、信者がまた溢れかえっていた。捌くのが大変そうである。後、留守にしていた間に男爵になっていた。隣国の王が口ぞえしてくれたらしい。

44になった。カトルが18になった。ようやく、ようやくだ。

私はカトルと結婚した。思ったよりも盛大な式になり、祝ってもら
う反面もう子供を作ることはないのだと信者に残念がられた。

「私にはわかるの、カトル。貴方が素晴らしいって」

「ミラール様……ううん、ミラール。僕のお嫁さん……」

私とカトルはキスをした。そうして、交わる。生むのは双子の男
女。

カーとルー。カトルの子。

46 になった。ここでついに、私は私の力を托す事を考える。私
の全身全霊を賭けて産んだ。ミラーとラール。やっぱり、双子の男
女。そしてバイクとルヴァンの子が結婚する。

その頃、カトルの力がわかった。癒しの力だ。ミラーとラールを
生み、死に掛けた私を助けてくれた。それと、ミケイラの絵が高値
で売れるようになり、結婚した。

フルーとルートも婚約が出来た。

私とカトルは、患者の治療をして過ごすことに決めた。

5話 そうして女神伝説は真実となる

ヴァレンティナとジャックが聖なる森に連れていかれた。

事情はキースとバイクから聞いた。困った物だ。大事にするとは言っていたらしいが……。どうやら、緑を育てる能力の持ち主は年々減っていたらしく、かなり貴重だったらしい。

小さい子の環境や周囲の人間がころころ変わるのとは良くないと思うのだが……。

【そして、20歳のシェスティアの月の七の日が訪れる】

私はため息をつく。その日の明け方、精液の入った革袋があるか見に向かうと、果してそこには感謝の手紙と革袋があった。

他にも、祠が綺麗に掃除しており、お供え物が置かれている事に気づく。恐らく、キースだろう。

まあ、今回は子供を渡すわけではないので花は必要ないだろう。

私は革袋を開け、ステータスを確認する。確かに高い素養があった。

今度こそ、冒険者にするわ。

そう心に決め、私は家へと帰って、革袋の精液を使って受精した。その夜、夢に女神様が出て来た。

『ミラール。ミラール。私は安産祈願の祠の主、ヨランダ。今まで、私は力を尽くしてきたにかかわらず、蔑ろにされてきました。しかし、貴方によって、感謝と信仰心を得る事が出来ました。ミラール。貴方の力を、祠の再興の為に貸して下さい』

私は神によって転生させてもらった身である。神違いであるとは

いえ、勝手に利用していた後ろめたさもあるし、神に尽くす事に抵抗はなかった。

『私に出来る事なら、手伝わせて頂きますわ。女神様。出来る事なら、私をここに遣わした神に感謝の言葉をご伝言願えますか』

『ええ。もちろんよ。これより、貴方を私の巫女とします』

そして、ヨランデ様が力を振り絞ったのがわかった。

私に力が満ちる。私は新たな力をいくつか得たのだった。

その日から、私は祠に捧げられた祈りが聞こえるようになった。

『女神様……もしも貴方が本当にいるのなら……我ら夫婦に子供をお授け下さい……』

『女神様、フィールとの子を孕んでいるというなら、どうぞ私にお譲り下さい。お願いします。お願いします。お願いします』

言わずと知れたフィール夫妻の祈りである。

困ったなあ……。

同じ時間帯に来ているようなので、掃除をしている振りをして待ちかまえた。

フィール夫妻は私の事には目もくれず、祈りを捧げる。

私はヨランデ様のお力で、女の人のステータスも見れるようになっていた。

それで見ると、排卵日が……うわ、二カ月先だ。竜族は子が出来にくいというのは本当らしい。そういえば、フィールの精子数も少なかった。

さて、でたらめを吹きこむとしますか。また子供を奪われるのはごめんである。

二ヶ月後、私は一羽の鳥を操って、祈るフィールの奥さんの目の前にカランという果物を落とさせた。

そして、それをさも驚愕した様子で見る。

「まあ、吉兆ですわ！ 果実とは植物の子供。きっと今日が子作りに最良の日だというお告げですわ」

「そうかしら……」

「そうですね。その果実もきつと神様が下さったもの。だって、カランは男の子の象徴と言うではありませんか。食べてから子作りすれば、きつと男の子が生まれますわよ」

「そうだといいわね」

フィールの奥さんは、はにかんで大切に果物を包む。

掛かったな。あの果実は私の神通力を込めており、男の子を受精しやすくなっている。

もつとも、一日しか効力がないけど。

「貴方はよく掃除に訪れているようだけど、この事はよく知っているの？」

「少しだけ、おばあさんに聞いた事がありますわ。安産の女神で、願えば代わりに子供を産んでくれる事もあるとか。でも、基本的には安産の女神なのですから、女にもきつと加護を下さいますわ」

「ええ……。実はね。子供を授かったって話を聞いたの。その人達ったら、代償に夫の子供を捧げてしまったらしいのよ。私、フィールの子供なら欲しい。欲しいの」

私は、沈痛な表情を作った。

「けれど、何事にも代償は必要ですわ」

フィールの奥さんは、首を振る。

「夫より優秀な方がいるとは思えないし、他の赤ちゃんを捧げる代わりに自分の赤ちゃんを取り戻すなんて、私は嫌」

「まあ……。でも、女神様もお腹を痛めた子を代償なしに渡す事を要求すれば怒ると思いますわ。こうして吉兆も頂いたのですし」

「そうね……」

それでもフィールの奥さんは、切なげに祠を見つめた。

まあでも、きっと自分の子が生まれれば、生まれたかどうかかわらない旦那の子なんて忘れるでしょう。

この時私は、甘く考えていたのだ。竜族の子に対する思いを。

それからいくらしもない内に、私は子を産んだ。

卵が産まれて、非常に途方に暮れた。

とりあえず温めてみると、竜が産まれた。

おかしい。竜人を選択した覚えはあるが、竜を選択した覚えはない。

とりあえず竜をドラムと名付けて育てる。

部屋からは出せないが、その分愛情をこめて育てた。

さてその間、貴人が何度も通う事で、人々は安産の女神の存在を思い出したらしい。

ぽつぽつと参拝客が訪れ、これはという者に加護を与えた。

その中に、必死に子供を祈る者がいた。しかも、芸術家としての

高いステータスを持っていた。

自分は醜く、相手がいない。認められてもいない。しかし、自分の技術を継ぐ子供は欲しい。そう祈る男に、私は女神の噂を囁いた。

【そして、21歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

シェスティアの8日の明け方、果して精液の入った革袋があった。それを回収して、双子の男女を産む事にする。

フィールの奥さんは男の子を生み、赤ちゃんを連れてお礼の花束を持って来ていた。

「七日、駄目もとで行ってみたけど駄目だったわ。殿方が一人子供を祈っていらしたけど、あの方は子供を得られるのかしら……」

私は曖昧に笑い、その場を流した。

この時から、私は旦那の重要性について深く考えていた。

そうだ、奴隷を買おう。

私は女手一人で暮らすのが大変だからとキースを丸めこみ、赤ちゃんを受け渡した後に、奴隷市に向かう事に決めた。

【そして、22歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

一年後。

この男が本当に子供を育てられるのか不安に思った私は、男の赤ちゃんと共にお金を置いておいた。そして、女の子の方はミケイラと名付けて育てた。

男は大層喜び、お金を子供の養育の為に使うと誓い、事実その通りにした。

しかし、お金の出所を探られてしまったらしく、女神の伝説は露出した。

七日は面倒な事になりそうである。

私はため息をついて、奴隷市へと向かった。

色々と檻を見て回って、ずば抜けた素質を持つ者を二人見つけた。

一人は、死んだ母に縋って泣く小さな男の子。

一人は、蹲っている男の人。

私は男の子を抱き上げた。

「泣かないで。貴方の名は？」

「カトル……」

癒しの力を持つ、可愛い子。私はカトルの頭を撫でた。

「その貴方。そう落ち込まないで。私を助けてくれたら、自由をあげるわ。望むなら私の家に住んでもいい。ずっとね」

「貴方を助ける……？」

私は笑った。

「子育てが大変なのよ」

そうして、その夜。私は交わった。官僚タイプも、悪くはないだろう。

男の奴隷……ロイは、ドランを見て驚いたが、ドランやミケイラを良く育て、私が与えた書物を良く学んでくれた。夫きどりする様子も無いし、仮面夫婦の相手としては最適かも知れない。協力者が欲しかった所だし、ロイになら私の力を教えてもいいだろう。

6話 上昇しながら墮ちて行く

ロイとの間にレイナールが産まれ、一年が経った。

【そして、23歳のシェスティアの月の七の日が訪れる】

シェスティアの七日。女神様の噂で町が持ちきりで、私はため息をついた。

女神様のお力を借りて、とりあえずは革袋と手紙を召喚出来た。祈りは届いている。しかし、どうするか……。私は悩んでいた。

そろそろ、自らの能力を継ぐ子が欲しい。その方向で探してみようか？

革袋にあるステータスを順に見て行く。

すると、うってつけのステータスの持ち主を発見した。

この国に一つだけある貴族向けの学校の教師のようだ。この人も相手がいないらしい。能力は、才能開花。名はアゼル。

教え子の子供を見て、羨ましくなったらしい。

酔いに任せての行動のようだ。

しかし、教師は教師。さぞ子供を大事に育ててくれる事だろう。

私は、元気で、可愛らしく、才能開花の能力を強く持った男児を二人と、私の力を継ぐ女兒を一人産む事にした。

才能開花には相応しいだろうという事で、男児二人にはロイの才も混ぜて置いた。

翌日、アゼルは腰を抜かしたようだった。

慌てて子供を迎える準備に走ったようだ。

それからしばらくして、私はロイと一緒に買い物をしていた。

その時だった。女の子に支えられた隻腕の男が、ふらふらと私の前に倒れ込んだ。

すぐに、奴隷商人と分かる男が追いかけてくる。

「こいつめ！ 逃げ出そうとするとは……」

「逃げる、シビル」

「いや！ ポールお兄ちゃんも一緒に……」

二人が兄弟だという事はすぐにわかった。ステータスがかなり高いという事も。

「貴方達、奴隷なの？ 買い取ってあげましょうか？」

私が頭を傾げて言う。

私は返事を待たずに奴隷商人と契約を交わし、二人を買い取った。女の子の方は少し高かった。

教育費もあるし、これから、出費には少し、気をつけなくてはいけないだろう。

私は一つ頷き、ポールとシビルを連れ帰った。

最初は警戒心旺盛だった二人も、次第に心を許し、働きに出て家計を手伝ってくれるようになった。ポールは子供達の相手である。

……しかし、さすがに手狭になってきたか。

その内、何か考えないとね。

【そして、24歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

そして一年後、アゼルは子供を抱き上げてマジマジと見つめてい

た。

子供が泣きじゃくりながらもくしゃみをして、アゼルは我に却って子供を抱きしめ、走り去っていく。

ポールとシビルは非常に落ち込んでいた。

「大切にしてくれるわよ」

「でも、ミラール。兄弟を離れなければならぬなんて……」

泣きそうなシビルの頭を、撫でる。

「それを決めるのはこの子達だわ。この子達には、無限の未来があるもの」

今回は祠に捧げられた精液の中に、特に気を引くステータスの者がいなかった為、私はポールとの子を作る事にした。

男の子で騎士にしよう。そしてナイトと名付けるのだ。

ナイトが産まれ、それをあやしていると、いきなり家がノックされ、私は出迎えた。

「ここに、安産の女神の祠に詳しい者がいると聞いたが……」

「ああ、伝承を聞きに来たんですね。ここは手狭ですので、外に致しましょう」

「いや、お忍びだから、出来る限り人目に付きたくない。失礼する」

そう言って、ローブを着た男達が入って来る。
入ってきた男達は、目を丸くした。

本当に手狭だったからである。

カトル、ドラン、ミケイラ、レイナール、ウォルター、ミラール、
ナイト。

総勢7人の子供に、シビル、ポール、ロイ、私である。

「……孤児院でも経営なさっているのか？」

「全部私の子供よ。縁あって奴隷も4人程いるけどね」

「竜族の子供もいるようだが……」

「行きずりの相手よ。名前も知らないわ」

「ならば、名乗り出るといい。竜族は子供が少ない。いずれかの家
から、援助が受けられるはずだ」

それに、私は小首を傾げる。

「でも、子供を取られないかしら」

「名前も知らないんだろう？　ならば、問題はない。俺が口添えし
ても良い」

私は考えた。援助が受けられるのなら、いいかもしれない。これ
からも私は子供を産む予定だし、今の家は明らかに手狭だ。

男達をテーブルに座らせ、お茶を出すと私は問った。

「安全の女神の事を知りたいという事です……。どなたか、妊娠でほしい女性がいますのですか？ それとも、女神の子が欲しいのですか？」

「女神の子というより、な……。男との子が欲しいのだ。実は俺は妾の子でな。血の濃さで言えば、かなり薄いのだ。しかし、分家の中にちょうどいい女がない……。いるにはいるのだが、器ではないのだ。しかし、分家筋の男には俺よりも血が濃く、優秀な男が！」

がたつと椅子を蹴倒し、逃げるローブ姿の男を、今まで喋っていた男がむりやり引き留めた。

「私は何も聞いていないぞ！」

暴れる男の人（分家筆頭っぽい）を、他の男の人が取り押さえる。

「で、噂によると、女神は男同士、かつ望み通りの子を作る事が出来るとか。性別とか、髪の色とか……」

非常にも話を続ける男（一番偉そうな人）

「能力もですわ。ただし、性格はどうにもできません。それに、磨かなければ宝石もただの石……。本人の努力と育て方で、いかようにも変わるでしょう」

「全力を尽くそう。そう言う事で、やり方と詳しい制限を教えてください。例えば、子供は何人まで作れる？」

「最大4人のようですわね。ただし、全て男か、全て女か、男女二人ずつしか出来ませんわ。これは子供を作る時のメカニズム上仕方

のない事で、卵子は最大でも二つが限度、その卵子が赤子を作りだす事が出来るのは最大二人までと言う事ですわ。ただし、卵子ごとに親を変える事は可能なようです。でも……」

「でも？」

「女神は対価として子供を要求しますわ。具体的には、双子ならばその片方を。四つ子ならば、卵子を同じくする子を一人ずつ。それは仕方のない事なのです。事情があれば子供を全部下さいますが、どの道次の年に優秀な男の精液を捧げねばなりません。つまり、その方の子を全て捧げる事でバランスを取るという事ですわ」

男はうーんと、考える。

「子供の交換じゃいかんのか？」

「他人の子と女神さんの子じゃ、やっぱり違うだろう」

「私もそう思いますわ」

「よし、才能のある男には心当たりがある。ありまくる。ここは女神の慈悲におすがりしよう。そう言う事で、女神によりしく頼むぞ、ミラール」

「あら？ 何故私に？」

「俺には貴方が女神の巫女に思えて仕方が無いのだ。女神の噂は全て最終的には貴方に辿りつく」

私は、にっこりと微笑んで、口到人差し指を当てた。

「内緒にしてくれるなら、女神にお願いしておきますわ。けれど、形式は守って下さいね。男二人分の精液を革袋に入れて、手紙を書いておくんですよ」

「おお、有難い。革袋は二つセットで大丈夫かな？ 手紙も、どこまでが許されるのかわからないから、巫女のお力をお借りしたい。シエスティアの七日まで時間があるからな」

「おい、まさか……」

男（分家筋筆頭）を取り押さえていた男が、掠れた声を出し、男（分家筋筆頭）の男がざまあと笑って見せた。

「俺が犠牲になるなら、お前も道連れだ！」

見ているだけでも面白い。

私は、何故だかこの男達に非常に協力的になっていた。これが、カリスマと言うものなのかもしれない。

7話 貴族になった方が苦勞するってどういう事？（前書き）

ウェブ拍手お礼が中々書きあがらない中、目を引く感想があり、試しに書いてみたら筆が進んだので書かせて頂きました。感想ありがとうございます。

7話 貴族になった方が苦勞するってどういう事？

【そして、25歳のシェステアの月の七日が訪れる】

あー。七日は凄い事になりました。

警備網が引かれ、王と神官団以外誰も寄せ付けない構え。

あの人、王だったらしい。

女神への貢物が次々と運び込まれ、神官団が祈祷する。

女神も茶目っ気を出したらしく、二つの革袋は光の中に消えたそう
うだ。

代わりに現れたのは、四つの花。

そして、盛大なお祝いをした。ここまでくれば、誰だって女神の
伝説に興味を持つ。

来年がどうなるのかと思うと、頭が痛かった。

っていうかさ、隠密じゃなかったの？

まあいいわ。最大限優秀な子を作ってあげようじゃない。

そう言うわけで四つ子を身ごもった。全身全霊の魔力を込めて育
てる事にする。

三日後、王が不機嫌な側近二人を連れて現れた。

「いや、女神が祈りを聞き届けてくれて助かった。では、竜族の所
にお連れしよう」

そう言うわけで、私は王、クレバーにドレスを用意してもらい、
着飾ってお茶会へと向かった。

「実は、皆さんにご紹介したいご令嬢がいるのです。どなたかに、

「ご令嬢の後見となつてほしい」

「ご令嬢、ですか……?」

「そのご令嬢は、竜族の殿方と行きずりの恋をして、子を為した。しかし、竜族の特徴が色濃く出ていて、外に出せば誘拐される危険があるのです。しかし、子供を手元から放す気も、その相手を探しだすおつもりもないらしい。そこで、子供を育てられるよう、援助が欲しいと言つのです」

「竜族の子供を……!？」

そこで、私はぺこりと頭を下げ、ドランを抱いて出て行く。視線が一斉にドランに集まつた。

皆、頭に「!？」マークを浮かべている。

「りゅ……竜族。ですか? とういかこれは竜なのでは?」

「これをご令嬢が産んだのですか?」

「さ、触つても?」

ドランは、物おじせずに竜族の皆さんの所に飛んでいく。

「ドラン? 皆さんに、御挨拶して差し上げて」

その言葉に、ドランは人型に変化する。私はやんわりと用意していたマントでその体を隠してやった。

「ドラン、よんちやい!」

それで、ようやくドランは竜族と認められたらしい。

「ご令嬢、ぜひこの子を我が養子に」

「いいえ、ぜひこの子は私の養子に」

「ごめんなさい。この子は私の手で育てたいの。教育に皆さんのご協力を仰ぐ事はあるかもしれないけれど……」

そうしてドランを抱き寄せると、ドランはくすぐったそうな顔で笑う。

そして、フィールに目を留め、目を大きくさせた。

「どうか、皆さんの後押しで爵位と小さな屋敷をプレゼントしてやってほしい。資金は私が出させてもらおう」

「そんな、そんな事までして頂く訳には……」

「いいのだ。貴方には助けられたからな。それに、末王子のご息女、ヴァレンティナ嬢を御産みになったのは貴方だろう？」

げげっ

どうしよう、と思った時、ドランが動いた。

「パパー！　パパだ！」

フィールにタックルするドラン。もちろん、ドランは大いに慌てた。

膝を折ってお願いする深窓のご令嬢に、どうして逆らう事が出来るのか。何せ、私は平民である。しかし、私も母親。負けるわけにはいかない。

すったもんだの末、ドランは問うと、ドランはフィールの奥さんが抱いた子に目を留めた。

「それ。ぼくのおとーと？」

「ええ、そうよ」

「どこにも行かない？　ずっと一緒？」

「もちろんよ。兄弟だもの」

その言葉に、ドランは一生懸命考えた。

大好きな母か。初めてあった父か。いつ離れてしまうかわからない多くの兄妹か。ずっと一緒にいる事が出来る弟か。

「僕、ずっといてくれる弟と、一緒にいたい」

私は思わず、涙を流して崩れ落ちた。私は、確かに子供を渡して来た。その罪を、見せつけられた気がしたのだ。安産の女神、ヨランダと約束をしてしまった。今更生き方を買える事は出来ない。出来ないのだ。

王が、私の背を戸惑いがちに撫でて慰めた。

ドランはおろおろしていたが、私の泣き声に怯えて弟も泣いてしまったので尚更戸惑うばかりだった。

結局、私はドランの代わりに男爵位と小さな屋敷、護衛の兵士を得る事となるのだった。

兵士は選りすぐりの者たちだった。大丈夫と言ったのにこんな事になってしまったので、クレバー王からの謝罪と言う形だ。いくらクレバーの口添えがあっても、子供自身が選んでしまっただけは庇い様が無かったので、私は仕方ないと思っているのだが。

使用人は、既にポール、シビル、ロイがいるので雇わなかった。男爵位となった以上、仕事をしなくてはならないし、色々覚えなくてはならない。

教育係の人の良さそうな老夫婦がやって来て、色々教えてくれた。

お腹も大きくなった頃、戒厳令を引いて子育てに集中した。

しかし、何故かクレバーがこの国に残した乳母軍団と兵士が私の元に勢ぞろいしていた。

うん、監視を置かないわけがないし、ばれないわけないわよね。でも、後悔はしていない。というのも、さすがに力を使いすぎたらしく、一時期酷く衰弱したからだ。扶養家族をたくさん抱えていたし、男爵にならなければ、そして雨ば軍団の中に名医がいなければ、立ちいかなくなっていただろう。

それに、悩んでいた子供達の教育も、乳母軍団と教育係の老夫婦が解決してくれた。

懐妊中の私を支える為、シビルもポールもロイも、一所懸命に仕事を学んでくれた。

ミケイラは御絵描きばかりしているし、レイナールは体が弱いので少し心配だ。

稼ぎ頭となるはずの子供達が羽ばたいて行って、本来補佐となるべき子供達が嫡男となってしまったのだ。しばらくは免除してもらえが、男爵となった以上、徴兵義務もある。

これは、騎士の才能を持つナイトを集中して育てなくてはならないだろう。

幸いなのは、ナイトは奴隷の子であり、父も手の内にある為、奪われる心配はない事だ。レイナールとナイト、二人仲良く私を支え

てほしいものだ。

そして、ポールとロイが出来た。

訳がわからない。

レイナール、ナイト。貴方達はお父さん達を見習って仲良くしすぎなくていいのよ。

8話 俺の戦いはこれからだ！（父親視点）

俺は頭を抱えていた。言わずと知れた、結婚問題だ。

かなりややこしい権力争いや暗殺の末、残った正当な王位継承者は俺一人。

それも、妾の子で、分家の方が血が濃いというありさまだ。

もちろん、俺は婚姻を結ばねばならない。正当な王の血筋を残す為、子沢山でなければならん。それも、血が濃い子供だ。しかし、選ばれた妃候補達は性格か後ろ盾かあるいは両方かに大きな問題があった。結婚すれば、間違いなく本人か親戚が政務に口を出してくる。

俺の手駒となってくれる男はいても、暗殺の対処だ政務だで女の手駒は作って来なかったのが痛すぎる。いつそ、側近を嫁に出来たら手っ取り早い物を。血筋的にも忠誠的にも問題が無いのだが。悩んでいると、留学から帰って来たばかりの貴族の子息が、俺に面白い話を聞かせてくれた。

「陛下、陛下。面白い話を持って参りました。陛下は、隣国の安産の女神の噂をご存知ですか？」

「いや？ 安産と言うからには、子供を授けてくれるのか？」

「それが、凄いです。子供も授けてくれますが、子種の入った革袋と、こんな子が欲しいというお願いをシェステアの日の七日の晩に置いておくと、一人が選ばれ、花が革袋の代わりに置かれるんですね。そして、一年後、望み通りの子供が産まれてくるんです！なんと、能力を持たせたいと願い、親にその素質があるなら、本当に能力持ちの子が産まれてくるそうですよ！ 先生が、それで子

供が出来たんです。本当ですよ！ 利発そうな子で、病一つ掛からない強い子なんです」

「ほほう」

「何でも、男同士の場合も、二人分の子種をいれりと授けてくれるとか！ 名門フレッシャー家とアイスベルグ家の四人の子も、そうらしいです！」

「ほほう。面白い話だな……」

狙い目は、リライトだ。古い家柄で、血筋の良さは断トツだ。次点で、アラート。柄は悪いが血筋はそこそこ、能力の上でも彼は王国最強である。

早速、俺はまずアラートを呼んで、噂話の話をした。

「と言うわけで、真偽を確かめ、本当だったらリライトとの子を作るぞ」

「いや、それはちょっと……クレバー、ホモじゃないかな？」

「五月蠅い。いい妃候補がいなし、血の濃さで言ったら向こうが王国一だろう。セックスするわけでもなし！ 能力優先でお前にしてもいいのだが」

「全力を尽くすぜ！」

「よし、頼んだぞ！」

と言うわけで、色々調べてミラールという巫女……いや、もし

かして女神というか、恐らくは能力者本人に会いに行った。

神官長には、男同士で云々は省略して、子を授けてくれる女神がいると話した。

女神の子供は、神官長的に王を害する妃よりは好ましい相手だったらしい。全力で支援してくれた。そして、死んだ目をするアラートとリライト、目を輝かせた俺の目の前で、革袋は光に包まれて消え、四つの綺麗な花が後に残った。

「おお！ これは女神が子作りをするという証ですぞ！ やりましたな、陛下！」

神官長はとても喜んでくれる。早速俺は国へと帰り、妃の事で問い詰める者達に言ってやった。

「既に、四人の子を作った。王位を譲り渡す候補も、二人いる。案ずるな」

「あ、相手は誰ですか！？」

「こいつら」

俺は側近を指し示し、二人は顔を赤くした。おいやめろ。そこで照られると、本当にできてるみたいだろう。

「男同士で子は出来ませんぞ！」

「男同士に子を授けてくれる女神がいてな。もう願って確約を頂いてきた。心配なら調べてみると言い」

臣下達は、調べ上げた後、各々卒倒した。

右往左往する臣下達。女神の子供なら、暗殺するわけにはいい。

王族への崇拜は薄れても、神への崇拜は薄れるはずもなく、神の怒りに触れたらと思うと、暗殺は恐ろしいのだ。

……次の子も、女神に頼もう。受け入れてくれるだろうか。

「さて、どうしたものか」

そう言いつつ、さりげなくライトの肩に手をまわしてみたら物凄い勢いでたき落とされた。例えて言うなら、猫がシャーっと威嚇している感じである。

「俺にその趣味はありません！ 俺にその趣味はありませんから！」

「わかったわかった」

「本当にわかっているのですか？ おかげで縁談が破棄されそうです！」

「それはすまん。王命でお前達は「女」と「早急に」結婚するようにしておこう」

「めっちゃくちや偽装結婚っばいじゃねーか……」

アラートは泣きそうである。ライトのあんな顔もアラートのあんな顔も初めて見れたので、思わず笑ってしまう。二人に睨まれ、慌てて笑顔を引っ込めると、子供達に思いを馳せた。

そこに、ドレスを持ってきた臣下が、戸惑いがちにごまをすり始めた。

「陛下。陛下。所で、正妃様はどちらになさるのですか？ 当然、御血筋の正しいリライト様でございますよね。ドレスとタキシード、どちらにするか悩みましたが、せっかくの結婚式でございますから、このようなドレスなどいかがでしょう」

その時に見たリライトとアラートの顔を見て、俺は爆笑を抑えるのに全身全霊を込めなければならなかった。でないと殺される。

結局、リライトとアラートが伴侶とよりを戻すのに五カ月ほど掛かった。ご苦労な事だ。

そして、「巫女」が身ごもったとの連絡が入る。

半信半疑だった家臣どもだが、この知らせを傍受して、少なくとも子供が来る事は確かだと判断したらしい。また、この頃になれば詳しい調べが上がって来る。

隣国で、母親のしれない、能力を遺憾なく発揮する子供が多数発生しているのは事実なのだ。せつせと嫡男を迎え入れる準備をする俺に、思ふ所もあつたのだろう。

「陛下。恐れ多い事ですが、我が孫は二人と聞きました。ならば、一人下賜しては頂けないでしょうか？」

リライトの父から、そんな言葉が出ると、アラートの父である卿も負けずと言った。

「我が家はカインスベル家とは及ぶべくもありませんが、それなりにしきたりがあります。我が血筋の者として、教育を受けさせる事は出来ないのでしょうか」

「駄目だ。あの子達の親権は俺が全て貰う」

「しかし、我らが孫でもあります」

「俺の教育方針に納得が出来ないのか？」

「陛下に陛下のしきたりがある様に、我が家にもあるのです」

それは暗に、駄目だしを受けているのも同然である。俺は、直接父上から王族としてのしきたりや心構えを学んだわけではない。もちろん、しきたりの多くは教育係達が把握しているのだが。そして俺の母は市井の者で、そういうしきたりを所持しているわけではない。俺にはそういう貴族として、王族としての振る舞いに掛けている部分があるらしく、あれらはそれを危惧しているのだ。まして、かつて王族に近い位置にいて、密かに暗殺の実行犯ではと疑いも掛けていたかつての教育係達に俺が子供を任せるはずもない。

俺が新たに選んだ教育係、俺の信頼する部下では少々家格が低い。心配は当然だと認めざるを得ない。

それに、リライトのカインスベル家は大貴族で、アラートのアケルボルト家は武勲を立て続けに立てている。俺でも粗略にする事は許されない。

だが、親権を手放すつもりはない。

面倒な事になった。

神官長にも名前の事などよく相談していると、ひょっこりとリライトとアラートが顔を出した。

「……ずっと一人で何かと準備をしているようですが。陛下は、もう一人の親を忘れておられる」

「全くだ。俺らにも名前の相談くらい、してくれよ。親父達は信じられなくとも、俺達は信じるよ」

「信じないというわけではないが。お前達、いいのか？ 認知をするなら面倒を掛ける事になるが」

「もう十分！ 面倒な事になってるっつーの！」

「どういつ対応をすればいいのか、見当もつきませんよ……」

「苦勞を掛ける。教育係と女神に捧げる子種についてなのだが……」

話し合いを続ける。そして、更に七ヶ月後、俺は可愛らしい四つ子を連れて帰ったのだった。本当に子供を連れてこられて、王国は今度こそ上へ下への大騒ぎとなった。

リライトは男児二人を、アラートは女児二人を抱いて呆然とする。

「……驚きました。自分の子を見て、これほど感動するものだとは」

「……この娘達は家で育てる」

「待て待て待て待て。この子らは大事な政略結婚の駒なのだ」

「俺の子を駒って言うな！」

アラートは女児を抱いて守り抜く構えだ。リライトもさりげなく子供を確保していて、俺はため息をついた。

「子供が欲しいなら奥さんと作れ。俺には相手がいないんだから、ここは譲れ」

そこで、一羽の鳥がすいと窓から入って来る。女の子に語りかけるように、チチチと鳴いた。

動物を操る、アラートの血筋の能力と同じ物である。今でさえこれなら、末は狼の群れでも自在に操る様になるだろう。

「おお！ 凄いな、偉いぞ、エリザ」

褒められる様子を見て、自分も思ったらしい。男児達ももう片方の女の子も、「う！」といいながら、小さな水晶を見せて来た。我が王家に伝わる技。大地を操り、大地から力を得て回復をし、鉱石を作りだす力の片りんである。

「おいおいおいおい……。本当にあのめちやくちゃ書いた手紙の通りの子供なのかよ」

「きちんと育てんと意味が無いと言っていたがな」

リライトとアラートの子供を抱く手にさらに力が入ったのは気のせいだろうか。

そこで、驚愕の眼差しで見つめていたリライト、アラートの父上ズの猛攻が始まった。

「へへへへへ、陛下！ 少なくとも、エリザ様は絶対に、絶対に我がアケルボルト家の跡継ぎとして頂きますぞー！」

「女なんだが」

「陛下！ 片方、片方で良いのです。どうか御譲り頂きたく！」

「やらないって」

この者達は、この子らが王族である事をわかっているのだろうか

？ わかっているから俺の手で育てるより、自分の手で育てた方が安心なのだろうな……。もはや二人の目には能力を使える事しか見えていない。アラートは三世代ぶりに現れた力の主で相当可愛がられていたが、今でも動物一匹を操るのが精々だし、リライトも今の赤子程度の事しかできないが、相当自慢されて育てられてきた。ちなみに俺は全く能力が発現していない。能力とは、それほど希少な物なのだ。やれやれ、苦労しそうだ……。

とりあえず、俺が暗殺されて王子二人を祭り上げられないようにしないと。

両親が同じだから大丈夫だとは思うが、また真っ二つに分かれて内乱とか目も当てられない。

ただ一つ、暗殺だけは女神の意向で防がれるだろうというのが唯一の救いだ。

さあ、大切な息子娘の為に、頑張るとするか。

9話 旅行

出産間近になり、王クレバーが訪ねて来た。王様なのにフットワークが軽いですね。

そんなんで国は大丈夫なのだろうか？

「巫女よ！……うわぁ、凄いな……」

「四人分ですから。ベッドからも動けないありさまです」

「これでまともに産めるのか？」

「その辺は、安産の女神の加護を受けてますから」

クレバーはいそいそと椅子を持ってくる。

「子供達は皆、元気だろうか」

「ええ、大丈夫です。皆元気で困るほどですよ。ああ、私の遺伝子是一片たりとも入っていないので、ご安心ください」

「良き子を産む遺伝子なら、ぜひ入っていて欲しいものだがな」

「あら。それはお譲り出来ませんわ」

王、クレバーは色々な話を聞かせてくれた。

その話はとても面白い。子作りに伴った、側近たちとの笑い話が一層笑えた。

女神の力を借りて、側近と子供を作ったと言ったら、上へ下への

大騒ぎだったとか。

戸惑いがちに正妃はどちらになるのでしょうかと臣下が聞いて来た時の側近の顔とか（その臣下は恐ろしさに卒倒したらしい。可哀想に！）。

側近の縁談に危うく罅が入りかけたとか（これまた可哀想に！）。結局縁談を早急に纏めさせたが、子供の親権を独り占めするのに大変だったとか。

初め耳を塞いでいた側近だが、控えめに名前を決める権利や教育に携わる権利を要求して来たとか。

そんな話をずっと聞いていたくて、陣痛を我慢していたら医師にとても怒られてしまった。

そして、私は四人の子供を産んだ。

順番も、きちんと気を使って産んでやり、番号札をつける。

後は手放す時期が来るのを待つだけだ。

【そして、26歳のシェスティアの月の七日の日が訪れる】

そして、様式美として祠に出現させた。

代わりに、クレバーが備えた被害者の種を入れた革袋を貰う。

クレバーがくれた物だから、少し期待している。

二カ月ほど王都に滞在し、赤子が少し丈夫になってから、彼らは転移呪文で帰って行ったのだった。

……子供だが、遠見と予知……いわゆる神眼の能力者だった。凄いいけど、体が凄く弱い。

う、うううーん……これは正直微妙かも……。私は、子供を頼って左うちわな生活をしたくはあるが、不幸な子供を産みたいわけではないのだ。正直、騎士の子の方がよっぽど嬉しい。でも、能力を授けないのはな……。

能力持ちの子供に囲まれて何も取りえがないというのがきつすぎる。

出来るだけ、丈夫にして大切に育てよう。男にすると徴兵が、女にすると出産が怖いと悩んでいたら、ヨランダ様が加護をくれるとの事なので、女の子にした。

今度から、希望を言うようにしよう。そうしよう。

それと、来年が凄いお祭り騒ぎになりそうです……。

祠も改築されて、立派な神殿になる事になりました。専用の神官がつくそう。

男爵になって、いい事もある。

子供達にさりげなく会いに行けるようになった事だ。

四人の子は既に社交界デビューしていて、立派だった。

やっぱり、子供には環境も大事なのだとしみじみ思う。

男爵としての仕事を一生懸命学ぶ。もちろん、子供が出来がたい奥方達の手伝いも忘れない。

今は王様の援助で生活しているが、すぐにロイに文官としての仕事をさせるつもりだ。

ポールも、役立ってくれている。

ロイとポールは私の右腕と左腕である。

私が神眼の娘、レウィーを産み落とした。

【そして、27歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

洒落にならん数の革袋が祠に捧げられた。

これ、ちゃんと一年後に赤ちゃんを迎えに来るのかしら？

甚だ疑問だが、その時は両方育てるだけである。

私は一つずつ革袋をチェックする。

竜族が多いけど、あれ、どっちみち子供奪われるからなあ……。

ナイトだけだと不安だし、騎士の子が欲しい。騎士の子が。

そんな時、一つの革袋と一つの手紙を見つけた。

「没落した家を支える、立派な騎士の子が欲しい……か」

能力は風。風の騎士。いいじゃない！ 没落した家の子って言う

なら、そう簡単に奪おうとか考えないでしょう。

と言う事で、私は騎士の双子を産む事にした。

花を手紙にさすと、それを返す。

騎士の人は、喜んでくれた。

そうね。頭のいい子も、芸術家も、騎士の子も、跡取も。竜族ま

で産んだのだから、そろそろ少し休もうかしら？ でも、祠を盛り

たてるって約束もあるしねえ……。

悩みながら、七日を待つ。

【そして、28歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

今回は、目に叶う者はいなかった。

決まり。これでお休みね？

そして、8日。騎士の子は神殿の子となった。

意味がわからない。

騎士も意味がわからず、文句を言い立てていた。

親として面会は出来るようだが、子供を連れて行く事はできないですって。

まああ。

即刻ヨランダ様において願い、全神官をお叱りになって頂き、子供を騎士の元に返させる。本人達は女神の神官とお認めになって頂いたって何故か喜んでたけどね。

びっくりしたあ……。油断も隙も無いわ。

そうそう、クレバーから子供の事について書かれた手紙が来た。ついでに、遊びに来ないかも。もったいないお言葉である。

子供を巡る攻防は一進一退らしい。そして子供は、日に日に利発さを発揮しているそうだ。

大げさに書かれたそれに、私はそれに思わず笑みを浮かべたのだった。

そうそう、ロイはとうとう文官になった。まだまだ下っ端だが、唯一の稼ぎ頭となる彼には、頑張つてほしい物である。

あ、今更ですけど、さすがに口添え程度で領地はないです。なんら手柄立てたわけではない、平民ですからね！

なんか、竜族経由で愛人にならないかって話は来ているけども。私はミラールを当主とする、未長く受け継がれる一族を作るつもりです。ミラールの名も代々ついて行くつもりよ。

そして、翌日の9日。子供を見にパーティに行ったら、かなり身なりの言い方に言いよられて困ってしまった。素養は高いのだけけれども。

「あの、身分の高い方は子供が産まれた時に子供を要求する事が多いので、付き合つのを避けておりますの」

「安心していい。平民上がりの男爵家令嬢に産ませた子供ごとき、

誰も気にしない」

……それもなあ……。ま、いいや。言質取ったからね？

そう言うわけで、光を操る力を持つ騎士を身ごもった。

そこで私は、重大な事に気付いた。能力持ちはいっぱい産んだけど、魔術師が手元にいない！

次は魔術師にしましょう。そうしましょう。

「よく来た、巫女殿！」

クレバー陛下は両手を広げて喜んでくれる。

「おお、また妊娠しておられるのか」

「きっと良い騎士が産まれますわ」

私はお腹を撫でながら、微笑む。

紹介された四つ子ちゃんは、皆私に懐いてくれた。

「ママ、ママ」

「あら……ごめんなさい。遺伝子は抜いたけど、繋がりはどうにも出来なかったみたいね」

そう言いながらも、涙が滲むほど嬉しくて、子供達を順番に抱っこして頬ずりをする。

「いや、構わない。それより、また機会があれば妹や弟が欲しいのだが」

「まあ。四人もいれば十分ですわ。あまり陛下の御血筋の者をばら撒けば、婚姻を考えた時に兄妹だらけになってしまいます」

「それもそうなのだが……。子供が奪われそうでなあ。いや、リライト達の本来の奥方達にも子が産まれたのだが、今の所能力を発揮していないのだ。まさかアラートの娘をアラートの子息と結婚させるわけにもいかなから、エリザは渡した方がいいのかもしれないが、そうするともう一方の家が収まらん。少し困った」

「能力や素質は見れますが……。困ったわ。身ごもらせる事や性別の左右は出来ても、素質の高い子はさすがにこの腹で育てるしかないのよ。そして、構造上女の子の因子は受け入れられないの」

「おお……。それは素晴らしい！ ぜひ、二人の子を見てほしい。ついでに、奥方達に子を授けてはもらえないだろうか」

「ええ……。でも、あの、育て方によっても変わるのだから、あまりそれに左右しないで下さいましね？」

そう念を押して、奥方二人が孕むのを手伝ってやり、子供の素養を見た。つくづく、私はクレバー陛下に甘いと思う。

「どうですか、巫女様？」

「ん、と……」

私は判定内容を言った。すなわち、このままであれば生涯能力は表に出る事はない。しかし、その素養は子孫に受け継がれていくと落ち込む奥方達に、私はつい口を滑らしてしまった。

「アゼル様なら、体の奥底に沈んだ才能を引き出す事が出来るかも知れません……」

「アゼル様とは！？」

「私の住む国で高名な、良き教育者ですわ。もちろん、本人の努力も必要ですが。良き時に、お呼びして子供の教育を見て頂くか、留学すると良いと思います」

「その者、我が国が引き抜こう」

「クレバー陛下？」

「側近の為だ。それに、巫女殿が言うなら、相当に優秀な教育者なのだろう？　ならば、引き抜こう」

「陛下、巫女様、ありがとうございます」

「このご恩は絶対に忘れませんわ」

奥方二人は重ねて言った。私は、ただし、と指を一本立てる。

「王族の子達は、アゼル様やそのご子息が力を十全に操れるようになり、「力を抑えつける事」を覚えるまで、絶対に近付けてはなりません。今でさえ、女神の力を最大に使い、凄まじい力を秘めたお子様方です。悪戯に増幅しては、本人にも手がつけられなくなるでしょう。特にウェンダント様は、攻撃に傾いた力をお持ちです。実際に三歳まで成長したお姿を見て、実感しました。この子は、力の使い様によっては軍隊にも匹敵するような子になります。決して教育を誤る事無きよう」

私の真剣な顔に、奥方達は小さく悲鳴を上げ、陛下は重々しく頷いて下さった。

他に、この子は軍師の才があるとか、頭が良いとか、運動が得意とか、少し体が弱いから気をつけて、など色々とアドバイスした。充実した旅行だった。

帰った後、私は生まれた子にレオンと名付けた。

【そして、29歳のシェスティアの月の七の日が訪れる】

ダークエルフのハーフエルフの子を孕み、ついでにその男の子を保護した。

行き倒れが子種を願うもんじゃないわよ。全く。そうだ、鍛冶士をまだ産んで無かったわ。次はドワーフの子を産みましょう。

10話 奴隷が奪われるとか意外すぎる

ロイが出世した。奴隷上がりにしては、超頑張っているのではないか？

なので、新しく増えた家族、デイルスと共に祝う。

「な、私なんかを迎え入れて、いいのか……」

「いいわよ。当たり前じゃない」

魔術師としての才能あるし。魔術は知らないようだから、頑張っ
て勉強してもらわないとね。彼にも稼いでもらう予定である。

この家には子供達が多くて、驚いているようだった。

ダークエルフは、あまり人間には好かれていないらしい。敵対ま
ではいけないが。

ハーフエルフであるこの子が天涯孤独なのもそんな理由だろう。

黒髪黒眼が嫌われる遠因でもある。訳がわからないわよね？

呪術系統に適性がある事も大きいのかしら。この子とっても可愛
いの。

そうそう、ヴァレンティナから手紙が届いた。

別れた時はちいちゃかったし住んでる場所も違うのに、よく手紙
を届けられた物である。

賢いわが子に鼻が高い。

近々、保護者と共に会いに行くとおった。それを読み、頬を緩め
る私は悪くないと思う。

ヴァレンティナからの手紙には、既にとて優秀な魔術師になり、
緑を育てる一族の仕事もこなしていて、もう一人前だと書いてあっ
た。

さすが私の子！ さすが長女！

私は無意味に胸を張り、その日いっぱい上機嫌だった。
手紙を読んでやると、子供達も喜んだ。

それとクレバー陛下から、無事アゼルを教師として引き抜いた！
と連絡が来た。

恐らく才能開花の能力持ちが二人一緒だから、相乗効果で目覚ましい成果をあげるだろう。

お祝いも佳境に入った頃、ドランが腹違いの弟をやってきた。
もうドランは竜体だと、私ぐらいの背の高さになっている。

デイルスが怯える中、私は喜色を浮かべて駆け寄る。

「まあ、ドラン。元気？」

「ママー！ 僕、ちょっと早いけど騎士になるんだ！」

ドランは上機嫌で抱きついてくる。

「まあ！ 凄いわ！ ……でも、大丈夫？」

「大丈夫だもん。皆、凄く褒めてくれたもん。りゅーまほうつての
覚えたんだよ！」

「素晴らしいわ」

まあ、パラメーターは凄く高いし……。

「無理しちゃだめよ？」

顔を両手で挟んで言い聞かせると、ドランは上機嫌で頷いた。

「僕が独り立ちいっちばんだね！」

「残念。おねえちゃまはもう一流の魔術師で、大人に交じって仕事しているそうよ」

ドランはその言葉に、とてもショックを受けたようだった。

一応、ドランは6人目なのだが、ドランが産まれた時にはもういなかった為、気分的には長男という気持ちが少ないのだろう。そして、バートルミーやハミルトンが兄弟と悟ってからは、とてもライバル視しているのを知っている。

「男の子の中では一番ね？」

「うん！　ね、おねーちゃまってどんな人？」

「手紙が来ているわ」

復活して、手紙を読む事をせがむドラン。ヴァレンティナが帰ってきたら必ず会わせるように約束させられてしまった。

散々楽しんだからだろうか。翌日、ロイが出勤する時、大切な書類を忘れてしまった。

なので、ポールとナイトを連れてロイの職場に届けものに行った。

「……のお、そろそろ素性を教えてくれんかのう？　なーんか、宰相の若い頃にそっくりすぎるほどそっくりなんじゃな、お前さん」

「た、ただの平民です。りよ、両親も普通の一般人で……」

「駄目よ、ロイ？　そんな所で見栄を張っても仕方ないわ。貴方は奴隷だったでしょう？」

「はい、ミラール様」

ロイはがっくりした顔で言う。ロイに話しかけていた身なりのいい老人は、ポールを見て雷鳴を受けたかのように目を丸くした。

「まさか……まさか……お前の父と母の名は！？ ほら、言うてみい！」

人の素性を探るのがこの人の趣味なのかしら？ って、良く見るとこの人雷の能力持ちじゃない。嫌な予感……。それはポールも同じようで、困った顔で、ポールは答える。

「ま、孫よ！！ おお、会いたかった！ その腕はどうしたんじゃ！？ ワシの息子は、息子は！？」

詰め寄るご老人に怯えて、ナイトが雷撃で牽制する。駄目よナイト、御老人に雷撃をしちゃ。しかし、御老人はさっと腕を振って雷撃を無効化。ますますヒートアップした。

「能力持ちじゃと？ 能力持ちじゃと！？ おお！ 我がひ孫よ！ い、生きてひ孫を見れるとは思わなんだ……！」

うん、私の使用人が奪われるフラグが立ったわ。けれど、ポールは困った顔で告げた。

「どんな過去があろうと、今の俺はミラール様の奴隷だし、ミラール様は俺が抜けたら立ちいなくなる。今、幸せだし、愛する者もいる。申し訳ないが、忘れてほしい」

「ワシが不幸じゃあああああ！ 奴隷じゃと！？ ワシの息子が

奴隷じゃと！？　そ、そそそ、その女！　ワシの息子に何をしたんじゃ！」

いや、困った。私はご老人を落ち着かせ、ポールの事情を話した。ご老人は涙涙で健康に悪いんじゃないかと言っほどショックを受けていた。

聞けば、ポールの息子は一人息子だったのだという。一人息子の名家の子が掛け落ちて。

そりゃお爺さんもショックを受けるわ。

正直、家名は養子に継げても、血の流れ、能力までは養子に引き継ぐ事は出来ない為、断絶も覚悟していたらしい。

お爺さんがポールを離す事はなく、シビルと言う妹がいると言ったらそれはもう大興奮だった。

う……うつん……。お爺さんがお年寄りすぎて、子供を提供するって手が使えないのよね。それに、色々受け継ぐなら、ポールじゃないと。ナイトは幼すぎて、お爺さんは待てないだろう。どう考えたってこのお年寄りが、あと十年生きるとは思えない。

私は悩みに悩んで、ポールに告げた。

「ポール。この方の所に、ナイトを連れてお行きなさい。私も親。自分を継ぐ相手がいない悲しみはわかるつもりよ。ナイトがいなくなるのは凄く困るけど、騎士として育てている子は他にもいるし、ロイとはいつでも会えるわ。あの、ナイトの弟が大きくなるまでの徴兵免除金は払ってもらえるのですよね？」

「もちろんじゃ！」

「ポール……行ってくれ。お前の幸せには、その方がいい」

ロイは切なげにポールを見る。

「駄目だ！　そうしたらお前、身を引くつもりだろう」

「仕方ない、だって私達は男同士だ」

ええい、実の祖父の前でホモホモするんじゃないわ。ご老人の心臓に……。

「男でもいい。もう掛け落ちなんぞごめんじゃ。ロイも家に来なさい」

「しかし、私はミラール様の家を支えるという使命が……」

「そうですね。ポールとナイトはお譲りしますが、ロイは困ります。我が家が存続できなくなりますわ」

「ワシが援助する」

「えつと……」

「ワシが援助する。それとも何か。伯爵家たるワシの言う事が聞けないと申すか！」

えええええ。逆切れされちゃった。

二ヶ月後。

すったもんだの末、ナイトを抱いたポールとシビル、レイナールを抱いたロイが、荷物を背負って心底すまなそうな顔で頭を下げた。

背後には立派な馬車が二台ある。

うん、あの後怒涛の身元調査があつて、ロイが宰相の子供である確率が高いと判明しちゃったんだ。母親が娼婦だから、断言は出来

ない。でも、可能性があるのは事実で、ロイには能力こそないが、ずば抜けた知能と宰相そっくりの顔がある。

宰相、種なしだと思ってたんだって。既に養子もいて、立派に將軍目指して頑張っているらしい。そりゃ養子も迷惑よね。いきなり実子が判明して。

ポール爺VSロイ父の盛大な戦いの後、レイナールはその將軍目指している騎士の養子として宰相の家に。ロイはポールの家に行く事となった。いくらロイが頭が良いと言っても、今から貴族の子として育てるには限界があるという事もあり、なんとかポール爺が勝利を収めたらしい。

ロイの方も、レイナールの様子を見にしょっちゅう戻らないといけなくなるしね。

レイナールは徴兵とか耐えられる体じゃないんです、とお願ひしたら、うちにはもう立派な騎士がいるし、騎士の奥方も男の子を産んだばかりだから心配ないとお墨付きを貰えました。

それはそれで跡目争いが起きないのか凄く心配だが、いらなくなったら返して下さいと必死でお願いして、自分を納得させる。

後、ポールにロイとの子供を授けて下さいとお願いされた。

思わずため息も出るという物である。

まあ、産んであげるけどさ。ちゃんと手順は踏みなさいよ？

【そして、30歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

私は男女の双子を孕んであげる事とした。両方、受け渡すつもりだ。

なんかね、これを機に男同士の結婚が可能になっちゃった……。女神様から選ばれて子を授かれば、そのカップルに限り結婚を許可するらしい。

……。えと、それって男同士のカップルに責任持てって事ですか？私は一人なのですが。

なんだかんだいって幸せそうなウェディングドレスを着たロイの顔を見ると、物凄く複雑ですよ。

ああ、ダークエルフの子は生まれた。ディアナと名付けた。私ももう30歳かー。子供の大活躍で左うちわってよりは、子供を売って左うちわって感じなのがいやーね。人生、ままならないものだわ。

11話 長女の里帰りと露見

その日は、私は朝から色々準備していた。

ヴァレンティナが来るのだ！

子供達にも準備をさせ、ヴァレンティナを招く。

「ママ！」

飛び込んできたハーフエルフの娘は、ああ、なんて可愛いのかしら！ 思わずその頭をそつとなでる。

「いらっしやい、愛しいティナ。元気だった？」

私はヴァレンティナを招き入れ、積もる話をした。

抱っこしているダークエルフの子に、ティナは目を吸い寄せられたようだった。

「その子は、ダークエルフね？」

「あら。ティナはダークエルフは嫌い？」

「まさか！ 確かに、エルフ族とはちよつと仲が悪いけどね。でも、喧嘩するほど仲が良いって感じよ。人間はエルフ族に引つ張られた感じだけど、ダークエルフとは一番険悪なんじゃないかしら」

「ふうん。この子、貴方に似た能力分布なのよ。貴方の事を思い出して、寂しかったのもあるのかしら。意図的に少し似せてあるわ」

「ほんと？」

ヴァレンティナはディアナを優しく抱いた。

「ね、ママ。ディアナ、私の弟子にしていいかしら。私が大人になる頃には弟子を取れるレベルになると思うし、この子だって弟子入りする時期になるわ」

「そうねえ。だけど、ティナ？ エルフとダークエルフじゃ、魔法の方向性が違うわよ」

「ダークエルフの友達ぐらいいるわよ。向こうはライバルって言うけどね。安心して。最高の教育をしてあげる」

最高の教育、という言葉に私は惹かれた。

「じゃ、お願いするわ、ティナ」

「任せて！ 差し当たっては、ディアス君。君を鍛えなきゃね？ ママ、少しの間、いい？」

「え、ぼ、僕ですか？」

「僕も勉強する！」

ディアスが戸惑い、カトルが食いつく。二人は正反対の魔法適性がある。

「行つてらっしゃいな。私の可愛い坊やたち。どうせならウォルター、ミラールにも色々教えてくれないかしら？ 二人には適性はないけど、知識はあった方がいいと思うの」

「うーん、エルフの森に入れるか頼んでみるわ」

「ウォルターは役立つって事を教えてあげて。才能開花の力を持つから。ただ、ちゃんと返してね」

「わかった。それも含めて話してみる」

そして、ヴァレンティナは屋敷を出た。

その後、エルフとジャックを伴って帰って来る。

「ジャック。久しぶりね」

「ああ、久しぶり」

ジャックは花をプレゼントしてくれた。まあ、嬉しい。

「才能開花の能力者とは、聞いた事が無いな」

エルフが訝しげにウォルターを見る。

「ママの言う事は絶対なんだから。ディアナは植物の操作と状態把握ですって」

「信じられないな」

そう言いながら、ディアナを抱いて行こうとしないでください。ディアナを何とか取り戻し、ウォルター達を送りだす。大きくなって帰って来るのよー。

【そして、31歳のシェステアの月の七日は訪れる】

ポールとロイは、双子の男女を貰って大喜びだった。
宰相と伯爵が目尻を下げて喜んでいる。

あの様子では、とても可愛がられるだろう。私はほっとした。

そして、私はドワーフの子供を身ごもった。

しかし……。徴兵制度が私にずしりと圧し掛かって来る。

風の騎士の才あるサイラスはたったの三歳。光の騎士の才あるレオンはたったの二歳。

成長がねえ……。大人になるまで17年、訓練所に最速で送るとしても後七年よ？

長女ヴァレンティナはもう一人前の魔術師だし、バトルミー、ハミルトン、ドランも騎士見習いとして立派に徴兵義務を果たしているのに……。

やはり、子供を取られるというのは辛いわ……。

養子と言う手もあるのだろうけど……。

それと、やはり私が巫女だという噂は流れ始めていて、私に直接子供を願う人が多くなってきた。神官にも、神殿に來ないかと言われている。

……神殿で仕事した方が、楽ではあるのよね。

けれど、神官達は恐らく孕ませる子供についてあれこれ言うてるだろう。

そこが悩みどころなのだ。

とりあえず、安産の女神の情報を集めてみようかしら。

そういうわけで集めてみたら、出てくるわ出てくるわ。

安産の女神は必ず能力者を産むのだ、子供は総じて優秀だの。ちゃんと女の人にも安産の加護をくれるだの。

一番大きいのは、シャーロットの噂だろう。

なんでも、大地の幼女神が降臨したと大騒ぎである。

魔術にも癒しの術はあるじゃない。第一、他の能力持ちと何が違

うの？

相変わらず理解出来ないわー。

力ならウェンダントとアストレンジこそ至高なのに。

ただ、安産の女神が産んでくれるのは選ばれた人間だけだ、お貴族様や異種族のみだというのも定説としてあるらしい。

うん。そりゃ、良い素質の人間はおのずと出世するし、それが続けば家柄もよくなる。良い素質の人ばかり選ばばそりゃ家柄の良い人ばかりが相手になるわよね。

私の事情で決めてる部分がほとんどだし、否定はしない。

まあ、普通の家庭には普通に子供を授けてるんだから、いいじゃない。

のほほんとしていらなくなったのは、シャーロットの能力開花の祝いのお祭りをこの国でもやる事になったから。

だ、だって隣国の子よね？ 我が国は関係ないわよね？

カトル、大丈夫かしら……心配だわ。

彼は夫なので、子作りをする前に連れ去られては困る。

それに、幼い頃から伴侶として育てて来たカトルに、愛情を感じていた。

私は、夫として持つならカトルを、と思っているのだ。

困っていると、王城から呼び出しが来た。

巫女についての事だろうか。

嫌だなあ……。

会ったのは、女王様だった。

「貴方が安産の女神の巫女、ミラールですか」

「安産の女神ヨランダ様が僕、ミラールと申します」

私が深く頭を下げると、さわさわというざわめきがした。

「ふむ。では、大地の女神を産んだのはそなたですか」

「シャーロット様の事なら、その通りですわ」

広がるざわめき。私が出来る事は、しっかりと両足を踏みしめて、凜と立つくらいだ。

「わかりました。では、大地の女神に匹敵する子を産みなさい」

「……男爵としての私ならともかく、女神の僕としての私に命令をするのもどうかと思いますけれど……。それを差し置いても、何もない所から産む事は出来ませんわ。恐らく、女王陛下がお考えの事を為すには望む能力の才能ある殿方が、二人必要になりますわ」

実は、殿方二人の能力を組み合わせた方がいい子が産まれる。個人の身体能力や賢さは決して高い物ではないからだ。同じ能力者ならばなおいい。

「一度、大地の女神を産んだのでしょうか。あれより強力であれと同じ者をもう一度産めば良いのです」

「精を保存しておく事なんて不可能ですわ。それだけでなく、こちらも子供が産まれる時期を見計らわねばなりません。それとも、アライト様とクレバー様から精をお譲り頂ける約束を？ あるいは、リライト様とクレバー様でもいいですけど」

女王が強い瞳で睨んでくる。

「……貴方が産んだのなら、親権は貴方にならないの!？」

「伯爵相手に親権で勝てないのに、隣国の王様相手に争って勝てるかという問題もありますが……。あの子達は、それ以前に依頼があり、女神の名の元に、授けた子なのです。女王様。それにバートルミー達やナイト、ロビー達、ドランではご不満ですか？　あの子達もまた、自慢の子供達ですわ」

その言葉に、我が国にも能力持ちの子供が沢山いる事を思い出し、女王は若干落ち着いた。

「ドランは確かに見目珍しいですが……能力としては、少人数相手の攻撃能力は下。大勢を動かすのは、やはり癒しなどの能力なのです」

うん、クレバーのこのは範囲大規模だしね。バートルミー達は頑張っても騎士団一個を一度に相手取れるくらいだろう。ぶっちゃけ相手にならないと思う。

……強くしすぎたかなー。強くしすぎたんでしょーねー。

あの国が将来力をつけないって言った方が驚くありさまだわ。

「……貴方の子にちょうどいい能力者はいないの？　いえ、私がこれから貴方の相手を管理して……」

私の周りに風が吹く。ヨランダ様のご加護の力である。

「女王様？　私はヨランダ様の僕として、依頼は受けはしても、自分で相手を決めますわ。この能力は繊細にして一年もの時を使う秘術。誰にも口は出させない。それに、私の可愛い子供達は絶対に誰も渡さない。血の繋がりのある者ならば仕方ありませんわ。涙を飲みます。でも、何の関係も無いくせに可愛い子供達を浚う者は絶対に許さない」

「……っ」

「子供達が望めば、この国にお仕えする事もあるでしょう。事実、物ごころついた私の子のほとんどは既に城仕えしています。それと、今私の子に他の治癒能力者はいませんわ」

未来では現れる予定だという事は言わない。

「ならば、子供の能力のリストを渡しなさい」

「女王様……私が産むのは華々しく能力を持った子ばかりではないのです。何より、子供を渡す前段階にもなりそうなそんな真似はしたくありませんわ」

またしても私を睨む女王様。

「ただし。一回に限り、女王様の命で孕みますわ。ご依頼、お受けいたしますとも。これが私にできるぎりぎりの譲歩です。シェステアの日の七日、神殿に新鮮な精液を入れた革袋と子供の希望を書いた手紙をお供えください」

「……わかったわ」

ふう。気付かれました私は、よろよと帰った。

公に認めた為、今孕んでる子の親ドワーフと風の騎士を願ったウィルバがウィルアを抱っこしてやってきた。凄く返してほしそうな顔で見ているけど、スルースルー！。

ウィルアとサイラスが凄く仲良くしているのを見ると、心は痛むんだけどね。

12話 そして続出する犠牲者

【そして、32歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

何か、色々画策していたようだが、七日が迫りどうにか落ち着いたらしい。

選ばれた能力者は……。

天候を操る能力者が、二人。かなり血は薄いようだが、まあ相乗効果で濃く出来るだろう。

何か真つ二つに分かれて争っていた両家の当主が無理やり選ばれたらしく、呆然自失状態らしい。

それと両家の婚姻が女王様命令で決定されました。

どっちがドレスを着せられてしまうかで死闘を繰り広げているそうです……。

やんごとなき家だと、初夜まで色々と所作が決められているが。

……。どーするんだろう。まさか律儀にそこまでやったりしないよね？　しない事を祈る。

ちなみに今までの二人の奥さんは愛人に格下げされた。何その酷過ぎる悲劇。

あの、ごめんね。色々。ほんとにごめんね。

私が命じたわけじゃないから、恨まないでね。

全身全霊で孕みますです、はい。

ドワーフは双子の男児が生まれました。私の方の子にも、色々教えてくれるとの事。

なんでも、将来的に自分の工房に引っ張り込めればそれでいいとの事。

私もそれに頷いた。

これだけ犠牲を支払うのだから、最大限の数を産め！　と言われ

たけど、私もう30過ぎよ？　と言う事で二人に加減してもらった。どうやら、天候を操るといつか、主に雲を操る能力みたいね。男女だとどっちが跡継ぎを貰うかで揉めるだろうから、男児が二人にした。

いや、両家が統一されたってのはわかってるんですけどね？
今にも真つ二つに分かれそうじゃない？

今回も二人ともあげますよ。ものすつっつっつごく面倒事の香りがするしね。

ピクニクとかで雲を払ってくれるのは凄く素敵なおもちゃですけど……。

奪われるのが目に見えてるのでしない。

8日。女王様以外誰も幸せにならない結婚式が行われた。王様も思いつきり可哀想な者を見る目で見てる。贈り物はいっぱいあげたようです。慰謝料的な。

あ、私の国は王族も結婚式に出てくる事が多いのだ。割とフレンドリーな国な方なのかな？

9日。心配でちらつと様子を見たら、二人の雰囲気がいかにもぎこちなく艶っぽかった。

片方涙目。超涙目。後腰庇ってる。もう片方は苦虫を噛み潰した顔だけど、余裕がかいま見える。そんな様子を見ると、私も自然涙が出て来た。

ごめん。超ごめん。無理だと思うけど、幸せになってね！

後、我が国でこう言う法律できたから、女神の加護を受けたあんたらも結婚しろって手紙をクレバーの国に神殿が送ったらしい。

ちょ、おま。

神官達ってさ、目を離すとしてもない事やらかすよね……。全く。

そうそう、ヴァレンティナから手紙が来た。

皆頑張っているらしい。

優秀な子ばかりで、驚いているとか。そうでしょうそうですね。

ウォルターが特に喜ばれているそうだ。

今度、ダークエルフの所にお泊りに行くらしい。

何でも、ディアスとウォルターをどうしても連れて来いというさ
いのだという。

それから、クレバーからも手紙が。アゼルの紹介に対する深い感
謝の手紙だった。

私はそれらに、レヴィーも行きたがっているからよろしくね、と
いう手紙や、クレバー陛下、結婚の事だけどヨランデ様は望んでい
ないから安心して下さいませ、といった手紙を贈る。

さて、次の子はどうしようかしら。今度こそ休む……のは神官達
がはしゃいでるから無理か。

神官達に選んでみる？ と問いかけると、物凄く喜ばれた。

私は、それをすぐに後悔した。

うん、また犠牲になる男達が出たんだ……。

【そして、33歳のシェスティアの月の七日が訪れる】

希望者から選んでくださいと言わなかった私が悪い……のだろう
か？

涙目の殿方達を見ると、申し訳ないと思う。何か縛られているし。
え、これから絞り取るの？ 本当に？

いい笑顔ね……。神官さん達。

どうしよう。殿方達の涙で川が出来そうだね。

私は戸惑いがちに問うた。

「男の子二人で良いかしら？」

「だ、男女で頼む……こうなったら毒を食らわば皿までだ。女神の意向で親権は渡せ。親権は渡せ。親権は……くうっどうして分家の男と結婚せねばならん！？」

「俺のセリフだっ」

まあそれ位の願いなら叶えるけれども。

「嫡男が一人だと不便でしょ？ 私の所の神官が迷惑を掛けてしまったようだし、男男女女くらいなら産んでもいいわよ」

「すまん……」

どうやら、親戚一同に影を操る能力を持った当主嫡男と分家筆頭嫡男が売られてきたらしい。

能力の発現率は悪くないみたいだし、二人も能力者。悪くはないと思うのだけど……。

更なる雄飛を！ と言う事らしい。ちなみにかなりの名門である……そんな理由で結婚させられたんじゃ溜まったもんじゃないと思うのだけれど。

「高い能力と遺伝性、どっちを優先する？」

「どっちか選ばねばなんのか」

「天秤を傾ける事は出来るわ」

「……遺伝を頼む。ただ、ここまでするのだから能力も出来る限り

大きい者が良い。これからの人生諦めるに足る位は……」

「俺は諦めたくねえっ」

「わかったわ。分家筆頭さん。浮気って手もあるから、泣かないで」

「家の家系でそんな事が許されるかつ　ついでに言えば泣いてねえっ」

泣いてる泣いてる。ごめんなさい、本当にごめんなさい。

そして、天候を操る子供達を受け渡し。

……なんだろう、この男二人の一見嫌々しつつも初々しい雰囲気。背後の当主嫡男と分家筆頭嫡男が唇を引き攣らせている……。
そうです。ほぼ間違いなくあんたらの未来です。

涙が抑えきれない。

婚姻の時の二人の死んだ目は、忘れる事はないだろう。

婚姻と言えば、ロレッタが婚姻した。ヴァレンティナも、エルフに婚姻はないが、初夜の相手は決まったらしい。

ぜひともお祝を送らなくては。

ロレッタの花嫁姿には、思わず涙が出た。

婚約者はまだまだ小さな少年だが、精一杯背筋を伸ばす様が頼もしかった。

幸せになつてね。幸せになつてね。

シビルもお嫁さんになった。

同じく、贈り物をしたし、いっぱい泣いた。

そういえば、我が娘、真の跡継ぎミラールと愛しいカトルが先行して戻って来るらしい。

それもまた楽しみだ。

そうだ、次はカトルの子供を産もう。

あの子ももう18歳なのだから。

そう言うわけで、早めに神官に告げておく。

そうそう、ミラールには覚悟のほどを聞いておかないと。

もう私も30をとくに過ぎている。強力な子は産めなくなっ
ていくだろうから。

13話 災いすぎる言葉（第三者視点）

女王は悩んでいた。

癒しの力を持つ大地の女神に匹敵する一族……。

それに、子を心から望む者でなければ、女神はお怒りになるのでは？
そこで、神殿に頼み、希望者をリストアップしてもらった。

神殿は、女神の僕。勝手に選定を行ったりはしないが、記録には残すのだ。

それは、住所特定が可能なら一年後に子供の生誕を知らせる為でもある。

その他にも、子育ての支援など、こまごまとした努力を行っていた。それに、努力していれば、いつか希望者のリストが役に立つ事があるかもしれない。

そのリストは早速女王の役に立ち、女王はリストをくまなくチェックした。

そして、気付いたのだ。それは初恋の人。五歳の時の、甘い恋。親友と結婚してしまった、愛しの人。古くから伝わり、悲しい事に途絶え掛けているウェザーテイス家。

古くは国の天候を操ったとも言われ、この国の祭祀を取り仕切った名家である。

しかし、それは過去の事。もう長い事、能力は現れず、家は二派に分かれて争っていた。

それは、愁いでもあった。

女王の記憶に、憂いに沈む愛しかった人の幼顔が浮かぶ。

『本当は、僕は争いを望んでいないんだ……。あいつが、ほんの少し歩み寄ってくれれば……。何か、歩み寄れるきっかけがあれば……。』

歩み寄れるきっかけ。そして、もう片方のウェザートス家もリス

トに入っている事に気づく。

ああ、ハロルド。愛しのハロルド。大丈夫よ。国は威信を得て、ウェザーティス家とウェザートス家は一つとなり、皆幸せになるの。よもや両家の血の能力者としての血が途絶えているとは思えない。血に関しても、祭祀に関しても、神経質なまでに気を使っていた。同じ能力、才気ある魔術師。アマリスもハロルドも男。親友には少し悲しい思いをしてもらうが、よりよい子作りは名家の使命。少し、我慢してもらおう。

女王は、早速夫である国王に相談し、許可を得た。

国王は、ハロルドとアマリスに子を為させたいという意見に、もろ手をあげて賛成してくれた。

そこで、女王はまず、両家の奥方を呼んだ。一番辛い思いをするのは、妻である二人であろうから。夫が側室を持つ事は、まだいい。しかし、確実に家を継ぐのは女神の能力持ちの子だ。既に子供を持つ身としては、これほど辛い事はないだろう。

実は、先ほどの女神への嘆願、奥方には知らせずに出したようなのである。

何事かと戸惑いながら現れた奥方二人に、女王が膝をついたので奥方二人は大いに驚いた。あの、誇り高くてすぐブチ切れる傾向にある女王が、実質的に国王よりも影響力が強かったりする女王が、膝をついたのである！

「ああ、私のかけがえのないお友達。ごめんなさい、この国の為に、涙を飲んでほしいの。……私が、女神に子供を選ぶ権利を頂いた事は知っているわね？ この国で最も偉大な能力と言えば、天候を操る、ひいては作物を守る貴方方の家だと思うの。どうか、協力してもらえるかしら？」

ここで、奥方達は大きな勘違いをした。まさか、女王が「夫に精液を提供させる程度」、その程度でここまで平身低頭するとは夢に

も思わなかったのである。

それに、女神に許された、つまり子を授けられた男同士は結婚出来るという法もある。

奥方達は離縁しろと迫られていると勘違いし、大いに戸惑った。

女王には逆らえないからであり、ウエザー家に嫁いだ以上、能力者を産む事は悲願であり、それでも夫達を愛しているからである。

「こんな時にこれを言うのは卑怯だけど……。ハロルドを、愛していたわ……」

「！！」

「！！」

女王は、痛ましげに笑った。

「幼き日、ハロルドが言った争いたくないという言葉、きっかけさえあればと言う言葉、今も覚えている……。勝手な事を言っているとかっているわ。けれど、女王としても、個人としても、両家を取り持ちたいの。お願い……」

女王様が、争いたくないと仰った！ 二人の奥方は、女王が国を愛してはいるが、いささか強引で視野が狭い事を憂いていた。

その女王が、友好的な方法で両家を取り持ちたいと言っているのである。

もはや、親友として、家臣として、我が身を犠牲にしてもその芽を潰す事など出来なかった。ここで断つても、女王として命じてくるだろうという計算、ウエザー家程女神の加護を受け、大地の女王に匹敵するような者はこの国にいないという自負があった。

文献から、雲、大地、治癒、大渦、台風、嵐の6大家在最も大規

模であるとされている。

ウェザー両家はその中の雲を司り、国一つを守護したと言われる一族。大地に負けるわけにはいかないのだ。

まして、露と消えた神聖王国の治癒を司るヒーリング家のように決してなるわけにはいかない。

奥方が了承すると、女王は涙を流して喜んだ。
そして、助言したのである。

「さあ、女王陛下。お立ちになって。凜として、命ずるのです。きっと夫はわかつてくれますわ」

「そうですね。元から子種の祈願はしていたのを知っています。気になさらないで」

結果

「アマリスの阿呆と子供を作るだ！？ 馬鹿な！！ 女王陛下、まさか私がかつて振ったのを根に持って！？ あまりに酷い行いではないですか！ 未練がましいにもほどがある！ アマリスなど豆腐に頭を打って死ねばいい！」

「ハロルドと子供を作る位なら死にます。ええ、今切腹します。ええい、止めるなあ！ おのれ女王！ 崇ってやるぞ！」

罵倒するハロルド。剣を持ちだすアマリス。

不幸の要因が、三点ある。

その一。もしも、奥方達と同じ態度で接していれば、何か違ったのかもしれない。けれど、女王は初恋の君の前ではかつこよくあらねばと、凜とした様子で、笑顔を作り、震える声を押し隠し、やや強い口調で言った。それが、高圧的で、復讐に燃える女を演出してしまつたのだ。

その二。国王もこの場にいた。ちなみに、女王はハロルドへ告白はしたが、それ以外で想いを打ち明けたのはハロルドの奥方達が最初である。国王も実は知っていて、それで、国政を考え、ハロルドに他の女と子供を作らせる行為を命じた事に喜んだとは、思いもよらない。女王は、幼き日の想いを穢されただけでなく、現在の好きな人の前で淡い恋を暴露されたのである。

その三。女王は、ハロルドに甘かった。とても甘かった。二人だけの時にはかなりの無礼を許した。だから、ショックな事が起こり、冷静さを失った時に、つい人前でその態度がぼろっと出てしまった。こうして、女王の涙ぐましいと本人が信じる心遣いは、ぐっしやぐしやに踏みにじられたのである。

ついで、女王はこう言った。

「結婚なさい」

「結婚なさい。命令です！ 栄えある名家がこうも醜く争い合うとは何事か！ もしも女神から子を授かりし時は、それは両家に仲良くせよとのご神託！ 即刻今の奥方を愛人とし、ハロルドとアマリスは結婚をなさい！ どちらが奥方の義務を果たすかは選んで良いが、それ以外は全ての通常の男女の結婚のときと同じにせよ！ これに逆らう時は、能力ばかりか、貴族の義務も忘れた一族などいらぬ！ 皆殺しにしてしまえ！ 自害がゆめゆめ許されると思うな！

アローン！ 自害を出来ぬよう、逃げると思わぬよう、心を操る術を掛けよ！」

ハロルドとアマリスは、この国で最も怒らせてはならない女性を怒らせたのである。

ちなみにアローンは国一番の宮廷魔術師である。

その能力故厭われていたが、女王が自分は心を操られるほど弱くないし、優れた人間が虐げられるのは納得いかないと宮廷魔術師にまで引つ張り上げた、女王の腹心である。

女王の為に言っておくが、心を操れ！ などと女王はめったに言わない。抜かぬ事が武器である、伝家の宝刀な事を理解しているのである。

こうして、ハロルドとアマリスは逃げる事すら叶わず、泣く泣く女役を決める決闘をする事になったのである。

13話 災いすぎる言葉（第三者視点）（後書き）

今日中にハロルド×アマリスの「初夜」書けたらなあと。
翌朝にでも某ブログを覗いてみてください。

某ブログを知らない方、ノーヒントです。すみません。
たいしたものじゃないYO！

14話 引き継ぎ準備

【そして、34歳のシェステアの月の七日が訪れる】

私は、カトルと二人、ベッドに座っていた。

「カトル……ごめんなさいね。こんなおばさんで。精液袋の提供だけでもいいのよ?」

「いいえ。ミラール。僕の妻」

そして、私達は一つとなった。セックスは久しぶりである。
私達は、子供が神殿に送られて行くのを二人で見守った。

「僕の子は優秀になる?」

「もちろん。……けれど、クレバーの所のシャーロットが、大地の女神として大騒ぎされているのが心配なの……」

「うん。僕の力は、治癒だからね。これは秘密にしておいた方がいいかもしれない。神聖魔法の適性もあるみたいだしね。でも、それよりも、気になる事があるんだ」

「何かしら?」

「僕の子、いつぱい産んでくれる? それだけが心配で」

「後六年したら、専属になってあげる」

私達は、笑ってキスをした。

男の子と女の子を産もう。これ以上なく優しく清い子を。

翌日、娘のミラールを呼び、私は告げた。

「ミラール。お役目が始まるまで、後6年よ。幸い、私はもう少しの間なら子を産める。今なら、私は他の跡継ぎを……」

「それは侮辱よ、お母様。スピアを作る事に反対はしないけど。私は16になれば神殿に行き、ヨランデ様の加護の元、毎年、子を孕みます。この役目は、私に命と胎がある限り誰にも渡さない。そして、ヨランデ様の神殿と家を盛りたてていきます。能力者以外の子も産むわ」

「そう。ならば良かったわ。その言葉、忘れては駄目よ。……好き
な人が出来ても」

「心得ているわ」

私は、無言で娘、ミラールを抱きしめた。

それでこそ私の娘。最強の娘。頑張りなさいな。後6年は、しっかり守るからね。

その後、私達はカトルを交えていろんな話をした。

ミラールにも、カトルのような人が現れる事を強く願う。

そうそう、ディアスがディアナと共にダークエルフの森に住みたいと言ってきた。

どうしてこう、私が駒にしようとする人は出ていくんだらうか。

でも、意外な事にヴァレンティナからもお願いが来た。

仕方ないわね。

そう言う事で、泣く泣くディアナを送り出す。

そうこうしている内に、ウェザー両家から凄まじい貢物が届いた。神殿にも贈り物は届いたらしい。

どうやら、子供の片方が力を発現したそうだ。お祭り騒ぎであり、女王主催で祝いの席が開かれた。

子供を大切に抱く二人は少し呆然としていた。

よしよし、もう片方もちゃんと大事に抱っこしてくれてるわね。

そこで、女王が直々に私の所にやってきた。なにやら、苦々しげだ。

「そちらに、レオンなる子がいるらしいの」

そして、深呼吸して頭を下げる

「レオニールが、私の息子が失礼をした」

「……失礼かどうかは、息子をどうするつもりかによりますわ。あの方は私に親権を譲ってくれました」

「それは許されぬ事だ。わかっておろう。だから、こうして女王たる私が頭を下げている」

それは認めねばならない事だ。私はため息をついた。

「条件があります。大人になるまでは、私の手元に」

「すまぬ。王族としての教育をさせる故、それは許されぬ」

「庶子ですわ。本当にあの方の息子だという証拠も無い」

「女神と力がその証拠となろう。王位継承権は与えぬが、種馬として使います」

「親がそんな事を言われて承諾すると？」

「そして私は祖母である。……幸せにすると、約束するわ。私の名に誓って」

女王にここまで言われては、仕方ない。私はため息をついた。

「サイラスは奪わせませんわ。徴兵制度があるんですからね」

「それは……孫を取り戻した私には言えぬ事です。その代り、ミールに限り、国の指示で子を孕む奉仕を持って、徴兵義務に匹敵すると決めましょう」

「……よろしいの？」

「そなたのした事は、その価値のある事です」

契約、成立ね。仕方ない、か。私は頷いた。

祝勝会の後、私に子を産んでほしいという申し出が殺到した。その中に、治癒能力を持つ子を産んでほしいという願いがあり、私とカトルは眉を潜めたのだった。依頼主は、亡国の貴族だった。

「私は、失われた神聖王国を復活させたい……！ あの日、王族が残らず蛮族に誘拐される憂き目にあい、屈辱に自害したその日の事は忘れません。「失敗して死なせてしまった、代わりはいないか」とぬけぬけと聞いて来たあの蛮族の言葉、絶対に忘れません。その力の象徴たる、輝ける治癒能力の持ち主さえいればいいのです！志を同じくする神聖王国貴族52名を集めました。どうぞ、王族の、治癒能力者の復活を！」

ちなみに、子供を横流ししろって話も来ている。
困っちゃったわ。

14話 引き継ぎ準備（後書き）

恐らく、引き継ぎしたら最終回になると思います。
でも後6年もあるですよ。いい加減ネタ尽きたorz
それとお気に入り600件、ありがとうございます！
超びっくりしました。

15話 戦争（前書き）

最終回じゃなくてすみません。

ミラールが16歳になったら最終回の予定です。
後5年。

15話 戦争

「女神の巫女として、一人の母として。戦争に加担する事は出来ません。このまま治癒能力者を産んでも、その子は間違いなく争いの渦中となるでしょう。一つの国が守れなかった珠玉を、いかにして亡国の家臣たちが守れると言うのでしょうか。既に、産んだ子を寄こせと言う神をも恐れぬ要望が私の元に来ております。私が望むのは、全ての子らの幸福。戦争になれば、どれほど多くの子供達が不幸へと叩きこまれる事か。どれほど金を積まれようと、私は不幸な子を産みはしません」

「しかし！」

「どれほど請われようと、争いの元となる子は産めません」

「治癒の力ある子が無くば、我が王国は本当に滅びてしまいます！」

「くどい。お引きなさい。念の為言っておきますが。もしも私に無理やり孕ませようとしようと、子に引き継ぐ特性を決めるのは私。そして、子供達を盾に脅迫すれば女神の怒りに触れると思いなさい」

使者が帰ると、ふう、とため息をつく。

「大変だったね」

「大丈夫よ、カトル。だからそんな顔をしないで」

私はカトルの顔をそっとなでる。

「ねえ、カトル。勝手に返事をしちゃったけど、貴方はどう思う？」

カトルは、私を抱きしめる。

「……僕の人生が壊された事は悔しいと思うよ。でも、今僕は幸せだ。それに、ミラールの言う通り、戦争には反対だ」

「そう。良かったわ」

話はそれで終わりだと思っていた。

けれど、全く終わりではなかったのだ。

私は失念していた。

安産の女神ヨランダは、無数の神の内一柱にすぎないのだと。

周辺の全ての国家から、聖王家の復活願いが届いた。

聖王国を滅ぼした国からさえも、復活願いと圧力が掛かってきたのは驚いた。

私は、仕方なく貴族達を呼び、一瞥して告げた。

「子供を産ませる事は出来ません」

「何故ですか！」

「戦を避けたいから言っているではありません。血が薄すぎるのです」

その言葉に、貴族達は落胆して帰って行った。

私は嘘はついていない。カトルの事は聞かれなかったから言わなかったただけだ。

兵が屋敷へ乗り込む未来視をレヴィーがした為、身の危険を感じて、王城に滞在を願っていた私の所に使者が駆けこんできた。後か

ら女王も入ってくる。

「どうか、ミラール様！　我らが王族を、お返してください！」

「なぜそのような事を？」

「最後の手段として、伝説に従って聖王国の守り神、ホーリエル様にお伺いした所、王族の血はヨランダ様の手の内にあるがゆえに、手出しできぬと。どうか、ミラール様！」

そこへ、女王がツカツカと歩み寄って、パシッと扇子を叩いて言った。

「何故言わなかった、ミラールよ。これで戦争は始まるであろう。既にカツツアールは我が国に聖王家とそなたの引き渡しを求めている。急ぎクリティカに救援を求めるが、その際にはそなたの名を出すぞ。良いな」

「そんな……！」

「能力者の子供、それも貴重な能力の子を優先して産めばこうなる事は必定。これはそなたの為した事。そなたの偉業と悪行を、妾の隣で見守るが良い」

カトルは、私を庇って告げた。

「僕が行けばいいでしょう。ミラールには関係が無い」

「ほう、そなたが。ご機嫌麗しゅう、聖王国陛下。しかし、そこな巫女はもはや無関係ではられません。その腹の子は御子でしょう。」

もはや、全面戦争しか無いのです。いえ、これは陛下を巡る戦いにあらず。もはや、巫女を巡る戦いなのです」

私は青い顔をして、カトルの腕にすがった。

その時、強い痛みを感じてへたり込む。陣痛だ。

「ミラール！」

「陣痛だ！ 医師を！ 聖王国が御子を死なせたら首が飛ぶと思え！」

そして、私は子供達にカトリーナとカトラスという名を名付ける。兵士達の護衛に守られ、私は重いため息を吐いた。

【そして、35歳のシェスティアの七の月が訪れる】

カトルは、戦いの狼煙の上がるさなか、神聖王国国王に即位した。その夜、私とカトルは交わる。

「こんな形で、僕の子を産んでほしくはなかった。それも……」

カトルは顔色を曇らせる。隣には、二つの精液袋。

そう、私はカトルと神聖王国貴族の子を産む。

王族として存続していかせたいなら、治癒能力を持ち、遺伝子情報異なる子を大量に産む事が必要となるのだ。

「ごめんなさい。カトル」

「ううん。僕は、心のどこかで思っていたんだ。母の一族を蘇らせたいと。ミラールこそ、巻き込んでごめん」

私とカトルは微笑みあった。

私は、子供を産むだろう。

治癒の力を持つ、親の違う男女を。

そして、戦争が始まった。

子供達も、駆けつけてくれた。悲しかった。心配した。

けれど、それ以上に驚き、恐れてしまった。私の為した事に……！

子供達は、遺憾なく力を発揮した。発揮しすぎたのだ。

ヴァレンティナは、強かった。

確かに、まだうら若き乙女でありながら、魔術師として別格だった。

ドランも、強かった。

まるで、伝説のドラゴンの如く暴れまくった。

バートルミー、ハミルトン、ルアンナもまた、かなりの成果を上げた。

レヴィーも、遺憾なくその恐るべき力を発揮した。

シャーロットは恐るべきカリスマを持って兵を鼓舞した。

けれど、ああ、けれど。

けれど、全てはウエンドントに及ばない。

彼は、さながら神のようだった。

クレバーやリライトすら、顔色を青くしている。

ウエンドント本人すら。

彼は、ああ、彼は。一軍全てを土に沈めてしまったのだ。

「あ……ああ……！ ど、どうしよう。父さん、どうしよう。俺、つい、どうしよう。死んじゃう。皆死んじゃう！」

「落ち着いて、土を操って中の人を出すんだ。お前ならできる、ウエンドント」

「駄目だよ、父さん！ 出来ないよ」

私は、ドランに運んでもらい、ウォルト、クレバーと共にウェンダントの元へと向かった。

「ウェンダント。大丈夫。ウォルトの手を握って」

「あ……あ……」

「ウォルト。いい子だわ。ウェンダントを助けてあげて」

そして、二人の子供は力を振り絞る。優しく土の外に出された兵たちは、皆瀕死だった。

「お願い、神様！ お願いよ！ だって、これじゃあお兄様が可哀想じゃない。だから、お願い、神様！」

シャーロットが発光する。それは神の力ではない。シャーロット自身の力。

そして、シャーロットの力は、さながら神の如く。その力、兵士達を癒し、シャーロットは倒れた。圧倒的な力に、跪く兵たち。

その瞳には、恐れと畏れ。

……まさか、これほどとは！
その後、私は女王に呼ばれた。

「ミラールよ。そなたは、もはや勝手に子を……いや、神を作る事、まかりならぬ」

「……」

私は黙って頭を下げ続ける女王の声は震えていた。

「例外として、封じの力を持つ子らを産む事を命ずる。あのような力を持つ者たちが、稚い子供である事が妾は恐ろしい。ミラールよ、もう一度言う。そなたは、子を作ったのではない。神を作ったのだ」

「……女王様の命、確かに承りまして」

私が戻ると、ミラールが駆けよってくる。

「お母様。確かに此度の力、行きすぎたように感じます。けれど」

「けれど？」

「それでも、我が血族は続いて行くべきですわ！ 厳重な管理と共に。私は神殿へと行きます、お母様。そして、ヨランダ様と共に生きます」

その強い言葉に、私は思わずミラールを抱きしめていた。

16話 集合

【そして、36歳のシェスティアの日は訪れる】

私は、ヒーラとヒールを産んだ。

カトルは、神聖王国王都へと向かった……。

そして、封印を司る家、シール一族から何人かの男性がやってきた。

私は、彼らの子を産む事となる。

子供達もそれぞれ、悩んでいるようだった。

子供達が大きくなるにつれ、この問題は大きくなっていくだろう。封印の能力者達が育つまでの間に、子供達が問題を起こしたら……。

今までは、どうにかなると思っていた。

けれど、ウエンドントのあの力。人間ごときに抑えられる物ではない。

私はシール一族の長、シルフィアと面会する。

物静かな、銀髪に青い瞳の長髪の美青年だった。

「巫女ミラール。お初お目に掛かります。シルフィアと申します」

「長殿。私はミラール。此度はご迷惑をおかけします」

私は頭を下げる。

「巫女ミラール。あまり落ち込まれますな。能力の発現は喜ばしき事。今さえ乗り越えれば、ウエンドント達も親となり、子の能力を律する事が出来るようになり、新たな秩序も生まれましょう。しかし、今現在、幼子達を律する者がいないのも事実。我らと、グロ

「一族が助けになればと思います」

ずっとシルフィアが後ろを指し示すと、黒髪の熟年の男がいた。

「グロー一族？」

「成長を助ける一族です。神はこのような時の為、我らに力をお授けになりました。……嬉しいのです。我らの力の役立つ時が来るとは……」

「グロー一族のグリードです。我らは、忌まわれし一族。このようにお役に立てることが出来るとは……」

「お待ち下さい。しかし、赤子を大人に成長させても……」

「ミラール様はご存じのはず。最初から知恵ある者を産みだす方法を」

「！……転生の儀を使うのですね。神の手助けを？」

「我が一族は、そのような約定を神と結んでおりますゆえ」

グリードが誇らしそうに告げる。

「では、グリード様の子とシルフィア様の子を孕めば……」

「お待ち下さい。我らの力は封じ。他の能力者と血を混じらせる事は、相手の能力者に良くないのです。先にグリードの子を、次に私の子を孕んで頂けますか。転生の儀は両方の子に使います」

私は頷いた。

「それと、我らは恥ずかしながら、平時であれば忌まれる存在。クレバー様は暖かく受け入れて下さいましたが……。しかし、今回のように、ミラール様の力と共にあるなら、我らの力は加護へと変わる。どうか、神殿に受け入れて頂けますか」

「ミラールに許可を取らねばなりません……」

「私は構わないわ、お母様。コントロールする力を得るのは、願ってもいない事」

ミラールは歩み寄り、恭しくお辞儀した。

「シルフィア様、グリード様。よろしくお願いします。つきましては、まず私を16歳まで成長を……」

グリードは首を振る。

「転生の儀を用いるのではない限り、成長の術を使うのは避けた方が良い。人格も、力も、成長と共に育ててこそです。転生の儀では、初めからそれらを備えた人物の魂を備えるのですが、それでも体が弱かったりします。時を重ねるという事は大事な事なのです」

「残念ですわ」

そして、グリードは私と交わった。

【そして、37歳のシェスティアの日は訪れる】

私は男児二人を産み、シルフィアと交わった。

時は矢のように過ぎ去り、子供は五歳相当まで育った。賢明にも、子供は普通を装っているようだ。それが上手く出来ているかどうかは別として。私はシールの子供が産まれた時に、彼らに全て話す事を決意する。

【そして、38歳のシェスティアの日は訪れる】

私はシルフィアの子を産んだ。そして、再度シルフィアと交わる。封印の子は、複数必要である。

そして、家族が全員集合で来た事に涙する。

不謹慎だけど、凄く嬉しかった。

勇気づけられた私は、グリードの子、グリフィスとグローレンに座らせ、シルフィスとシルバードを抱きしめる。

「グリフィス。グローレン。シルフィス、シルバード。いえ、転生者達よ。大切なお話があります」

「ええっば、ばれて!？」

「知っていたのか、母さん！」

驚くグリフィスとグローレン。

「まず、グリフィスとグローレン。貴方達には、成長の力があります。これで、シルフィスとシルバードを成長させてほしいの。この子達も転生者だから、後遺症はありません」

「成長の力!？ だ、だからこれだけ早く動けるようになったのか! そうか、体力チートじゃなかったのか……」

「母さん、貴方も転生者なのか？」

私はその言葉に頷く。

「私もまた、転生者。司るは、出産。どのような子供達を産むか、選択する事が出来ます。男の子を産みたいとか、母親に似せたいとか、後は多少強化出来るわ。ですが、私は強力な力の子を産み過ぎました。それゆえ、貴方達に協力して欲しいのです。シルフィスとシルバードには、能力を封印する力を授けております。貴方達の力で成長させ、シルフィスとシルバードの力を持ってして、我が子の力が暴走した時に抑えてほしいのです」

「それで、俺にはどういうメリットがつて痛い！」

「グリフィス！ それはないだろ」

グローレンがグリフィスを殴る。そうだ、私も最初はこれぐらい無邪気だったと微笑む。

「最も力を抑えてほしいウエンドントとウエザー家、シャドー家は王族と名家。衣食住の心配はしなくていいわ。けれど、調子に乗って多くを望み過ぎては駄目よ。貴方達の力は本来忌まれた力だし、偏見もあるでしょう。それに、私みたいに大ごとになって、多くの人を巻き込むようになっては駄目」

「母さん、能力を抑えるって事は、能力者がいるんだよな。どんな人達がいるんだ？」

「紹介するわ。でも、名家の子達ばかりだから、失礼の無い様にね。」

さ、二人を成長させて」

グローレンとグリフィスは、あーでもない、こーでもないと言いながらシルフィスとシルバードを成長させる。

5歳ほどまで成長させて、二人は肩で息をした。

「とりあえず、それでいいわ。シルフィス、シルバード。話は聞いていましたね」

「はい、お母様！」

「うおおお、強力な能力者のおにやのこの抑えになる俺、かつけー！」

「なんてこった、能力者ハーレムか！？ 羨ましすぎる！ あつてもヤンデレ率高そう」

「ヤンデレバツチ来い！」

そんな愉快な子供達に、汗をかくグリードとシルフィア。私はクスクス笑って、四人を促して庭園へと向かった。

ミケイラとエイブが、家族全員の絵を描くのだと張り切っているのだから。

17話 紹介

ミケイラとエイブが協力して家族の絵のラフスケッチを終えてしまつと、私は自己紹介をする事にした。

「上から言っていくわね。ヴァレンティナ。私の可愛い娘。魔術の才能と、緑を芽吹かせる才を持つわ」

「エルフ!？」

「なんて可愛いんだ……! 緑を芽吹かせるとかテラ乙女!」

ヴァレンティナは、頬を染める。

「次が、バトルミィ。炎を操る騎士なのよ」

「王道だ!」

「かけー!」

「ほ、炎は人を傷つける。そんな簡単に言っなよ!」

バトルミィの言葉に、きよんとする四人。

「え。もしかして、その年になって能力操れないの? 俺ら生まれてすぐに出来たのに」

「ださっ」

「そ、そんな事無い！ と、時々暴走するけど……」

「時々ならいいじゃん」

その暴言に、バトルミィは絶句した。

「そこで俺の順番！」

シルバードが胸を張る。

「ごめんなさいね。バトルミィには、今回は我慢してもらおうと思うの。バトルミィは強い子よ。もっと小さくて、力を必要とする子がいるから」

バトルミィは、はっとウェンダントを見つめた。そして、ぎゅっと拳を握りしめる。

「次がハミルトン。氷を操る騎士なの」

ハミルトンがぺこりとお辞儀をする。

「おー。礼儀正しい所が氷っぽい」

「意味がわからないのですが」

「こ・お・り！ こ・お・り！」

「ロレッタと、その息子のロレンスよ。二人とも、氷を操るわ」

「家の子をお願いしたいのだけど」

「おっぱい！ おっぱい！」

「黙れグローレン」

グリフィスが殴る。

「ルアンナ。妊娠しているの。炎の素養があるから、少し心配みたい」

「うおおおお！！ 美しいお嬢さん、俺に任せて下さい！」

「グローレン、人妻、そして姉だー！」

ルアンナがにつこり笑って剣をつきつける。

「ああ、ルアンナは家族の中で一番強い剣士だと思うわ。気をつけてね」

「先に行って下さい、お母様……」

ガクブルする四人。

「ドランよ。竜族の子」

「ここに、これ生んだんですかお母さん、いやお母様！」

「チートにも程があるだろ！」

「ふふふ。ドランの小さい頃はこんなに小さな卵だったのよ。後で

乗せてもらって空の散歩はどう？」

「男乗せるのいやー」

「まあ。うふふ」

ドランの言葉に、笑ってしまう。ずいぶんとおませな子に育ってしまったようだ。

「ミケイラとエイブ。絵の才能があるのよ」

「見た見た！俺ネーム描くからさ、漫画描こうぜ、漫画。漫画チートしたい」

「良くわからないけど、良いわ。皆が幸せに暮らすのに協力してくれたらね」

「ミケイラがするなら僕もするよ」

「絵本や小説もありだね」

早くもはしゃぎ出した子達を宥めて、次へ行く。

「レインール。とても頭がいいのよ。宰相の子だから、いずれは文官として出世するでしょうね」

「すげー！」

「あの！内政チートの案があるのですが、ぜひ見て頂きたい！」

「作物も文化も何もかも違うから、ちょっと難しいわよ?」

「やってみなければわからない!」

私の言葉に、シルバードは楽しそうに告げる。

「まあ、聞くだけ聞いて駄目だしする位ならいいけど……」

「よっしゃあ!」

「ウォルトとウォルター。教師の才能があるわ。潜在能力を自在に引き出すの」

「かつけー! 俺の隠された力も開放してくれ!」

「言われなくても、封印は出来るようになってもらわないとね」

「ミラール。次期当主であり、私の分身よ。そして、貴方達の上司。きちんと従ってね?」

「ミラールです。貴方達のお仕事は、私の子供達、兄弟達の補佐。お願いね」

ミラールは優雅にお辞儀して、お願いする。

「わかりました、姫!」

「そうか、俺達当主じゃないのかあ……」

「わかりました」

「姫君の為なら火の中水の中！」

口々に言う四人に、クスクスと笑う。

「ナイト。雷を司るわ」

「見たい！ 見たい！」

ナイトが手をバチバチとやると、拍手が沸き起こる。

「エリザベス。獣を操る力を持つわ」

エリザベスが鳥を集めて見せると、可愛いを連呼する四人。

「シャーロット。大地を操るけど、大地の力を使った癒しが一番得意ね」

「聖女様——！」

「そのおっぱいで癒されたい……！」

「ウエンドアント。大地そのものを自在に操るわ。この子のサポートを、どちらかにお願いしたいの」

「何それ怖い」

「大地そのものって……最強じゃないですかー」

「俺行っても良いよ」

シルフィスの気楽な言葉に、ウェンダントは目を見開く。シルフィスに恐れの色は無かった。

「アストレンジ。鉱石を司るわ。わかりやすく言えば、金鉱脈を自在に作れるって事ね」

「リアル金の生る木キタコレ」

「盗賊ほいほいかー」

「市場崩壊」

「チートすぎる……」

「レヴィー。未来視の力を持つ。ただし、それは寿命を削るわ」

「こんな可愛い子が寿命を縮めるとか悲劇すぎる」

「わかった。俺がこの子の力を封印する。そしてラブラブする！」

「兄妹だっつの」

「ウィルアとサイラス。風の騎士の才を持つわ」

「風って言うとナンパなイメージあるけど、真面目そうだな二人とも」

「レオンよ。光の騎士、軍師の才能を持つわ」

「光の騎士なのに軍師なの？ 軍師って、聞つて感じがする」

「だよなー。神々しいんだか腹黒なんだか……」

「ディアナ。植物を操り、ステータスを見る事が出来るわ」

「エ・ル・フ！ エ・ル・フ！」

「農業チートキタコレ」

「ロビーとポーラ。雷と頭脳の素養を持つわ」

「あ、あの。私の力も封印して下さい」

「ポーラかわええええ」

「うふふ。もう人妻よ」

「お、弟は許さんぞー！」

「生まれたばかりの子が何を言っているんだか」

「ドーンとドルフ。武器の効果付与の力を秘めているわ」

「なんですと！ 素晴らしいぞ、二人とも！」

ドードーが歓喜する。

四人は口々に武器を作つてほしいとお願いした。

「ふふふ。剣の特訓は実際にやってみるときついわよ」

「ハリーとアメール。天候を操るわ。効果範囲で言えば兄妹最高かしら。この子達も見てほしいわね」

「遠足がいつでも晴れだな！」

「そしてマラソン大会はいつも雨だ！」

ハリーとアメールは笑顔になる。

「シャルア、シャロス、シャロン。影を操るわ。この子達も心配ね」

「ぎゃああ影に食われる——」

「ああつグローレン大丈夫かー！ シルバード、シルフィス、封印しろ封印！」

「カトリーヌ、カトラス、ヒーラ、ヒール。癒しの力を持つわ」

「回復役は必要だよな。ていうか、全方位抜かりなしですね、お母様」

「そして、グリフィス、グローレンが成長と転生を司り、シルフィスとシルバードが封印を司るの。大体わかったかしら？」

「覚えきれません……」

私は、笑って子供達に告げた。

「じゃあ、力のテストをしないとね。シルフィス、シルバード、準

備は良い？」

「え？ はい」

「何かするの？」

「じゃあ、皆。力を引き出して。シルフィスとシルバードは封印で、ウォルターとウォルトはその補佐ね」

「よし来た！ …… ってギャーーーーー」

「土怖い炎怖い氷怖いっていつか最初だから手加減してー！」

そう言いながらも、力を発現するシルフィスとシルバード。

もちろん、私とミラールは予め退避済みだ。

光の結界が張られ、その中の子供達の力が消えうせるのを見て、私達は満足して頷いた。

家族の揃った光景に、今までの軌跡に、私は知らず涙を流していた。

ミラールはそれを拭い、横に並んで寄り添ってくれる。良い子達に囲まれ、私は幸せ者だ。

その後、シルフィスとシルバードの提案により、能力者の寄宿学校が作られる事となる。

世界で最も権威のある学校の登場だった。

最終話（前書き）

随分と短くなってしまいましたが、これにて完結です。

最後がどうにも締まらないのはどうにかしないといけないですね。

けれど、書きたい事は書ききりました。まさかミラー完結できるとは思わなんだ。

最後に、今日中に登場人物紹介を更新します。これが本当のエピローグになるのかな？

明日、覗いて見て下さい。

最終話

？

神殿の舞台の上、ミラールが、荘厳な衣装を着て、両手を広げる。シルバードとグローレンが両隣りに立ち、子を掲げた。

大勢の民が祝福してくれている。

ミラールは双子の女兒を産んだ。私の能力を持つ、三代目の子を。こうして、私の能力は、受け継がれていくのだ。

私は涙ぐみ、それを見つめていた。

カトルが、私をそっと抱き寄せる。

「君は、いつも子を奪われる立場だったけど」

悪戯っぽく、カトルは笑う。

「今度は君が奪われてしまうわけだ。大人気で困ってしまうね？」

「皆が幸せならいいわ」

私はそっとカトルに寄り掛かる。

これから、私は普通の子だけを産んでいく事となるだろう。

私は役目を終えたのだ。

どの子も、立派に、そして幸せに巣立ち、今も育っている。

私に未来視はないけれど、はっきりと能力者の時代が来るのが見えた。

この地は、私の血筋の者で満たされるであらう。

そしてヨランダ様の名はこの大陸に知れ渡る。

私は、契約を果せただろうか？

私をここに呼んだ神は、満足しているだろうか？

私はカトルと共にそつと抜け出した。もう、ミラールには私は必要ない。

ミラールはヨランデ様の巫女であり、神官長であり、国家よりも権威のある能力者の学校の校長だ。私よりも遥かに立派に育ってくれた。

外では、ドランが背を差し出していた。

「お腹を冷やさぬよう、気をつけて」

そして、私とカトルは神聖王国へと帰って行った。

私は王妃となり、その後も子供を産み続けた。そして、子供達に囲まれて寿命で人生を閉じたのだった。

私は、真つ白な場所で、二人の女神と対面していた。
私は深くお辞儀をする。

「ありがとうございます、神様」

「望むなら、子孫として生まれてみるかえ？」

クスクスと神は笑う。

私はゆるゆると首を振った。

「記憶を返し、輪廻の輪に戻ります。幸せな人生に、感謝を。ああ、

たった一つ、聞きたい事が」

「何かえ？」

「私は神様のお役に立てたでしょうか」

二人の女神は笑って頷く。

「良かった。それだけ聞ければ、もう思い残す事はありません。ありがとうございます。そして、さようなら」

「良い旅を、ミラール」

私は深くお辞儀をして、空気に溶けていく。

ああ、私は幸せだ。子供達の顔が次々と浮かぶ。

願わくば。幸せになってね。

私の愛しい子供達。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4590u/>

ミラールの子作り日記

2011年10月4日20時30分発行